

文部科学省医学教育共同利用拠点

第2期拠点事業

「医療者教育フェローシップの構築：体系的FD・研究支援・

メンタリングを融合した新たなFDの全国展開」

中間評価報告書

2018年3月

医学教育共同利用拠点

岐阜大学医学教育開発研究センター



中間評価報告書刊行にあたって

岐阜大学医学教育開発研究センター（Medical Education Development Center: MEDC）は、医学教育分野で初の全国共同利用拠点として2001年4月に設立されました。

当センターにはテュートリアル部門とバーチャルスキル部門があり、教員7名と事務職員、教務補佐員が一致協力して運営にあたっています。問題基盤型学習、コミュニケーション教育、シミュレーション教育、多職種連携教育などの推進を図るとともに、毎年4回「医学教育セミナーとワークショップ」を開催し、これまでに累計67回、9100名以上の方に研修の場を提供して来ました。医学のみならず、歯学・薬学・看護・リハビリ・口腔保健・鍼灸・事務職員などの幅広い教育指導者とスタッフの研修支援を行っています。また、国立大学医学部長会議常置委員会と全国医学部長病院長会議の委託で毎年1回開催している国公立大学医学部・歯学部 教務事務職員研修も今年で第18回を迎えています。また、カナダ、イギリス、アメリカ、ドイツ、オランダ、マレーシア、タイ、韓国、台湾、オーストラリアなどから客員教授を招聘し、海外ネットワークも広げています。こうした取組が評価され、平成22年4月に文部科学省から“医学教育共同利用拠点”として5年間認定を受け、平成27年からはさらに第2期の5年間の認定継続を受けることができました。

第2期の拠点事業は「医療者教育フェローシップの構築：体系的FD・研究支援・メンタリングを融合した新たなFDの全国展開」ということで、第1期が多職種連携教育をメインテーマにしたことを受け、第2期はアソシエイト／フェローシップを拠点事業の軸として活動展開を行っています。アソシエイトは「医学教育セミナーとワークショップ」に参加することで単位を得て、一定の枠組みの中で単位をそろえればアソシエイトとして認定される仕組みで、単位認定を励みに楽しくセミナー＆ワークショップに参加しながら、単位を集めてアソシエイト資格の認定が受けられるものです。さらにアソシエイトに追加してe-LearningとスクーリングによるMEDC医療教育トータルラーニングコース（メドギフト）のモジュール1～3の参加でMEDCフェローの資格認定も受けられ、既に40名のアソシエイト、13名のフェローシップ認定者が誕生しています。また、この仕組みが追い風になってセミナー＆ワークショップ参加者自体も増加傾向にあります。

今回はこの第2期の拠点事業の中間評価を、学識経験者のみなさまに客観的な立場から外部評価として実施していただきました。お忙しい中、多大の時間を割いていただき貴重なご意見を頂きました小西靖彦先生（京都大学・日本医学教育学会副理事長）、関本恒夫先生（日本歯科大学新潟生命歯学部・日本歯科医学教育学会理事長）、羽田貴史先生（東北大学・大学教育イノベーション日本前代表）に厚く御礼申し上げます。また、この間、拠点事業にご協力とご指導を頂きました全国の皆様に心からの感謝を申し上げます。

本報告書をご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

平成30年3月

岐阜大学医学教育開発研究センター長 藤崎和彦

目 次

中間評価結果	1
中間評価 議事録	7
中間評価資料	45

中間評価結果

平成 30 年 2 月 26 日

外部評価委員

羽田 貴史

関本 恒夫

小西 靖彦

MEDC 第 2 期の活動を、優れたものであると総合評価する。

岐阜大学 医学教育開発研究センター（以下 MEDC と略する）は、医学教育共同利用拠点としての第 2 期事業に入り 3 年目になる。MEDC の創設以来、MEDC ワークショップは 67 回を数え、のべ 9,100 名の参加者を迎えた我が国最大の医学教育ワークショップとなっている。

第 2 期事業では、このワークショップに Associate、Fellowship の構造を付加して医学教育をさらに学びたい者へのステップを構築した。参加者がニーズに沿って受講できるシステムとなっており、2015 年から 2017 年までの第 2 期の参加者は 2,064 名を数えている。

Associate/Fellowship 制度は教育者のモチベーションを向上させ、発想としてすばらしいプログラム構築がなされており高く評価する。

Fellow 認定の要件となっているメドギフト(MEDC GIFU Total Learning Course)は Web による議論が中心となり、医療の現場で忙しい参加者が都合の良い時間に参加できる環境を構築し、議論の活発化を促進している。我が国で求められる多職種での学習が実現していることも評価する。

今後は新たなモジュールの検討と Associate/Fellowship 参加者に対する継続的なキャリア支援ならびにキャリア確立に期待する。そのためにも、Fellowship 修了者への目に見える資格(Certificate など)や医療者教育学修士コースへの展開が望まれる。また、これまでの医療者教育の大きな実績を定式化し、教科書などを上梓することによって更に多くの医療者の教育ニーズを満たすことが期待される。

MEDC が継続的に発展していくためにも、第2期の成果(アウトカム)を示す指標をもち、アウトプットを確認していく必要がある。すばらしいプログラムが持続可能であるために、経済的に自立したプログラムを目指すことも必要である。

1. 医学教育開発研究センターの通常活動について	
(評価)	4. 特に優れている 3. ○優れている 2. 改善を要する 1. 特に改善を要する
優れた点	改善を要する点、今後に向けての意見・期待する点
拠点事業であるうえに大学からの支援もしっかりしており、教員組織が分厚く、豊富な活動を支えている	今後も優れた拠点事業として継続できるように、今から次期を考えた事業計画をたてるべきである
MEDCワークショップは67回(のべ9,100名の参加者)を数え、地方でも開催するなど医学教育に触れる機会を作っているわが国で最も成功した医学教育を学ぶための事業である	続く第3期に何をすべきか、第3期には何を「アウトカム」とするかを織り込んでおくことが望まれる 継続的に事業を行うにあたり、受講料の徴収など、今後の経済的な面についても検討の必要がある
第1期事業では他職種連携のテーマで筑波・昭和・名古屋大学の医学部、広島大学の歯学部などと活動し、実績を出している	最終段階はもう一段高いところ(修士課程)を提供してほしい
第2期事業ではMEDCワークショップから続くAssociate、および医療者教育Fellowshipの構築を行ない、前者は40名、後者は13名である 他に体系的なFD、メンタリング、研究支援を融合して医学教育に関する多面的な事業を展開している	そのためにも「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の各大学(25)の成果を取り込むなどして「医療における多職種連携の理論及び教育論」を確立し、医学教育カリキュラムでの位置づけを明確にしていく必要がある
第2期事業では医師以外に、看護師、歯科医師、薬剤師、リハビリ技師など多彩な医療者が教育を学ぶ体制をとっている	筑波大学の「多職種連携教育コース」は極めて類似したコンセプトであり、参考としてはどうか
ワークショップ(MEDC)参加からAssociate、Fellowshipへと段階的な医学教育を学ぶ機会を提供しているのはわが国では唯一のものである	医学教育コア・カリキュラム(H28改訂)でも、チーム医療は医師の資質・能力にはあるものの実習などでは取り組みが十分でなく、本事業が求められることは大きい
アソシエートの方式を採用してからMEDCワークショップの参加者が増えている	
MEDCワークショップの成果は、「医学教育の流れ」という冊子体として、毎回記録が残されている	
国内外から客員教授を採用し、医学教育に関する活動を継続的に行なっている	
国内の教務事務職員研修を継続的に行い、我が国の医療者教育に対して、事務方からの支援を確実にしている	
MEDCのコンセプトとして、すべての医療者は教育を考えるべきとしている	
MEDCセミナーは2,000円の参加費を徴収しており、拠点としての補助だけでない自立した財務の観点からは望ましい	

2. 医学教育開発研究センターの医学教育関係共同利用拠点第2期の取り組み	
(評価) 4. ○特に優れている 3. 優れている 2. 改善を要する 1. 特に改善を要する	
優れた点	改善を要する点、今後に向けての意見・期待する点
GP以後共同利用拠点となつてからも、医学教育開発研究センターのターゲットが明確であり、医学教育を学ぶことの「見える」化されている	特にフェローシップを修了した者にとって資格が見えることが望まれる(大学のCertificateなど)
多職種による医学(医療者)教育コースが設けられ、お互いに教育について学び合う構造ができている	大学の存在意義のひとつは、後継者を作ることなので、ぜひ資格化につなげてほしい(現状では120時間に届かないのではないかと?)
現場にフォーカスを当て、理論と実践を両輪としているのは素晴らしい取り組みと考える	将来、MME(Master of Medical Education)あるいはMHPE(Master of Health Professional Education)に繋げる素地ができていると考えられる
参加者の多様性が高く、「北海道から沖縄まで」「多職種であること」「多様な年齢」などの特徴がある	今後、医療者修士へ発展した場合、Fellowshipでの学びが単位互換できることを考慮すべきである
すべて社会人の参加者であり、病院からの参加者が多い	e-ラーニング中心のプログラムでは、フィードバックをどのように行うかが重要である 実際には、主催側(教員側)からのフィードバックより参加者同士のPeer Feedbackの重きが高くなっている
モジュール1、2、3があり、教育について総合的に(学習法、評価法などのパーツでなく)学ぶ 1は医療現場に即した点、2はそれをつなぐ生涯教育や継続的な能力開発などの線のイメージで、1・2を済ましてから3の総合的モジュール(さらにアカデミックへ)に移る	on lineでは、参加者にずれが生じることは時にあるが、(MEDC側からの)介入は行なっていない
「現場での医療者教育」に焦点が絞られており、参加者が医療者教育の知見や話し合いから得た学修内容をすぐに現場で実践する考えが浸透している	Face to Faceの機会が少ないことが、参加者の繋がりを薄くしている可能性がある
Web上(掲示板のようなもの)で情報共有を行なっていることが、若い参加者にとって時間が自分の希望通り使える利点があり、議論が盛り上がっている 1課題あたりの発言回数(ネット上)は50~60回程度である	同窓会(修了者)の集まりや、振り返りによるアウトカムもその一つかと考えられるので、ぜひ修了者が集う機会を創出して長期フォローを行なしてほしい
オンライン発言の内容、発言回数、ワークショップへの参加とアクティビティ、レポートのプロダクトなどから評価をつけている	第2期が終わると、予算措置が切れるので自立した事業継続のための財務構築が望まれる
参加者の3分の1は現場の医療スタッフであり、理論と実践が近い 専門性が高い現職なので、課題が特定しやすい	第2期の成果(アウトカム)、アウトプットを示す指標をもっておくことが望まれる Fellowshipの修了者が周りの医療教育にどんな効果を与えたか、医療の質の向上にどのように貢献したかが問われる(数値化など難しい面が多いが)
MEDCセミナー参加者を全員登録制としたIDを持っているので、追跡が可能となっている	修了率は80%くらいである Module1&2から3に進んでいない者が一部にいる

3. フェロシップ受講者(第2期事業修了者)とのインタビュー	
(評価) 4. 〇特に優れている 3. 優れている 2. 改善を要する 1. 特に改善を要する	
インタビューで聴きとった点	インタビューで感じたこと、次に活かすべきと考えたこと
全国的展開、男女、バックグラウンドなど多様性に配慮して参加者を選抜している	医学教育(医療者教育)の全体像を示して、全体としてどの程度の項目と量を学ぶのかが学習者にわかるほうがよい
・卒後14年の男性外科医師(学生・研修医教育を地域の診療所で行なっている) ・大学の薬剤部で活躍している女性薬剤師(薬学部6年化によって学生教育の重要性が増している)	顔を合わせる機会がもう少しある方が、横のつながりがよくなるのではないかと
参加のきっかけは 1.MEDCに参加していたから 2.MEDCに詳しい模擬患者さんから紹介されて	Follow up sessionのような同窓会などを持つことは、今後の組織づくりに繋がると考えられる
MEDCワークショップ参加から次の段階を考えてフェロシップに入った→この流れはMEDCの強み	薬剤師のフェロシップ修了が博士課程進学に向かっていることは一面で望ましいことではあるが、フェロシップが「資格」としてまだ確立していないことを示してもいい →医学(医療者)修士の構築が喫緊と考える
医師の方は、フェロシップで学んだことを現場に戻って活かせることが多い(フィードバック、active learningなど)	一方で修了して得る資格は重要で、現場のFellowshipでも「履修プログラム」修了を満たすことを考えてはどうか
フェロシップでは「ソフトなところをどう教えるか」についてがとてもよくわかった	
フェロシップは「入りやすさ」という面では抜群だと思う	
時間が限定されないので、参加しやすい ほとんどは夜間にネット上の掲示板を読み書きする	
学生に土台(思考の)を教えられるようになったと思う	
多職種での学習には違和感はない むしろ医療者としての共通点を多く感じた 例えば看護師教育などでTeam Buildingを学んだ	
修了後のFollow up sessionのようなものはない (MEDCへの参加で、同窓生と会う機会はある)	
薬剤師の修了生は、さらに学びを深める目的で「博士課程」に進学を予定している	
リサーチについてはフェロシップだけでは不足だと思うことが博士課程進学の一つの理由である	

中間評価議事録

岐阜大学医学教育開発研究センター中間評価

会議日時： 平成 30 年 2 月 2 日 13 : 00 ~

場 所： 岐阜大学医学部本館 8 階 8S15

スケジュール

- 13 : 00 集合
医学教育共同利用拠点第 2 期の活動についてのプレゼンテーション
- 13 : 30~ 質疑
- 14 : 00 フェロウシップ、アソシエイトプログラム 参加者インタビュー
廣田俊夫先生、猪田宏美先生
- 14 : 40 休憩
- 15 : 00~ 評価委員 3 名で評議
- 15 : 30~ 16 : 00 再質疑、概略講評、今後改善へのアドバイス

評価委員

京都大学 医学教育・国際化推進センター センター長, 教授

日本医学教育学会 副理事長

小 西 靖 彦

日本歯科大学新潟生命歯学部教授

日本歯科医学教育学会理事長

関 本 恒 夫

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

大学教育イノベーション日本 前代表

羽 田 貴 史

フェロウシップ、アソシエイトプログラム 参加者

関市国民健康保険津保川診療所所長

廣 田 俊 夫

岡山大学病院 薬剤部薬剤主任

猪 田 宏 美

中間評価 議事録 2018.2.2

出席者

中間評価委員：京都大学 医学教育・国際化推進センター センター長, 教授
日本医学教育学会 副理事長 小西靖彦
日本歯科大学新潟生命歯学部教授
日本歯科医学教育学会理事長 関本恒夫
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
大学教育イノベーション日本 前代表 羽田貴史

インタビュー対応者：MEDC フェロー認定者
関市国民健康保険津保川診療所所長 廣田俊夫
MEDC フェロー認定者
岡山大学病院 薬剤部薬剤主任 猪田宏美

医学教育開発研究センター：藤崎和彦センター長、鈴木康之、丹羽雅之、西城卓也、
川上ちひろ、今福輪太郎、恒川幸司、北野敦子

13:00～ プレゼンテーション、質疑

【藤崎】 今日では中間評価ということで、わざわざおいでいただきどうもありがとうございます。まず自己紹介ということで、MEDCのセンター長をやっております藤崎です。よろしくお願ひします。

【鈴木】 前のセンター長をやっておりました鈴木康之と申します。よろしくお願ひいたします。

【藤崎】 医学教育学会の理事長です。

【丹羽】 MEDCの丹羽です。どうぞよろしくお願ひします。

【藤崎】 薬学の関係が専門です。

【西城】 准教授をやってます西城と申します。どうぞよろしくお願ひします。

【川上】 川上です。よろしくお願ひします。

【藤崎】 看護の先生です。

【今福】 併任講師の今福輪太郎です。よろしくお願いします。

【藤崎】 教育学の専門です。

【恒川】 恒川です。よろしくお願いします。助教です。

【北野】 事務の北野です。よろしくお願いします。

【藤崎】 では、評価員の先生、お願いします。

【小西】 京都大学の小西と申します。医学教育推進センター、去年から名前に国際化が追加されてちょっと大変ですけれども、医学教育・国際化推進センターという所で教育に携わっております。医学教育学会では鈴木先生の下で副理事長を務めております。どうぞよろしくお願いいたします。

【関本】 日本歯科医学教育学会の理事長を務めています関本と申します。勤務は、今、日本歯科大学の新潟生命歯学部です。

【羽田】 東北大学の羽田でございます。医学部の分野の人間ではないのですが、こういう能力開発とか、それから、拠点事業も今年で8年目かな、色々と同じ苦勞をされていると思いますので、そういう立場からお話しをお聞きしたり、また、何か有益な話でもできればいいと思います。よろしくお願いいたします。

【藤崎】 それでは、今回は、フェローアソシエイトの参加者に少しお話をしてもらおうということで、岡山大学から猪田先生に来ていただいております。

【藤崎】 赤いのを広げていただいて、本日のスケジュールですけれども、30分ぐらいでMEDCの活動と、特に、2期の活動について簡単にお話をさせていただきたいと思います。その後、30分ほどディスカッションと質疑をいただきます。今、言ったように、フェローとアソシエイトが2期の目玉になっているのですけれども、実際eラーニングで参加していただいている、岡山大学大学病院の薬剤師さんの猪田先生と、それから、今こちらに向かっている、岐阜の診療所でドクターをやっている廣田先生のお二人に20分ずつぐらいでインタビューをしていただこうかなと思っています。

インタビューでは僕らは抜けて、猪田先生と廣田先生で色々とお話をざっくばらんにしていただければと思っています。その後、2時40分ぐらいから休憩ということですがけれども、羽田先生が3時過ぎに出られるということで、少し打ち合わせをしていただいて、少

し前倒しでも結構ですので、最後、再質疑、概略講評、今後へのアドバイスということをお願いしたいと思います。

先生方には、評価者のご意見を書いていただく紙を用意しております。机の上に置いてあると思うんですけども、それに書いてもらったものと、それから、録音はそこでさせていただきますけれども、その出てきた意見を元に、こちらでまとめてアブストラク的な報告書みたいなものを作らせていただいて、それをお三方に送って直していただこうと思っています。ただ、一応、お三方のどなたがまとめ役になるかを決めていただければというふうには思っております。

それでは、資料のほうを説明させていただきます。最初の赤い冊子ですが、赤い所のページの所はパワーポイントで、これからお話しする事業の概略についてが、その後、ピンクの所をめぐっていただいた所に、これは1期の拠点のときの報告書があります。オレンジのページの所では、現在進行中の2期の拠点の申請書があります。一応、黄色いページが拠点認定がもらえましたという紙媒体で、それで、黄色い所が平成27年度ですね。拠点の1年目、2期の1年目の報告書。緑の所が去年の2年目の報告書。濃い緑のほうが今年の実施計画書というような具合に、2期についての報告書と計画書が出ております。

このエメラルドグリーンの中で、実際、フェローアソシエイトのeラーニングでやっています画像のサンプルが出ています。それから、次の水色の所で実際のモジュール1のガイドブックと、それから、こんなプロダクトが出ていますという例ということで、島根の佐藤さんのeラーニングに出ての最終的なプロダクトをパワポ提出例として示して、あと、評価シートがこんな感じでフィードバックしていますというのと、不可だった人についての評価シートも出ています。

同じように次の所の、モジュールは三つあるんですけども、モジュール2についてのガイドブックとプロダクトと評価シート。それから、ブルーの最後の所はモジュール3というところで、そのガイドブックとプロダクトと評価シートということです。一番最後の所でフェローシップの参加者のどうだったかという意識調査が載っています。そっちがこの赤いファイルの中に書いてあります。

机の上にあるものでございますけれども、左側にMEDCのパンフレットがありまして、それから、今のフェローとアソシエイトのパンフレットと二つあります。それから、去年と一昨年の年報も左側に置いてあります。真ん中のは、1期目の拠点事業が多職種連携だったので、1期目の拠点事業の報告書と、それから、SDということで、国公私立大学医学部・歯学部教務事務研修というのを毎年1回開催しておりますので、その2期目に入ってから一昨年、去年、今年の報告書がそこに載っています。

それから、右側ですけども、年4回セミナー&ワークショップを春、夏、秋、冬開催しておりますが、拠点の2期が始まった56回からのセミナー&ワークショップのポスターということで、どんなメニューでどんなワークショップをやっているかというのをこの間、今年の冬の早稲田が終わりましたので、4回ずつ3年分、12回分のポスターが載って

おります。

そのセミナー&ワークショップの報告書を中心にして、医学教育の流れという冊子にして、年間4回発行しており、その近々の号も右のほうに付けさせてもらっています。セミナー&ワークショップの中で使用したパワポは、一番後ろのページにCD-ROMが入っておりますので、それで参加者はレジュメとかも確認できるようになっております。

それでは、最初の1枚目のパワポに基づいて、少し拠点の事業をご説明させていただきたいと思います。それでは、前のほうをお願いします。岐阜大学の医学教育開発研究センターは、2001年の4月に医学教育分野で初の全国共同利用施設としてつくられました。2010年から文部科学省から高等教育の教育関係共同利用拠点ということで5年間認めていただいて、2015年から2期目ということになっています。今年は2期目の3年目で、拠点事業についての外部評価者による中間評価を実施ということになっていましたので、今回、先生方に来ていただいております。

センターの組織の位置付けと運営。一応、この中にもざっくりと書いているんですが、基本的には医学部の組織のセンターで、われわれは医学部教授会のメンバーになっておりますが、最初は医学部の下にぶら下がっていたんですが、拠点に認定されてから全学の下にぶら下がるようになって、中途半端な感じにはなっております。

大学院医学系研究科の博士課程もわれわれは兼任していますので、博士の学生を指導しているということです。運営は濃い緑色の今年の実施計画書の3ページ目の所に出ています。学内の運営委員会というのと、それから、全国共同組織ということで、学外の運営協議会ということで、その二つの組織によって運営を見ていただいていることになっています。スタッフですけれども、教員は2講座6人ということになっていますが、今は教授が3と准教授が1と併任講師2、助教1ということで、文科省の補助金で1名プラスカウントで7人ということで、それから、教務補佐のスキルスラボのお手伝いをする歯科医の先生ですけれども、1名がスタッフとしています。事務のスタッフは係長の北野さんは常勤で職員ですが、それ以外に非常勤職員が4名おります。それから、客員教授の仕組みということで、国内で1名、国外で1名、今、国内は筑波大学の医学部の前野先生になっていただいています。国外は3カ月間招へいして滞在ということになっておりますので、毎年、年に1回来ていただいて、なかなか3カ月ずっといていただけるっていうのは難しかったです。

大学院生は全て社会人で、北は北海道から南は沖縄まで11名おり、このあいだ、1人博士を修了し、来週、授与式になっております。2人目の博士です。

医学教育セミナー&ワークショップですけれども、毎年4回春夏秋冬に開催します。1泊2日か2泊3日で、参加者は医療系の教員などということですね。プラス、医療現場の指導者ですね。看護とか、リハビリとか、薬学も含めてですけれども、指導して、それから、学生や模擬患者さんという、市民のボランティアさん等も参加されていて、通算67回、延べ9100人ということで大体140人とか130人かな、年間400人から500人ぐらい

が全体の大ざっぱな参加者の平均ということです。基本的には2回はこの岐阜の地で開催していますが、岐阜ばかりでやっていると近所の人しか来れないので、1回は首都圏で、1回は地方で、岐阜以外の開催のときは他の大学や機関と共催する形で医学部だけではなくて、歯学部とか薬学部とかもそうですし、この間の冬は医療系の学部がない早稲田大学とコラボして、連携して開いております。

それと同時に、先程ちょっと言いました教務事務職員研修を、国立大学医学部長会議の常置委員会と、一般社団法人の全国医学部長病院長会議の委託を受けて、毎年1回、今年で18回目になりましたけれども、行っています。2泊3日の日程で、大体通常40名から50名ぐらいの参加者です。他の学部も教育改革がどんどん進んでいるのですが、医学部、歯学部なんかの場合は特に臨床実習のOSCEであったりとか、いろいろ変化が大きいものですので、それをちゃんと理解してもらおうというような意味合いと、それから、教務事務の人たちが全国でネットワークをつくって、経験交流したり悩みをシェアしてもらおうよう、参加者はメーリングリストを作って終了後も情報共有をしていただくようになっております。

第1期は、多職種連携教育を2011年から2014年の4年間、プログラム開発ということで、先程の緑色のこの冊子ですね。1期の多職種連携教育の報告書の、最初の目次を見ていただいたら、岐阜大学だけじゃなくて、筑波、昭和、名古屋大学の医学部、それから、広島大学は歯学部ですね、小川先生ですね。それから、地域医療振興協会は、これは、卒後教育です。卒後の地域で医療をやる先生たちの教育での多職種連携、というような形で取り組みました成果が一応出ております。これが1期です。

2期は、医療者教育フェローシップの構築、体系的なFD、メンタリング、研究支援を融合した、新たなFDの全国展開を5年間ということで、アソシエイトとフェローの制度を進めております。どういうことかという、このピンクの資料を大きく広げていただくと、医学教育セミナー&ワークショップの中で、拠点の最近のほうを見ていただいたら分かりますけれども、ワークショップとかセミナーにそれぞれMLとか、Aとか、TLとか、Rという頭文字が付いているんですけれども、これは、セミナー&ワークショップに参加するとポイントが付くという仕組みになっていて、なおかつ、その教育方法ですね。ティーチングラーニング、評価(アセスメント)、カリキュラムディベロップメント、それから、運営/リーダーシップ(マネジメントリーダーシップ)、それから、リサーチですね。その5領域で必要なポイントを満遍なくためられたら、合計3単位でアソシエイトに認定するという仕組みで、従来はただ勉強になるからセミナー&ワークショップに参加するということだったんですけれども、ポイントをためるのを楽しみに、満遍なく学んでもらうというか、楽しく参加してもらおうというようにアソシエイトの仕組みを作りました。

それから、その右隣の所のフェローシッププログラムですが、そのアソシエイトの単位プラスメドギフトというeラーニングを、モジュールは三つあります。モジュール1とモジュール2は、eラーニングとスクーリングの仕組みで、セミナー&ワークショップに合

わせてスクリーニングをやっています。モジュール3というのはスクリーニングなしで、eラーニングだけですけれども、この三つの単位を修了していただくと、さらにアソシエイトの上のフェロースhipというようなサーティフィケーションを発行する仕組みになっております。

アソシエイト認定者が40名ということになりましたので、メーリングリストを作りました。メンタリングじゃないですけれども、いろんな悩みの共有をしていこうというような形で考えております。現時点ではアソシエイトは40名、フェローは13名ということがあります。

あと、3期へ向けては、医学教育修士課程ということで、先程の全体の計画書、オレンジの所の2ページです。オレンジの2期の計画書の2ページのポンチ絵で、今までのFDですね、セミナー&ワークショップの参加者をアソシエイトとフェローという形で吸い上げて体系的にFDを受けてもらうっていうのが2期で、博士の間に、医学教育の専門家養成っていうのは、世界的には医学教育修士っていうのが、医学教育の修士課程が医療者教育ですけれども、世界にも100以上大学院ができていて、日本にはまだできていないので、何とか第3期の目玉として医療者教育の修士課程の設立ということも目指そうと思っております。

メドギフトで、モジュール3というのは、モジュール1とモジュール2が終わった人ということなので、去年までは10人、11人ですが、モジュール1、モジュール2終わった人が増えてきたので、今年は26名ということで、今週から始まっているのかな。そろそろ始まるということで、モジュール3まで終わった人は21名おりますが、アソシエイトのほうがまだ全部そろってなかったりするので、その両方そろった人が18名ぐらいということになっております。参加者の職種はドクターも多いですけれども、ナースや歯科医師、リハビリの人も結構いらっしゃるということですね。それから、3分の2が大学のスタッフ、3分の1が現場の医療スタッフというような内訳になっております。

セミナー&ワークショップの参加者の推移ですが、大体年度計で見ると、400人後半から500人、600人というのがこの間だったんですが、アソシエイトでポイントをとめるという仕組みになってから参加者が増える傾向で、今年は800人の参加者があり、この勢いを来年、再来年も維持しなきゃいけないのか、大変だなと思いつつですが、結果的にはセミナー&ワークショップの参加者も増える傾向になっております。以上です。

では、フェロー、アソシエイトの仕組みの説明を、西城のほうからいたします。

【西城】 よろしくお願いたします。お手元にございますピンク色の帯の表に大まかな概要を書いています、観音開きになっておりますが、開いていただけますでしょうか。そうしますと、アソシエイトとフェローのことについてご説明が書いてあります。アソシエイトは、今、藤崎が申しましたとおり、ワークショップに参加するとポイントが取れるというだけのございますので、もう少し幅広く体系的に勉強してみたいという意欲的な方

のためにフェローシッププログラムを設けました。それが、緑色の縁の所にございます。これは、今まで私どもが提供しておりました医学教育セミナーとワークショップの参加の前に、3 カ月程度勉強するプログラムを作りまして、オンラインでディスカッションをしていただいております。そのオンラインのコースのことをメドギフトというふうに名前を付けて、愛称を付けてやっております。

モジュール 1、2、3 から構成されております。従来の FD ですと、この単位は教え方、学び方、この単位は評価、カリキュラムというふうに分かれていたんですけども、マーストリヒト大学の例を元にして、全部一緒にやるというふうにしています。具体的に後でご説明します。なので、どこの科で評価をやるのかということのはもちろんあるんですけども、より融合的にイベントレビューに組まれています。

実際にどういうことをやっているかということについて、少しガイドブックを参照しながら説明させていただきますと、薄い水色のページの所にモジュール 1 についてのこと、ガイドブック資料がございます。ちょっと濃い所がモジュール 2 で、濃いグリーンがモジュール 3 の資料になってございます。構成はどれも一緒ですので、モジュール 1 を参考に説明させていただきます。開始の 2 カ月前ぐらいに募集をしまして選抜をしております。このガイドブックの 1 枚目は、参加者のリストを掲載しています。これは、参加者に送られているガイドブックでございます。2 枚目がスタッフの紹介になっております。

右隅の所にページ数がございますが、7 ページにスケジュールが書いてございます。必ず最初はモジュール 1、2 もそうですけれども、最初は皆さんどういった取り組みをこのモジュールの内容に関係してやっていらっしゃるかというのを紹介していただく形になっていきますので、キックオフセッションということで、どんな教育実践をやっているか、どんな評価をやらせるかということを把握していただきます。

その後、三つないし四つの課題をワークショップに参加いただく前にこなしていただきまして、その仕上げというわけではないんですが、その学びをさらに使ってアクティブにディスカッションしてもらうことを目的としてワークショップを開催しております。ワークショップから帰られた後、そのまとまった考えとご自身の教育実践をさらにブラッシュアップして、明日からこんな教育をやってみたい、計画立てたものを書いていただくということです。その計画が最後の最終プロダクトという形になっております。

例えば、ガイドブックの 8 ページ目の所に評価が書いておりますので、オンラインの発言の内容とか、発言の回数、それから、ワークショップへの参加とか、参加のアクティビティとか、あとはレポートのプロダクトという視点から評価をつけております。基本的に提出していた方で落ちるという性質のものではございませんが、課題が提出されなかったりとか、ワークショップに来られない方が、中にはご都合でおられますので、そういう方には残念ながら不可という形になっております。なので、参加していただくようには工夫しています。

実際に何をやっているかというのは、11 ページ目からございます学習課題ということで、

簡単にご説明しますが、キックオフセッションというところでは、教育の現場とか、場とか、学年っていろいろ違いますよねっていう話を、12 ページですね、そういったものでこんなことをやっていますみたいな報告をしていただくという形。課題の1は、意味のある学びってというのはどんなものかっていうことを聞いて、学習者の特性について学ぶ課題を出していただいています。大体この課題について1週間ぐらいで作っていただきまして、パワーポイントにまとめて提出いただくと。その後、続く1週間はフラッシュトークといって、お互いのプロダクトを読んで意見交換をするという仕組みになっております。それがずっと課題1、課題2、課題3と続くということです。例えば、このモジュール1の課題1は学習についてで、課題2は評価に関係することも入ってまいりますし、課題の3はカリキュラムになっていますので、一つのモジュールの中でいろんなものをトータルで学ぶという仕組みです。

あとは、後半のほう、18 ページ、19 ページに引用の文献がございます。基本的にオンラインでオープンになっているリソースを活用していただいています。岐阜大学で取得できた参考資料を提示してもよろしいんですけども、著作権的にぎりぎりなので、基本的にはオープンになっているリソースをベースにしていますので、例えば、普通に公開されているようなサイトとか、ブログだったりとか、いろいろなものを幅広く活用させていただいております。

具体的には、このエメラルドグリーンの所に戻りますが、一つ前に戻りますが、モジュール1、2、3の、オンラインだと具体的にどういうふうに参加者に見えているかというのを示した所がございます。ホームページにフェローシップコースへの入り口が設けられていますので、そこからクリックするとオンラインコースに入れるようになってございます。右側がコースに入る所で、左側がテレビ会議システムですね。時々テレビでディスカッションしたりとか、プロダクトを発表していただいたりとか、あと、オフィスアワーといって、質疑応答をフリーに受けるような時間を設けておりますので、そのときはこちらのウェブシステムを使うことになっています。

オンラインコースに入りますと次のページになりますけれども、いろいろなコースが設定されていますので、そこからコースのほうに。先ほど申しました課題というのは、画面2のシナリオボードというのと同じですけども、内容は同じなんですけれども、このように、参加者の方にアナウンスが来まして、今週の課題はこれですよという。皆さんそれについて課題を作っていただいて提示いただく形です。画面3、オンラインコースモジュール1と書いている所には、皆さまがあの発言のリストが並べられております。1課題について大体50~60回の発言回数が見られますので、かなりアクティブにやっつけらるなと思います。画面の4、画面の5のサンプルは会話の例です。先生のスライドを見て勉強になりました、みたいなことを書いていただいています。さらにその感想に対しても一応リアクションをするというのも原則にしているの、読んでいただいてありがとうございます、私はこんなふうに考えてこれを作りましたみたいな発言ということで会話が

盛り上がるという仕組みになっております。

課題の1の水色のほうに戻りますが、ガイドブックの後ですね。参加者の方に作っていただいたプロダクトが載っております。これは、島根大学のスキルセンターで活動をされていらっしゃる方の改善計画のレポートでございます。写真を入れたりとか、読み物と自分の経験考察して、明日からこんなことをやっていきたいということを書いていただいております。これを私ども教員で割り振りまして、2名の評価者により、コメントと、内容評価をつける形になっています。この方、優でありましたけれども、フィードバックが2名になりますので、結構分量の多いフィードバックになっているかなというふうに考えています。

そういった形でモジュールの1、2、3が構成されています。最後の紫の所に、最近出させていただきました調査について簡単に報告させていただきます。フェロシップの方の認識調査です。先ほど、藤崎が申しましたが、北海道から沖縄までの方に参加いただきまして、大体30~40代の方が参加者としては多いように思います。8割の方がとても有意義だったと。具体的な理由としては、体系的な教育を学べたとか、実践を改善するするアイデア得られましたとか、いただいております。下の自由記載の抜粋の所にもコメントが書いておりますけれども、なかなかこういう機会はないし、よかったと。俯瞰で見ることができたと。いろいろ苦労したんだけど、その苦労が自分の力になっていると。学会発表のときにこのプロダクトと関係したことを発表した方がいたんですが、モジュールの参加者の方に背中を押されているような気分でプレゼンテーションをしたというふうに言っていた方もいました。私どもが提供しているコンテンツというよりも、この仲間意識ですね、オンラインのこういった意識というのはとても大きいんだろうと感じております。

中には、なかなかいろんなイベントが重なるのでやるのが大変だったとか、ワークショップ予約ができなかったとかいったコメントもございましたので、今後の参考にしたいなと思っておりますが、いずれにせよeラーニングを基盤とした学習で、今の仕事を続けながら学べたのでよかったですと総括していただいております。簡単ではございますが、以上です。

【藤崎】 ということで、少し駆け足で全体像をご紹介しましたが、どうぞ、質疑ということで、気が付いたことをどなたからでもよろしくお願いします。

【小西】 この水色のモジュール1の所を拝見してはいたんですけども、理解のために質問なんですけど、まず、キックオフがあって、課題の1、2、3と進む。この課題1というのに随分期間があるんですけども、この期間は別に集まっているわけではなくて、しかも、ウェブで何かをやっているということではなくて、さっきの掲示板じゃないですけど、ディスカッションをオンラインでしているというのがこの1週間ぐらいの期間という感じ

ですか？

【西城】 基本的にはそうでございます。

【小西】 課題があって、それを読んで。

【西城】 課題の量がございますので、それを読むのに時間がかかります。

【小西】 みんなそれを読んだ上でいろんなオンラインディスカッションをするという感じですね。

【西城】 課題を出します。毎回パワーポイント5枚ぐらいにされています。

【小西】 集合学習が最後のところにあって、ワークショップがあって、そこで、ああだこうだ議論してもらいますけれども。

【西城】 ああだこうだですね。

【小西】 かなり既に盛り上がっている人たちが集まってという、そういう感じですね。

【西城】 そういうことですね。教育っていうパフォーマンスですので、ある意味。議論するだけではなくて、なるべくワークショップのときにはロールプレイだったりとか、ちょっとした積み木みたいなものを入れたりとかして、どんなふうなメンタリングの仕事をコーチングしようと思うのか、授業しようと思うのかとか、そういったものに着眼して実践的なものを取り入れています。

【小西】 もう一点は、モジュール1と2、まだ全て見切れていないので理解ができていないのかもしれませんが、1と2との差というのは？

【西城】 点と線と呼んでいるんですけども、1は割とその場面の講義とか、一對一の教育とかいろいろあると思うんですが、そういったものにぐっと着眼していったというものです。2のほうは、より生涯教育とか、継続的な能力開発とか、コーチングとか、メンタリングとか、少し長期的な視野に立ってどういうふうに学習者をフォローするのかとか、キャリアのカウンセリングをどうするのか。あとは、大きい意味ではカリキュラムのことを分析していただいています。

【藤崎】 教育者としての熟達感みたいなのが2のほうで。

【小西】 1のほうはどちらかというと・・・。

【藤崎】 目の前の。

【小西】 自分の現場から・・・。

【藤崎】 教育実践と。3はそういうのを少しアカデミックな視点で振り返ってまとめてみようというような。

【西城】 プログラム評価とリサーチということです。

【藤崎】 というような色分けです。

【羽田】 今、門外漢なのか、知らないのか、参加者の方って教育機関以外の方も多いですね。病院とか。

【藤崎】 はい。

【羽田】 こころ辺の方にとって、医療者教育っていうのは、将来のキャリアの、大学等に移るときの準備になるのか、あるいは、病院等の中で既に行われている教育活動にとって役に立つという意味なのか、どういう質になるんですか。

【藤崎】 後のほうですね。だから、既に職員教育で後輩とかスタッフに関わらなきゃいけないとか、あるいは、今は卒後臨床研修は必修化になっていますので、その研修医のお世話役の先生たちがそういうことを学んでいます。

【羽田】 分かりました。あと、フィードバックが非常にこのeラーニングの場合重要で、それがないとただの垂れ流しになりますけれども、私もやっているんですが、手間がかかりますよね。

【藤崎】 かかります。

【羽田】 その一つの課題のフィードバックってどのぐらいの時間をおかけになっているのか、それで、その現在の人間のキャパから見るとどの程度が上限なのか、これは、大学

院スクールだったりするとどうしても出てくる問題なので、それのお話はいかがでしょう
か。

【西城】 ご質問ありがとうございます。最初は、全員の課題に全員にフィードバックする
ようにしていましたが、実際、参加者は 10 名だったものですからできたかなと
思うんですが、30 名ぐらいになりまして、今、なかなか難しいので、課題は見るんですけ
れども、コメントする方としない方がおります。こちらからです。ただ、課題が終わると
ときには必ず総括でこういった意見がありました、こんなディスカッションがありましたと
いうことはコメントをしています。

面白かったのは、あまりコメントをしても返事が来なかったりするんです。どういうふ
うなことで盛り上がっていらっしゃるかっていうのをインタビューで聞いたことがあるん
ですが、私もやっているつもりなんです、実際に現場でやっている人同士でお互い比較
学習が行われているようなんですね。

【羽田】 学生同士の中の・・・。

【西城】 はい。なので、お互いで聞きあっていただくのが一番よかったというふうにお
っしゃっていただいたので、そうなのかと、あまり口出さないです。最近はその分、ワー
クショップのときにまとめて質問とかはいただきますので。

【藤崎】 それぞれみんな医学部は医学部、歯学部は歯学部、薬学は自分の所で実践して
いるんですけれども、コースとしては多職種なんですよ。そしたら、同じようなことを
それぞれの領域でやっていて、それを違う領域の先生からコメントをもらったり、評価し
てもらったりっていうのがすごく刺激になるみたいに見えていますよね。

【丹羽】 この同じシステムで、学部の 1 年生と、それから、修士課程と、この課程と同
じようにやっているんですけれども、やはり総合のディスカッションは後になればなるほ
ど活発ですね。学部の 1 年生だと、多学部でやっているんですけれども、なかなか交わら
ないんですね。だから、教員が投げかけないとなかなか駄目なんですけれども、今は本当
に自発的にフェローのほうでは行われているので、教育効果は僕は基本的に高いんじゃな
いかと思います。

【羽田】 学習手段ができていうことですよ。これ、非常に専門性が高くて、
現職なので、課題いっぱいなのでうらやましいです。そういうふうに私がやっているのも
目指しているんですけれども、なかなかできにくいので。

【藤崎】 掲示板の仕組みとして、投稿があったら1日に1回か、投稿ありましたというアナウンスメールが飛ぶことになっているんです。そうすると、みんな誰かがプロダクトを出したとかっていうようにお尻をたたかれるような感じになって、みんな一生懸命、人のも読んで、参考にして、みたいな感じで。

【羽田】 これ、非常にそういうシステムはよくできていると思うんですが、これは第1期の予算なんですか。

【丹羽】 いや、もっともっと昔の。

【羽田】 昔からあるんですね。

【丹羽】 学部学生といますか、全国の学生を相手に……。

【藤崎】 だから、2001年できた後のGPの予算が主体になって、それを徐々にバージョンアップしながら来た仕組みです。

【丹羽】 システムとしてはすごく古くて化石のようなものなんですけど、やはり使い方でそんなに予算をかけなくてもできるということ。

【羽田】 自主改修できるシステムにしておいたんですね。ではないんですか。

【丹羽】 でもないんですけども……。

【藤崎】 自主改修ではないですが、業者さんをお願いをしてですけども、でも、使い勝手はこちらも分かってきていますので。

【羽田】 ありがとうございます。

【関本】 モジュールを1、2、3って最後にこの関連性のあるワークショップを開かれますよね。これってどういうふうにして。例えば、テーマを決めて、ワークショップでこういうことをしてもらいたいのでモジュールでこういうふうに考えてもらいたいって考えていくんですか。こういう組み方はどういうふうな。

【西城】 ありがとうございます。学習するコンテンツは最初の課題1、2、3に全部盛り込まれておりまして、それを実際にどういうふうにスキルとして出すのか、例えば、こん

な困った学習者がいたらどうするかっていうことは、知識としては、課題1、2、3で入るんですが、3のときは、ロールプレーをやってみたりとかいう形になりますので。

【関本】 これ、今、モジュールが1、2、3ってありますね。それで、これから先、またこれを受けたいっていう方が多分出てくるんだらうと思うんですけども、このモジュールっていうのはこの1、2、3でずっと回っていくんですか。それとも、また新たに違うものを入れていくとか、そういう計画になっているんですか。

【西城】 内容の見直しは3、4年したところだと思ってましたので、そろそろかなとは思っています。モジュールの組み方についてはもうちょっと参加者の方に聞いてみたいと分からないんですけども、ワークショップをいつやるかがどうやら鍵になるようでして、それが、例えば、今、1月にセミナーやるんですけども、入試シーズンですので、それで来られないっていう方が結構いらっしゃるんですよ。そうすると、コースは参加したいけどワークショップに参加できないので、モジュールも参加しませんでした。そうすると、全部終わらないという。

【関本】 そういう場合は、例えば、モジュールは全部終わりましたと。ただ、ワークショップの時期は忙しくて行けませんという方は、もう一度？

【藤崎】 残念ながら修了にはならない。

【関本】 ならないので、もう一度。

【藤崎】 参加していただいて。

【関本】 一からもう一回やるんですか。

【藤崎】 その掲示板の中でディスカッションして仲間となるのが大事なので、スクーリングのときにその仲間じゃない所へポンと来てもらう感じなので、どちらかというとそうです。でも、だから、逆に言うと、掲示板の中でもディスカッションしているので、初めて会うんだけど、スクーリングのときには同窓会のようになって、一緒にプロダクトを作ったりっていうような感じなので、できれば。あと、仕組みとか、先程もありましたけれども、こちらの定員の関係で、一つのモジュールはシステム的にもこちらの対応的にも30人ぐらいの参加者が限界なので、どちらかというと、1、2、3が終わって、フェローまで取られた方は次はマスターコースとか、博士とかのほうでさらにレベルアップするほうがいいのかと思っています。

【関本】 先程、大学院のお話をされていましたがけれども、この大学院の制度とこのフェローシッププログラムというのはどういうふうに、連携みたいになっているんですか。例えば、このプログラムが終わって、大学院に行くと、また何かあるんですか。

【西城】 大学院は、もう一枚紙があるので、それを見ていただくと書いてございますが、これとは直接の連関はございません。直接研究をやりたい方が集まっていたという形になっております。ただ、このモジュールは看護学のほうの修士の授業の一つになっておりますので、看護学の修士とは接続があります。なので、もしもマスターコースができた暁には単位互換性を持たせて、このフェローが終わった人はマスターのほうにも少し単位の交換ができるようにしていきたいと考えております。

【関本】 もう一つ、最初に藤崎先生、中途半端な位置だってお話した、大学の……。

【藤崎】 中の位置付け。

【関本】 入ったってということなんですけれども、その意味として、医療系の教員だけではなくて、他の教員、文系でも何でもいいんですけれども、そういう方たちのそういう教育っていうのもある程度考えているんですかね。

【藤崎】 いや……。

【関本】 あまりそれは関係ないですか。

【藤崎】 基本的にはそういう学内全体の教員のFDとかSDをうちのセンターで手伝ってくれていうわけではないですが、要するに、一応、拠点ということなので、全学的には医学部の下にぶら下げておくよりは全学の下にぶら下げておきたいというようなイメージです。

【丹羽】 病院と同じじゃないですかね。医学部附属病院が、今、大学病院になりましたよね。表向きは。あれと同じような関係で、大学が都合がいいからそうしている感じが非常に。

【関本】 だけど、モジュールを見ると医療系に限らずどこの学部でも共通する内容かなと思ってですね。そこまでやると文部省としては、それは話が違うとか……。

【藤崎】 全然それは構わないと思うんですけども、ただ、岐阜大学には、今、医療系学部は医学部と看護学部しかないの、隣に岐阜薬科大学は設置されたのはありますけれども、どちらかという、近くの人に来るよりは全国から、今までセミナー&ワークショップに参加していた人がエントリーして来るようになってきているのも半分ぐらいはあるんですが、半分ぐらいはウェブでどうやって見つけたの、みたいな感じの。このコースが先に入って、それから、セミナー&ワークショップにも参加しだすようになってきている人たちも結構いて、全国のそういう医療系の先生たちで、今までつながりがなかった人なんかもこれにつながるようになってきているように思います。

【小西】 一つお聞きしてよろしいでしょうか。ご存じのようにうちも教育プログラムを動かしているんですけども、大きな違いは、うちが医師だけのしかやっていないけれども、ここは多職種をやっておられる。もちろん、1期からずっと流れがあるんだろうと思うんですけども、やっておられて、そこに非常に興味があって、ただ、そっちはそっちでこっちはこっちでなかなか比べるっていうことは難しい、やった経験がないので聞いてみたいと思うところなんです。多職種でやっていて、しかも、オンラインでやっているときにディスカッションとかはどういうふうに進むか。均質だと割と、そうだよ、みたいな文脈で理解することがあるんですけども、均質じゃないからこそ進む部分っていうのはどんなことがあるのかなということ、どんなことが現実に起こっていますかっていうことが一つ聞きたいなと。

【西城】 結局、その業界でしかよく分からない言葉とか出てくるんですね。例えば、歯科の先生のとかなを見てもよく分からないものとか、読めない記号とか、歯の何番の〇〇とかですけども、そういったものもあるんですが、逆にそういうふうになると、そういうコンテンツはさておき、どういうふうにハウツー、ティーチというところにぐっと目が行くものですから、内容はよく分かりませんが、先生、授業はこういうふうに工夫しているんですねとかっていうふうには、参加者の焦点が教えるところにぐっと向くという意味ではいいかなと思っています。

職種間のバランスとかで意見の出し具合が違うかなと思ったんですが、多職種の方がいろいろ意見交換を活発にしているから、あまり職種によるブレは、私を見る限りは感じないですね。

【小西】 広い意味では、ある意味均一なんですよ。

【西城】 そうですね。医療者っていう・・・。

【小西】 やっぱり医療者っていう・・・。

【藤崎】 同じ境遇としてはあって、なおかつ、医学部、歯学部は学会があって、薬学も去年できましたけれども、リハビリとかになると、そういう教育を個人で一生懸命苦勞はしているのに、誰も評価をしてくれない、誰も相談に乗ってくれないみたいな、ある意味では孤立無援な状況で一生懸命やっておられる先生が結構おられたりとかして、そういう先生たちにとってはものすごく刺激になっている感じかなという。

【関本】 そういう、例えば、リハビリの人たちっていうのはどのルートからここにたどり着かれるんですか。

【西城】 ホームページと Facebook と、あと、各種学会でいろいろコメントを発しているところから来ているようでして、あとは口コミですね。

【藤崎】 あと、リハビリの教員研修・・・。

【小西】 教員教育で検索すると出てくるんですか。

【藤崎】 全国の研修を手伝っているんで、そこで宣伝したりはしています。

【西城】 同僚の方とか、後輩の方とか、同じ大学から2人、3人となることもあるので、そういうふうな広がりもあるかと。

【藤崎】 仲間を増やそうみたいな感じで紹介していただいたりもしていますよね。

【羽田】 一つは、大変学内でのサポートが強いのではないかと思うのは、国からのものってそんなに来ていないですよ。予算書を見るとね。

【藤崎】 はい。

【羽田】 だから、大学の側で、かなり持ち出しじゃないですけども、もともと強いセンターというのが、あったので、それが支えになってやっているのかなと思うんですけども、それはいかがなんでしょうか。

【鈴木】 まず、人員ですね。教員数が2分野で6名っていうのは、医学部でもそれだけの規模の所はほとんどないですね。ですから、逆に言うとわれわれは医学部の他の先生がたからもうらやましがられてしまうという面もあるんです。

【藤崎】 奪われそうで、虎視眈々と狙われている感じがある。

【鈴木】 係長の方がきちんといて、補佐がいてと。そういう人的、予算的な基盤が非常に強いというのが第一点と。あと、最初、共同利用施設ができたときには文科省から年間1500万の予算が来ていまして、法人化した後は丸めになってしまったんですけども、それでも1000万ちょっとの学内からの運営交付金があったり、それから、教官研究費は他の講座と全く平等に、教官1人当たり幾らという形で来ているので、その基盤が一応あるので、拠点のほうは少し削られても何とかやっていけるという。

【羽田】 国からのお金、運営交付金の拠点経費と実際の経費がずれている。私どもは本当に人件費は全部任用経費の中に入れていたんですけども、事業費は丸々運営交付金の範囲でやっているんで、実際多いので、その点がさっき言われた共同利用施設の時代から財があるということですね。

【鈴木】 そうですね。

【羽田】 ありがとうございます。もう一つ、これも、財務省と、あと、文科省のほうで、申請のたびごとに言われるのは、アウトプット、アウトカムですよ、学習成果をどういうふうに測るのかということと言わないと、文科省のほうも財務省の説明で苦慮しているのでいろいろ言われるんですけども、確かに、これ、非常にアソシエイトやフェローの方っていうのはよく活動しているのは分かるんですが、同時に、フェローの方がこのプログラムを終わった結果、周りの医療教育への効果とか、医療体制とか、質の向上にどうつながったってことを問われるので、私たちも一生懸命指標開発をやってはいるんですね。そこら辺が数値化されて必ずしもないので、どういうふうにお考えかというの。これは、ぜひ、みんなそれぞれ拠点頑張っている人をつくらなきゃいけない、多分ね、何期間のうちには、その辺のビジョンというのはいかがでしょうか。

【西城】 一つは、2期の申請のときはかなり痛烈に言われたのは、何千人セミナー&ワークショップに参加したか知らないですけども、どこで誰が活躍しているか全く見えないうように、かなり厳しく言われて、僕もそこで発奮しまして、やっぱり認定をまず与えようというので、それがかなり受けたんじゃないかなと個人的には思っております。それで、どこに誰がいるか追跡できるようになりましたので。そういうかたがたを形成的に見ていると、先日、看護学の教授になられた先生もいらっしゃいますし、あとは、大学院に来てくれる方もいましたし、それから、他の大学の人を引っ張ってくるとか、そういったものを指標にしたいなと思っています。

【羽田】 なるほどね。

【鈴木】 海外で修士を取ってきた人が、国内でどういう活躍をしているかっていうのは、ある程度把握できているんですね。だから、それと同じようにフェローなり、セミナー参加者がどういうポジションで活躍しているかっていうのはこれからきちっと出していく。

【羽田】 私たちも、去年、一昨年、プログラムのOBって体系的なプログラムの履修者が100名超えたので、インタビューも含めながらユーザー会議を2回やって、当初考えていた何か直接効果みたいなもの以外で、横のつながりとか、言われたようなものがすごく出ているんですね。だから、うっかり指標を作っちゃってやると、本当の効果が測定できないので、多分、われわれも第3期をやるときにはその経験を踏まえたものを作って説明していくという段階なのかなって感じがします。だから、OBとやったのは非常にいいことで、それが逆に勧誘してくるんですよ。

【鈴木】 セミナー参加者も全部登録制にして。

【藤崎】 IDを持っているんで、逆に言うと。というか、参加の申し込みのときにそれを作らないと入れない仕組みになりましたので。

【羽田】 そうですか。普通の、例えば、1回・・・。

【藤崎】 セミナーとか、参加も基本的にIDを作って入るという仕組みになったので、逆に言うと、それで、2回目以降は、だから、既に登録されているので入りやすいですし、そういう形に。

【羽田】 いいですね。それは、アンケートとかよりも、一挙にできるし。

【藤崎】 はい。やろうと思えば。

【関本】 じゃあ、将来的にフォロワーセッションみたいな企画を？

【西城】 考えております。OB会みたいな感じで。

【関本】 結構な人数ですよ。

【西城】 はい。100パーセントの参加になるか分からないんですけども。

【藤崎】 取りあえず40になったのでメーリングリストを作って情報シェアをするというぐらいから始めようかなというふうに思っています。

【羽田】 もう一つ、さっきの医療者教育修士課程ですね、これ、多分、第3期の目玉というか、柱になると思うんですが、医学研究科の場合にこういう医療者教育者学のような設置審とか、先行例って日本にありますか。

【藤崎】 ないです。

【羽田】 ないですよ。

【藤崎】 これから設置審にそれをしていかなきゃいけない状況です。

【羽田】 そうですよ。なんかそのときに、他国の事例ですよ。事例収集だと思うんですが、それはなんか、今、進んでいる？

【藤崎】 してあります。

【西城】 そうですね。私もオランダの修士課程が終わったんですけども、大体、今、そのネットワークとかいろいろ使って。あと、この間京都大学にそれで詳しい方がいらしたのでいろいろ情報収集しまして。教員の数も大体5から10くらいみたいな感覚を得たので、そのくらいかなとは私個人では思ったんですけども、それじゃ少ないかもしれないです。

【藤崎】 文科省としては医学の修士は12という。

【羽田】 そうですか。1専攻12名？

【藤崎】 医学系の修士課程は12名というハードルがあって、それをどう乗り越えるかという状況です。

【小西】 そういう社会人枠を取ろうとなると、教員枠の必要数が、かなりハードル高いですよ。その話で今、盛り上がるのがいいのかどうか、分からないですが。本当にね。

【関本】 あと、この教務事務職員研修のSDの内容ってどういう内容なんですか。

【藤崎】 ここの報告書にある、この真ん中の段の青いのが今年のものですけれども、今年の3ページの所に日程表が載っておりますが、開講式があって、僕が全体の話をして、愛知みずほ大学の村瀬先生ですね、事務の方に教務事務職員の専門性ということでお話ししていただいて、あと、グループワーク。岐阜大学のカリキュラムの説明と、それから、IRのこととか、あと、分野別認証評価が、今、医学系の場合は話題になっていますので、それのお話とか。あと、難しい学生への対応とかってということで、グループワークを入れながらという形で2泊3日でやっています。

【西城】 海外の学会とかですと、SDとFDが融合するような学会もあつたりするものですから、確かに共有できる部分っていうのはございます。

【藤崎】 毎年春にこの事務研修をやっているのですが、来年の春はセミナー&ワークショップと事務研修を相乗りする形で、分散会的にワークショップのほうにも一部事務の人たちにも参加してもらおう形でできないかなということで、いろいろ試行錯誤として、来年の春はセミナー&ワークショップと事務研修を相乗りする形でやろうというように計画はしております。

【羽田】 これ、委託されたときにお金は来るんですか。委託費みたいなのは。

【北野】 各主催から10万円ずついただいておりますけれども、少し足が出る感じですね。

【羽田】 大体拠点も受益者負担じゃないですけども、そういう方向をたどらざるを得ないので、いろいろとお金の取り方を模索しているんですが、それは全体としてはどのような方針とか。

【藤崎】 事務研修はお金は取って。

【北野】 はい。少し参加費をいただいております。

【藤崎】 セミナー&ワークショップのほうも一応講師などに支払う予算は先程の文科省から拠点にある程度ついてるので、参加者からいただくのは2度取りになるので、望ましくないということで、ただ、報告書を作って送ったりしていますので、資料代等ということで参加者に2000円ずつはいただいておりますけれども、それ以上の部分はこちらの経

費でというようなことになっています。

【羽田】 しかし、2000円でも100人来れば。500人でしたっけね。

【藤崎】 年間で。

【羽田】 年間100万ぐらいは入ってくると。

【藤崎】 はい。

【藤崎】 時間もタイトなので、一度質疑はこれでということで、フェローとアソシエイトの、多分、フェローのeラーニングのほうの体験者のお二人に来ていただきましたので、お二人にいろいろ質問とか、ご意見とかを言っていただいて、ユーザーの声ということで、猪田先生と廣田先生にお任せをして、われわれは一時退席をさせていただきます。

【藤崎】 本音を言っていただいたほうがいいので。ということで・・・。

【西城】 ありがとうございます。

14:00～ フェローシップ、アソシエイトプログラム 参加者インタビュー

廣田俊夫先生、猪田宏美先生

【藤崎】 質疑と講評をいただければと思います。お願いします。

【関本】 すごく勉強になりました。質問じゃないですが、オンラインっていうのはメリットとデメリットがあって、お二人で言っていることは少し違ったんですけど、お一人の方はオンラインが結構大変で、それは仕事をしている時間ちょっと見逃すとあっという間に書き込みが増えてしまって、返すのが大変だと。なので、そこは自分でうまくコントロールして時間をつくらないといけないと。なので、講義に出なさいって言われたほうが時間が決まっているので、そのほうが楽な部分もあると。もう一人の方は、診療されているので、出てこいって言われると代診を頼んで大変なことになるので、オンラインで、仕事終わって夜中に。センターからのフィードバックも夜、先生も深夜に多分やっているんだろうと思うんですけども、そういうことが多いですね。なので、オンラインってそういうことなんだなと思います。オンラインって最初にお見合いじゃないですけども、お会いになりますよね。その後、次のワークショップまでオンラインでお話をされるので結構言いたいことが言えて、その分ディスカッションが多分普通のワークショップより盛り上がっているのかなっていう、そういう気がして、それがすごくいいという気がしました。なので、僕は、オンラインでやるのはそういう意味ではすごく発展性があるいいなと思いました。

【小西】 僕はうちでやっているプログラムと比較しちゃう癖があるので、ここは置いて、後でまた確認します。廣田先生と猪田さんに結構バックグラウンドのことも含めていろんなことを聞いたんですが、猪田さんは岡大の薬剤師さんですよ。

【藤崎】 そうです。臨床の。

【小西】 突っ込んだ質問をしていいのかなと言いながらしたんですけど、うちの大学でも同じですけど、薬剤師さんと薬剤部のお偉い人たちに、ものすごくこういう壁が。

【藤崎】 ある。

【小西】 大体、薬剤部はそういうことが起こっていて、現業の方、薬を作っている人たちと壁があって、キャリアとノンキャリアみたいな構造がよくあるんです。そこでやっておられて、現場の人たちを何とかしたいんだというモチベーションが強くここにつながって、どうやってつながったのって言ったら、岡山 SP 研究会ということで、なるほどみたいなのはあったんです。

ここに伺って来たら、これだったんだという感じを非常に強く受けました。廣田先生の場合は割と現場で研修医の学生も来ているし、みたいな感じで、比較的によく起こる構造だなというふうに思ったんです。

もっと興味を持ったのが、もうお聞きになっているんだろうと思うんですけども、猪田さんは博士に行きたいと言っておられる。

【藤崎】 はい。

【小西】 そうすると、僕がよく聞いたのは、じゃあ、フェロシップじゃなくて、どうして博士なのみたいなところを結構根掘り葉掘り聞いて、そこには、キャリアとして、フェロシップを終わったときに何か、もちろん、フェロ修了証はあるわけですけども、何か説明できるようなもの、もうちょっと違うものが欲しいんだろうかということを含めて聞いてみました。一つの考えはマスターなんだろうなと思いながら、こっちはそう思いながら聞いているっていうところがあったりもします。

羽田先生からも同じような、あとで3人で話しているときにもお話がありまして、これだけの時間数やっているんだったらサーティフィケートは出せないのかなあ、みたいなことを言って。

【藤崎】 単位ね。

【小西】 うん。おられるか。多分、あれ120時間だと思うんですけども、ただ、オンライン・・・。

【藤崎】 ただ、授業料をごつつう取られている。じゃなくて？

【鈴木】 科目履修生とサーティフィケートはまた違うんですね。科目履修生だと12万円ぐらい取らなきゃいけないんですよ。

【小西】 そう。取らなきゃいけない。

【鈴木】 先生の所もサーティフィケート無料ですよ。

【小西】 そうです。

【小西】 出してはいますね。

【鈴木】 120 時間をクリアしているというエビデンスがあれば出せるんです。

【小西】 その辺が、オンラインがああ掲示板だとちょっと見えにくくなるのかな。でも、それが悪いと言いたいんじゃないなくて、猪田さんのような場合には次のステップが来ている中で、次へのモチベーションがすごく強くなったという感じがするので、それは、このセンターの生み出したものなんじゃないかなというふうに思っています。

質問時間よりもコメントみたいになってきていますけれども、羽田先生からは第3期のアウトカムをどういうふうに示すのかいうところは大事にしておいたほうがいいなというようなコメントがありました。

【藤崎】 お互い拠点ですから。

【小西】 そうですね。本当にわが事というようにしゃべっておられました。コメントに入ればいいのか。

【藤崎】 お任せします。

【小西】 質問は特に僕は。

【関本】 私もよく聞きました。さっきも僕ちょっと話したんですけど、このお医者さん、医師って教育って大体大学の教員が教育しているっていうのは中心にあると思うんですけど、医師ってお話をさっき廣田先生聞いていると、結局自分たちは若手を育てるっていう義務があるので、だから教育が必要なんだと。だから、ここに来たんだっていうお話だったんですね。医師の場合は、数が多い少ないは置いておいて、下を育ててどんどんどんいかないと回っていかないっていう部分があるので、そういう意識が非常に高いなと思ったんですね。僕は、歯科医師なんですけれども、歯科医師の場合は、一部の人にはそういう人がいるんですけど、そんなに下を育てようとか、そういう、一般のいわゆる大学の教員以外の人たちは、そんなには多分いないと思うんですね。だから、臨床研修医を受け入れている所も医科に比べれば非常に少ないですし、そんなに、大学の教員以外の方が教育に関わるっていう意識が医師に比べると低いのかなって思っていますね、僕がこのセンターの役割としては、要は、医師も薬剤師も全ての医療関係者は下を育てるっていう、全員が教育者であるべきだっていう、そういうコンセプトっていうのがものすごく強く出ていて僕はいいなと思いました。だから、僕はこういう所で教員ではない人たちが、廣田先生みたいな方がこういう所で勉強していただけるとすごく効果的だっていう。コメントになっちゃいました。

【藤崎】 はい。大丈夫です。

【小西】 3人話し合っていた、質問じゃなくて、コメントに入っていきますけれども、誰がどう言ったということよりも、特に、ここのセンターのターゲットが明確にずっと行われているということが素晴らしいなという点が3人一致した意見だったと思います。そこに今回はアソシエイトとフェローシップを入れられて、そこを見えやすくした、視覚化されたということが素晴らしいなという意見がございました。

また、センターに対する、大学なのか、あるいは、歴史的には文科省からも、この教育組織のリソースの分厚さが素晴らしいなというところがあります。全国教育センターはご存じのようになんかの医学部でできていますけれども、なかなかこんなに教員がいる所はないので、こういう所だからこそこういうプログラムをしっかりと作っていただきたいという意見が強かったと思います。

もう一つの特徴は、これ、うちと比べてしまうところなんですけれども、ここは多職種の学びということがあって、それについては猪田さんにも、皆さんがいろんな質問をさせてもらいました。猪田さんによると、多職種ということで差を感じるよりはむしろ共通点をよく感じますと。医療者として一つのベースとしては似ているものなのかなというふうに思いました。

先程ちょっと言いましたが、比較的、羽田先生のご意見だったですけれども、大学の仕事というのは後継者をつくっていく仕事が大いなので、ここの活動は一つ資格、資格っていうのは見えるさっきの視覚じゃなくて、サーティフィケートなどの資格化をしていくべきじゃないかと。そのことを考えると、さらに発展した意見としては、次の第3期のところの大きいものとして、マスターということをぜひ考えていただきたいと思います。

今、関本先生がおっしゃったように、非常に現場に焦点が置かれているという、このセンターの力強さを感じました。理論と実践という言い方もできるかと思いますが、大学の教育とはある意味全く違うといたしますか、現場を中心として、それをまた持って帰る先がすごく皆さんにあって、学んだことと使えることとの距離感が近いということも含めて、現場に焦点を非常に大きく当てておられるということが特徴だというふうに。

第3期のアウトカムは言いましたね。それから、少し話がスピアウトして、特に、私、医学ですけれども、そうではない羽田先生からは、「そうすると医学教育っていうのはこの時期じゃなくて、早い時期から、例えば、学部の時期から始めたりすることについてはどうですか」というような質問が、先程のお二人に出ていましたら、どうだったですかね、早いほうがいいという意見がそんなに強いわけでもなかったですか。

【関本】 ただ、医学教育を学生自体に教えることで教育することではなくて、学び方をターゲットに勉強できるんじゃないかっていうことが。

【藤崎】 要するに、研修医2年目になった途端後輩の面倒をってという意味では、そういう教育、学びとはどうなのかということ卒前でやることの意味はあるかなというふうに思うのですけれども。クラブとかやっている学生は学習ニーズがあるけれども、でも、そうではない学生も研修医ぐらいになってくるとかなりニーズは高くなるので、そういうのを海外でも卒前でやっている所もあるように聞いていますので、全員が受けるかどうかは別として、選択の授業とかではあるかなと思っています。

【西城】 医学生が教育を学ぶのは、後輩の指導もありますけれども、患者教育とほとんど同じ原理でやっていますので、基本的には全員学ぶべきことなんだろうなと思っています。

【関本】 そうですね。

【小西】 その件に関しては、廣田先生は同じようなことを言われました。質問だけで、意見的にはやらなかったんですけども、個人的な思いとしては、僕は早いほうがいいかなと思います。個人的な意見として。例えば、今、医療安全の授業をやらなきゃいけないというじゃないですか。でも、例えば、3年生とか、4年生に医療安全の授業で何が入るかって、まだ現場をそんなに見ていないじゃないかみたいな意見はあります、でも、必要ですよ。実習に出た時点で学ぶこともあるということを考えると、6年生に医学教育の全てをバーツとやらなくてもよくて、実習に出たらこんな世界があるんだってということが（早期に）分かっているだけでも全然違うんじゃないかなというような気がします。

最後に、われわれの中で話していましたのは、これだけのものを作っておられるので、これは、受けた者には伝わって行って、それぞれにまたスピアウトしていくんでしょうけれども、やっている内容についてまとめてはいかがかなというような話がありました。例えば、本にするというようなことがあると、それは活字として強い力を持ちますし、受講者以外の人にも見られる。新たに作るっていうか、もう既にやっておられるみたいなので、こういう取り組みを定式化する、本を作るみたいなことを考えてはいかがという意見がありました。なかなか言うのは簡単で大変だと思いますけれども。

【西城】 二つの事例みたいな感じで、京都と岐阜で書いたら面白いかなと。

【小西】 なるほど。

【西城】 よろしくお伝えください。

【藤崎】 それは面白いと思うね、本当に。大体そんなところで。

【小西】 先生からも何か、コメントも、あるいは、質問とかもあれば。

【藤崎】 アソシエイト、フェローの仕組みが目玉ということでやって、予想以上に、だから、人気も出てきているし。

【小西】 そうですね。

【藤崎】 そんなに物好きな人が継続的に現れるんだらうかっていうこともありましたけれども、それなりに、逆にモジュールなんかは参加者が多くお断りしなければならない状況です。また、モジュール参加が結果的にはセミナー&ワークショップの参加者増につながっているみたいで、それは、本来的には最初意図していたわけではないんですけども、今まで、ちょっとお休みしていた人も、アソシエイトがもらえるんだったら、せっかくだからもらおうみたいな感じになっていたりするので、そういう意味でも想像以上に2期はうまく進んでいます、大変は大変なので、これでまた3期に修士課程となるともっと大変になってくる気もするのですが、でも、なかなか体制からいっても MEDC がやらなきゃという側面もあるように思いますので、頑張っってやっていきたいなと思っていますけれども、中心は西城先生なので、どうぞ、一言。

【西城】 いろいろ積んでこられたと思うので、最後のピースのマスターは何とかしたいなと思っています。今後ともご支援よろしくお願ひします。

【丹羽】 質問というか、拠点として、今、1期、2期で、今度3期で、うちのセンターとしては、4期、5期、それまで岐阜大学があるかどうか分かりませんが、そうやってずっと継続していくとなると、やはりセミナー&ワークショップがあつて、それで、IPEもあつて、フェローシップがあつて、修士があると。どんどん積み重なっていきますよね。だけど、国としては、それに応じて業務が増えたからといって教員を増やすわけでもない。予算は限られていると。そういうときに拠点としての在り方としては、やはりフェローシップに参加する人はこれからもどんどん出てくると思うんですけども、継続しなきゃいけないけれども、新しいこともやらなきゃいけないというそのジレンマといいますか、そういった問題が大きくなってくると思うんですけども、そういうところはどのように考えていくべきものなんでしょうか。

【関本】 僕は、これだけのシステムなので、ある程度の受講料をしっかりといただいて、そうしないと多分先生が、今おっしゃったように、どんどん積み重なって上に行けないので、ずっとこのままっていうのはなかなか難しいのかなってちょっと思いました。これだ

けでも十分受講料をいただいて、それでも集まると思うんですよね。これだけ口コミで広がって、いろんな方みえてますので、僕はそうやっていかないと新しいことがなかなかやりにくいかなっていう気がします。

【西城】 逆に、京都大学とか、東京大学はそうされていますけれども、客員研究員とか、非常勤講師みたいな、周りの人材みたいな人いらっしゃると思うので、そういう方々、修了者のフェローをファシリテートするとかいう感じでネットワークが広がったらいかなと思うんです。

【藤崎】 そうだね。携わる人も増やしていかないと回らないしっていうところだよね。

【小西】 今、受講料って言われましたが。うちも似たようなプログラムやっているじゃないですか。そうすると、うちは昔で言う GP の予算だけでやっていくと5年たつと切れちゃうんですよね。最近、GP ないじゃないですか。体力的にあのとき5人いたのに、今、4人だし、来年いっぱい3人になるし、みたいなことが起こっていて、続けられないみたいところで悩む。それから言うと、拠点は強いなというようなことはありますよ。ただ、でも、それでも、ちょっとずつシーリングがかかったり・・・。

【藤崎】 そう。小さくなっていつている、予算は。

【小西】 構造ですよ。ですから、うちも同じことを言っていますが、先生と同じで、回していく限りには自立できるような経済をつくっていかないと難しいかなというふうに思っています。ただ、拠点という名前の所は別格になってほしいなみたいところはありますけどね。だって拠点だもんね、みたいところはありますけれども、その辺は僕がしゃべるより羽田先生のほうがいい。

【藤崎】 ただ、そうはいつでも拠点の予算もだんだん小さくなってくるんですよ。

【小西】 なるでしょうね。

【藤崎】 だから、なかなか難しいなというのと、あと、そういうお金を集めたときに、国の場合、どこにお財布を入れるかっていうのがとても難しく、大学院とかが授業料取るのは別にノープロブレムでいいんだけど、こういうお金の形を、事業収益としてどういうふうにカウントするのか。

2期は一応モジュール、アソシエイトをするので予算措置がついてはいるんだけど、3期はもうないから、逆に言うと取ってもいい側面もあるのか、ないのかな。どう思う？

【鈴木】 多少はやっぱり。

【藤崎】 上げてもいいのかなっていう気はするけど、そのお財布をどこに入れるかと。お財布、全学に入ってしまったら、これは、こっちへまた回ってこなくなるわけ。全学に行くだけで。そこら辺の、こちら側につながるお財布の仕組みがなかなか難しいなというふうには思っています。ぼやきです。

【関本】 肝心な質問を一つしたかったので伺わせていただくと、今、フェローシップはもう修了者が13名出ていましたよね。

【藤崎】 そうです。

【関本】 同期で入った人たちの中でどのぐらいの修了率っていうふうに、今、なっているのか。修了率っていうようなことが。年次でやっているっていうことでもないから、どんなことがありますか。

【西城】 3割方だと思うんですけども、フェローから入られて・・・。

【藤崎】 アソシエイトからフェローは終わっちゃったんだけど、アソシエイトの単位がまだたまらないので。

【関本】 そういう構造もあると。

【藤崎】 アソシエイトたまってからっていうわけじゃなくて、どっちからでもいいのでということ。

【西城】 このコースに関しては、全部やられる方は8割ぐらい。

【藤崎】 大体そう。

【西城】 1、2割の方が3だけやらないとかっていう形なんですけれども。

【藤崎】 モジュール全体としてはそれぐらいだね。

【西城】 一つだけ取って辞められた方はいらっしゃらないですね。

【鈴木】 そのモジュールを履修して不合格になる人は本当に1人か2人です。

【藤崎】 数人よね。参加できない。プロダクトが忙しくて出せなかったりとか、スクーリングの部分に参加できなかったりっていう人は数人はいますけれど。1取ったら2とか、2から入る人も、2,1はどっちからでもいいことになっていて、ただ、1、2が修了しないと3は受けられないっていうことになっているので。

【小西】 3まではまだ来ていない・・・。

【西城】 まだ行かないです。

【藤崎】 10人、10人ぐらいですので、今年は、でも、30人いるんで、要するに、1、2をたまった人がそれだけいるということだと思っただけですけども。

【小西】 このプロダクト自体が、1年以内に終わらなきゃいけないとか、2年以内に終わらなきゃいけないとか、そういう構造にはなっていますか。

【西城】 5年以内です。

【鈴木】 逆に言うと、先生の所は1年で完了する形で・・・。

【小西】 なのでですけども、できないので、後でゆっくり、のような感じになることはあります。

【鈴木】 なるほど。

【小西】 サーティフィケートとか次回の教授会にかけるんですけども、今回は全員だったんですけど、去年は、1人、レポートが提出できないみたいなのがやっぱりあります。3月じゃなくて、6月修了みたいな人もいます。

【鈴木】 あと、スクーリングを1週間みっちりやってもらえると思っていますけども。

【小西】 4日間かけて3回なんですけども、木金土日だから、病院を木金は休んでね、みたいなことになるんですね。

【西城】 すごい取りますね。

【藤崎】 すごいね、それは。

【小西】 でも、先程もありましたけれども、ある意味好きな時間に掲示板的なものを見ながら、わあっと結構盛り上がっている。事前学習があるので、みんながしゃべりだすと俺だけ遅れているわ、みたいなことがきっと起こるんだと思うんですよね。そういうのも顔を合わせるっていうやり方だけじゃないんだなっていうことも、すごくあるんだなと今日思いました。プラスもあればマイナスもあると思うんですけれども。参加しやすいということも含めて。

【西城】 完全オンラインはドロップアウトが多いというふうなペーパーを読んだことがあったものですから。

ワークショップもなし、キャンパスなしでやるとかなりドロップアウトになる。なので、ちょっとだけ入れたんですけれども、本当は先生方にはもうちょっとやらなきゃとは思っております。

【小西】 あれも苦しくて、とても来られないっていうので完全に辞めた人が1人いました。

【西城】 そうですか。難しいですね。

【関本】 オンラインのディスカッションをやっているときに、こちらで何か希望修正するっていうことはあるんですか。完全に任せっきり？ ここはちょっとずれていっているとかっていうのは。

【西城】 あまりずれないですし、ずれていても意外と参加者の中で、でも、今回この話じゃないけどみたいなことは出ているので。

【関本】 あまり、じゃあ、こちらから介入することはない？

【西城】 ないですね。あと、課題はテレビ会議をもうちょっと入れればいいのかと思うんですけれども、システムの限界だと思うし、なかなか参加者の方がうまく入れないことがですね・・・。

【藤崎】 だから、リテラシーがかなり・・・。

【西城】 減っているし、あと、ソフトそのものが・・・。

【藤崎】 ソフトそのものもありますよね。

【西城】 うまくつながらないので、半分ぐらい参加できてないです。

【関本】 テレビ会議は、僕、今日聞いていて難しいなと思ったんですね。

【西城】 難しいですね。

【関本】 全くディスカッションしている時間帯が違うので。

【藤崎】 そう。だから、そうなんです。なかなかその集まる時間をつくってもそこに集まれる人っていうのは限られちゃうんです。

【関本】 そうなんです。だから、ある意味フリータイムでやっているから結構盛り上がっているんだらうなって思いました。

【丹羽】 どなたかプレゼンをテレビ会議でやることもあるんですけども、なかなか時間設定するのにすごく彼は苦勞してやっていますよね。なかなかその時間は無理だっていうことが多いです。

【関本】 そうですね。

【藤崎】 ただ、逆に、会わないけれども、ウェブで話し合っていたら、スクーリングのときは半分同窓会のように既になっている感じだよね。

【関本】 さっき聞いたのは、終わった後に連絡を取るっていうことはないみたいですね。コンタクトするのは、終わった人たちは。

【藤崎】 まあ、そうですね。

【関本】 また意見交換をっていうのはあまりないみたいですね。

【西城】 そうですね。どうしていいのかわからないんですけども、メールアドレスは

お教えしていないんですよ。直接。

【関本】 なるほど。

【西城】 だから、ここに載せていいのかどうか分からなくて、結局名刺交換した方とかがつながっているんです。本当はつながったほうが良いと思ってまして、というのは、グループ分けのときに職種と、あと、地域、近い人はなるべくくっつけるようにしているので、つながってほしいんですけども、そこは次の課題かなと思っています。

【小西】 先程聞いたのは、それはないって。これは、個人的意見なんですけれども、同窓会あったほうがいいんじゃないですかね。というか、多分なんかのときにまたちょっとそこで盛り上がったたり。

【西城】 そうですね。だから、アソシエイトの、あのメーリングリストには出るんですけども・・・。

【藤崎】 取りあえず、だから、メーリングリストを動かしまして、多分、要するに、3期の申請書を書くのにも1回集まって、お祭り兼ねたインタビューの場をつくって懇親会プラスっていうことはする必要が多分出てくるかなとは思っているので、取りあえずはそういう形で
来年ぐらいには・・・。

【小西】 つながりが切れちゃうのはもったいないですね。

【藤崎】 もったいですね。そう思います。

【西城】 改善します。

【藤崎】 そうですね。アフターフォローをしっかりと、ネットワークと。でも、メーリングリストに参加したら、逆に言うとメルアドをシェアできる感じになっちゃうんです。

【西城】 学年が違くとまたあれなんですよ。

【藤崎】 カラーが違う。

【西城】 海外のものもあるんですけども、人数がどんどん増えてきちゃったんです。修士

の同窓会。そうするとお互い薄くなってきて発言も減っちゃうんですね。

【小西】 あまり知らない人もいるし。

【西城】 ええ。

【藤崎】 学年ごとにやる。

【西城】 難しいですね。

【藤崎】 モジュールごとにメーリングリスト送ったら具合が悪くなる。

【西城】 ご本人たちにとってはいいのかもしれませんが。

【藤崎】 なるほど。

【関本】 逆に終わった後、センターに質問とか来るともあるんですか。参加者から。

【西城】 リクエストですね、主に。講演とか、学会発表とか。

【関本】 それは、リクエストに応えられているんですか。

【西城】 9割方お断りしてます。数がありすぎるので。本当はそういうのやらなきゃなとは思っているんですけども、なかなか。ただ、逆に参加者同士でそういう依頼とかもある様子なので、それはそれでいいかなと。

【藤崎】 e ラーニングの同窓会はないけれども、ある意味でセミナー&ワークショップの場が同窓会になっていて、来て、みんな、また久しぶりという感じで。

【小西】 それは言っておられましたね。

【藤崎】 はい。意味合いはあるのかなっていう気はするので。年4回やっているのも、それなりに参加できる時は来てって感じかなと。大体そんなようなところでしょうか。

【藤崎】 本日は、本当に遠路ありがとうございました。

一同 ありがとうございました。

【小西】 勉強になりました。

【藤崎】 また、これからもよろしくお願いします。

(了)

中間評価資料

岐阜大学 医学教育開発研究センター (MEDC)

医学教育共同利用拠点
第2期中間外部評価



岐阜大学医学教育開発研究センター

- 2001年4月、医学教育分野で初の全国共同利用施設として設立
- 2010年より文部科学省から高等教育の教育関係共同利用拠点と認定
- 2015年より2期目の教育関係共同利用拠点として再認定
- 2期目3年目の今年度に、拠点事業について外部評価者による中間評価を実施

組織の位置づけと運営

- 基本的には医学部組織のセンターで、医学部教授会のメンバーになっているが、拠点認定以降は全学の直下にあるような位置付けとなっている
- 同時に大学院医学系研究科博士課程の教員も兼任している
- 運営は、医学部内の運営委員会と、共同利用拠点として全国有識者で構成される運営協議会によって審議されている

スタッフ・事務・大学院生

- 現在の教員スタッフ：
教授3名、准教授1名、併任講師2名、助教1名、教務補佐員1名
- 事務スタッフ：係長1名、非常勤職員4名
- 客員教授：国内1名、国外1名
- 大学院生：すべて社会人で北海道から沖縄まで11名

医学教育セミナーとワークショップ

- 毎年4回(春、夏、秋、冬)開催
- 参加者は医学、歯学、薬学、看護学、リハビリ学、鍼灸医学、栄養学、口腔保健学等の医療系養成校の教員や現場指導者、医療系学生、模擬患者や市民など多彩
- 通算67回、延べ参加者9100人以上
- 基本的には2回は岐阜で開催、1回は首都圏で開催、1回は地方で開催
- 岐阜以外で開催時は他の大学・機関と連携して共催

国公立大学医学部・歯学部 教務事務職員研修:SD

- 国立大学医学部長会議常置委員会と一般社団法人全国医学部長病院長会議の委託を受け、毎年1回開催(今年度で18回目)
- 2泊3日の日程で通常の参加者は40~50名
- 医学・歯学教育の改革がこれまでにないスピードで行われている現状を踏まえて、医学・歯学教育に関する現状と教務事務に関する理解を深め、医学部・歯学部の教務事務職員としての資質の向上を図るとともに、各大学における円滑な教務事務の進展に寄与することを目的とする

第1期拠点事業

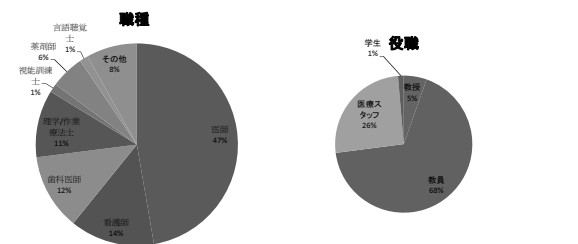
- ・「多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開」
- ・事業期間は2011年～2014年度
- ・多職種連携教育の教育プログラムの開発
- ・様々な職種の卒前・卒後医療教育機関と共同して教育法を開発
- ・全国規模のFDの高度化を図りながら多職種連携医療教育法のワークショップを実施
- ・開発した教育法の普及と、全国の医学部・医療系教育機関における教育改善

第2期拠点事業

- ・「医療者教育フェローシップの構築:体系的FD・メンタリング・研究支援を融合し新たなFDの全国展開」
- ・事業期間は2015年～2019年度
- ・アソシエイト/フェローシップ制度の構築
- ・アソシエイト修了者のMLによるメンタリング
- ・現時点のアソシエイト認定者40名、フェローシップ認定者13名
- ・医療者教育学修士課程設立の準備

メドギフト参加者

	2015年トライアル	2016年	2017年
モジュール1	22	15	31
モジュール2	23	30	24
モジュール3	10	11	26



セミナー&WSの参加者の推移

	第1期					第2期		
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
春	74	113	129	163	150	152	209	212
夏	164	105	146	200	130	136	145	265
秋	133	135	67	126	199	92	201	197
冬	138	160	136	150	108	105	199	151
年度計	509	513	478	639	515	485	754	825

特別経費進捗状況報告書
(教育関係共同実施分)

法人番号：42 法人名：岐阜大学

事業名	<p style="text-align: center;"><u>多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">多職種連携医療教育、共同開発事業、全国FD</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【概要】 医療における幅広い専門職が連携してチーム医療を実践できるための能力（知識、技能、態度）の修得を目的とした多職種連携教育法を開発し、全国規模のFDを展開して広く普及を図り、全国の医学部・医療系教育機関における教育の改善に資する。</p> </div>
事業実施主体	医学教育開発研究センター
事業計画期間	平成23年度～平成26年度（4年）
事業実施経費	事業実施経費総額 114,075千円 (平成26年度予算額 11,575千円)

1. 事業の全体計画

近年の社会情勢の変化に伴う医療環境の急激な変化により、医師をはじめとする医療スタッフ不足が深刻化しているが、医療の改善・危機的状況の克服には、各医療職の増員だけでは不十分で、医師・看護師・薬剤師・検査技師など幅広い医療人の資質向上と綿密な連携によるチーム医療の実践が不可欠である。本事業で、チーム医療実践能力向上のための卒前教育プログラムの開発と全国規模のFD展開等で教育法を普及させることで、全国の医療系教育機関における優れた医療人輩出に寄与し、医療サービス等の基盤強化を図るものである。

このように、本事業は、政府が掲げる「新成長戦略」の「ライフ・イノベーションによる健康大国戦略（不安の解消、生涯を楽しむための医療・介護サービスの基盤強化）」を推進していく上での礎となる事業であり、具体的に以下の計画を実施する。

医師、看護師、薬剤師、理学療法士などの医療専門職が連携してチーム医療を実践できるための基礎となる4つの能力（①問題解決力、②コミュニケーション力、③省察力、④協調学習力）を高める教育プログラムと、多職種の学生が連携して学習を進め相互理解とチームワークを深める多職種連携医療教育プログラムを開発し、様々な職種の卒前・卒後医療教育機関との共同開発の成果を踏まえながら、試験的授業の実施により検証を行い、教育法の確立を目指す。

さらに、全国規模のFDの高度化を図りつつ、多職種連携医療教育法のワークショップを実施して、開発した教育法を深化・発展させながら広く普及を図り、全国の医学部・医療系教育機関における教育の改善に資する。

2. 進捗状況報告

①進捗状況

【当初計画に対する進捗状況】

平成23年度

<p>実施計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力、多職種連携医療教育の現状分析（調査）を実施する。 ▶看護学・薬学教育等における医療人基礎力向上のための教育プログラムと教材開発に着手する。 ▶多職種連携医療教育プログラムと教材開発に着手する。 ▶多職種の教育者連携ネットワークを構築する。 ▶全国FDの基盤整備を行う。 ▶FD受講者の資格認定制度を検討する。（日本医学教育学会との連携事業） ▶医療人基礎力の育成、多職種連携医療教育に関する共同開発プロジェクトを公募し、共同開発プロジェクトを開始する。 		
<p>実施状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力、多職種連携医療教育に関する各種学会・講習会に参加し、情報収集と現状調査を開始した。また、全国の多職種の教育者との情報交換を通じて、連携ネットワークの構築を開始した。 ▶看護学、薬学教育におけるコミュニケーション教育、問題基盤型学習プログラムの開発を行った。 ▶大学初年次及び地域医療機関におけるパイロット的な多職種連携医療教育プログラムと教材開発を実施した。 ▶全国FDとしての「医学教育セミナーとワークショップ」の基盤整備と内容の充実を図った。第40回では全国共同利用拠点としての活動について、各方面から提言を受け、「PBLを通じて学ぶ職種間連携」「臨床現場で学ぶ職種間連携」のワークショップを実施した。第42回（千葉）ではアウトカム基盤型教育と専門職連携教育を中心とした企画を行った。第43回では、高雄医学大学（台湾）から客員教授を招聘し新たな入試法MMIについてのワークショップとセミナーを実施した。 ▶日本医学教育学会の専門家育成検討委員会と共同でパイロット講習会を実施し、FD受講者の資格認定制度の検討を開始した。 ▶多職種連携医療教育に関する共同開発プロジェクトを5件（筑波大学、昭和大学、名古屋大学、広島大学、地域医療振興協会）採択し、検討会の実施、教育プログラムの開発を開始した。 <p><全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」実施及び参加者数実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学教育開発研究センター10周年記念式典・第40回医学教育セミナーとワークショップ（於：岐阜市） 参加者数：80人 ・第41回医学教育セミナーとワークショップ（於：岐阜大学医学部） 参加者数：104人 ・第42回医学教育セミナーとワークショップin千葉大学 参加者数：155人 ・第43回医学教育セミナーとワークショップ（於：岐阜市） 参加者数：122人 <table border="1" style="width: 100%; margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="width: 80%; text-align: right;">実施度</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">Ⅲ</td> </tr> </table>	実施度	Ⅲ
実施度	Ⅲ		
<p>実施度の判断理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶多職種連携医療教育の現状調査と授業開発を開始した。 ▶多職種連携教育の共同開発プロジェクトを公募し、16件の応募の中から5件を採択し、共同開発をスタートさせた。 ▶多職種連携教育の全国FDの基盤整備と内容充実を図った。 		

平成24年度

<p>実施計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力、多職種連携医療教育の現状分析結果を報告する。 ▶医療人基礎力向上のための教育プログラムを試作し、パイロット授業を実施する。 ▶多職種連携医療教育プログラムを試作し、パイロット授業を実施する。
-------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ▶全国FDの内容の高度化を図る。 ▶FD受講者の資格認定制度の試験的導入を行う。 ▶共同開発事業を推進する（調査、教材開発、パイロット授業、海外視察、情報交換）。 			
<p>実施状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶多職種連携医療教育については、教育実践の現状に関する文献調査を行い、実態を明らかにするとともに、多職種連携医療教育プログラムのパイロット授業を実施して、教育効果の分析を行った。第46回医学教育セミナーとワークショップでは、共同開発事業の中間報告と今後の進め方に関するワークショップを実施した。 ▶全国FDに関しては、春・冬の全国FDを福島医科大学、琉球大学と共催し、夏・秋は岐阜で開催した。第44回（福島）では東日本大震災の経験に基づく医療者教育に関する多彩な企画を実施した。第47回（沖縄）では、マギル大学（カナダ）から客員教授を招聘し、臨床教育に関するセミナーを実施し、医学教育のグローバル・スタンダードに関する国際カンファレンスを実施した。 ▶FD受講者の資格認定制度を検討するために、データ管理システムを構築した。 <p><全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」実施及び参加者数実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第44回医学教育セミナーとワークショップin福島 参加者数：133人 ・第45回医学教育セミナーとワークショップ（於：岐阜大学医学部） 参加者数：152人 ・第46回医学教育セミナーとワークショップ （於：岐阜大学サテライトキャンパス） 参加者数：71人 ・第47回医学教育セミナーとワークショップin沖縄 プレカンファレンス 参加者数：41人 セミナーとワークショップ 参加者数：154人 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;"></td> <td style="width: 10%; text-align: center;">実施度</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">Ⅲ</td> </tr> </table>		実施度	Ⅲ
	実施度	Ⅲ		
<p>実施度の判断理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶多職種連携医療教育の現状調査・文献調査を実施した。 ▶多職種連携医療教育共同開発プロジェクトに関しては、授業開発を実践するとともに、ワークショップを実施して、全国への普及を図った。 ▶福島医大、琉球大学と医学教育セミナーとワークショップを共催し、災害医療、グローバル・スタンダードをテーマとした新しく高度な内容の各種ワークショップを実施した。 			

平成25年度

<p>実施計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力向上のための教育プログラム及び多職種連携医療教育プログラムについてワークショップで検討を行う。 ▶多職種連携医療教育プログラムの授業をブラッシュアップする。 ▶FD受講者の資格認定制度の本格導入に向けた制度設計を行う。 ▶共同開発事業の推進と中間成果の発表と評価。
<p>実施状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力教育に関しては、プロフェッショナリズム教育、自己主導型学習、情動を育む教育に関するワークショップを開催し、教育プログラムの開発とブラッシュアップを行った。また問題を有する学生への対応に関する文献的考察を行った。 ▶多職種連携教育に関しては、医学概論における初年次多職種連携模擬カンファレンスと、地域の医療系多職種連携教育ワークショップを開催し、教材と指導法のブラッシュアップを行った。また、共同開発者とともに新たな教材作成の原案を作成し、動画教材開発に関する実践的ワークショップ、シンポジウムを開催し、

	<p>参加者から高い評価を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶全国FDに関しては、京都大学、東京医科歯科大学と共催で医学教育セミナーとワークショップを開催し、教育研究、医学教育の国際化をテーマにニーズに見合った高度な内容のワークショップを開催した。第50回記念大会では、マギル大学（カナダ）、香港大学から講師を招聘し、医療教育者の長期的育成、職種間連携の社会的考察について、セミナー・シンポジウムを実施し、FDの高度化と国際化を促進した。 ▶過去のFD受講者の背景調査を実施し、受講登録システムを稼働させた。継続的な受講による資格認定（フェローシップ）について制度設計を行った。 <p><全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」実施及び参加者数実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第48回医学教育セミナーとワークショップin京都大学 参加者数：163人 ・第49回医学教育セミナーとワークショップ(於：岐阜大学医学部) 参加者数：66人 ・第50回記念医学教育セミナーとワークショップ (於：岐阜大学サテライトキャンパス/じゅうろくプラザ) 参加者数：149人 ・第51回医学教育セミナーとワークショップin医科歯科 参加者数：167人 	実施度	IV
実施度の判断理由	<ul style="list-style-type: none"> ▶中部地区の医療系大学と共同して卒前学生を対象とした多職種連携授業を開催し、教材・指導法のブラッシュアップを行い、正規授業への導入準備を行った。 ▶職種間連携教育を普及させるための実践的ワークショップ、国際化を促進するワークショップを開催し、参加者から高い評価を得た。 ▶過去の医学教育セミナーとワークショップ受講者の背景調査を実施し、受講登録システムを稼働させ、フェローシップの制度設計を行った。 		

平成26年度

実施計画	<ul style="list-style-type: none"> ▶医療人基礎力向上のための教育プログラム及び多職種連携医療教育プログラムの改良を図る。 ▶開発した教育法をワークショップで普及させる。 ▶事業成果の総括評価・外部評価と次期事業計画の立案。
実施状況	<ul style="list-style-type: none"> ▶入学初期（2学科180名）と臨床実習開始前（5学科300名）における多職種合同の模擬カンファレンス授業を正規授業として実施し、教材開発法、授業運営法、評価法について改良を図った。 ▶岐阜・名古屋地区の医療系大学の志願学生による合同授業（5大学7学科30名）を行い、多職種連携医療教育の効果と問題点をまとめた。 ▶香港大学から客員教授を招聘し、多職種連携教育の研究について情報収集とセミナーを開催した。 ▶秋田大学、九州大学と共催で、高度な内容の各種ワークショップを開催した。第52回（秋田）では、多職種連携シミュレーション、地域医療教育、医療英語など、第54回では、医療者教育の研究、プロフェッショナリズム教育などをテーマにした企画を行った。 ▶第55回（岐阜）では、4年間の共同開発事業の成果に基づき、多職種連携医療教

	<p>育の総合シンポジウムを実施し、多様な教育のあり方について意見交換を行い、普及を図った。また、多職種カンファレンス法、多職種教育の研究に関するワークショップを実施した。</p> <p>▶事業成果をとりまとめ報告書を作成し、国内の医療系大学へ配布した。</p> <p>▶グラスゴー大学出身の特任教授を招聘し、フェローシップを中心とする次期事業計画を共同で立案し、文部科学省に申請した。(平成27年度～31年度の事業が認可された)</p> <p><全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」実施及び参加者数実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第52回医学教育セミナーとワークショップin秋田 参加者数：144人 ・第53回医学教育セミナーとワークショップ(於：岐阜大学医学部) 参加者数：126人 ・第54回記念医学教育セミナーとワークショップin九州大学 参加者数：195人 ・第55回医学教育セミナーとワークショップ (於：岐阜大学サテライトキャンパス) 参加者数：108人
<p>実施度の判断理由</p>	<p>▶多職種連携教育の正規授業への導入を図り、シンポジウム・ワークショップを通じ、全国へ普及させることができた。</p> <p>▶多職種連携教育の開発事業に関する報告書を取りまとめ、全国へ発信できた。</p> <p>▶医学教育セミナーの内容の高度化、フェローシップ・プログラムの構築準備が促進した。</p>

【協力体制】

- ・多職種連携医療教育の共同開発事業に関しては、筑波大学、昭和大学、名古屋大学、広島大学、地域医療振興協会と協力体制を構築し、平成23年度から4年間にわたって教育法の開発を行ってきた。この協力体制は今後も活かす予定である。
- ・医学教育セミナーとワークショップに関しては、千葉大学(平成23年度)、福島医科大学、琉球大学(平成24年度)、京都大学、東京医科歯科大学(平成25年度)、秋田大学、九州大学(平成26年度)と共同開催を行い、各大学の特色・強みを活かし、地域と時代のニーズに合ったワークショップを実施してきた。各大学との協力は、ワークショップ終了後も維持している。平成27年度には埼玉医科大学、香川大学、平成28年度には東京医科大学、兵庫医科大学との共同開催が予定されている。
- ・国際的には、香港大学、マギル大学(カナダ)、グラスゴー大学(英国)などから客員教授・特任教授を招聘し、協力体制を構築してきた。平成27年度にはライプチヒ大学(ドイツ)から客員教授を招聘する予定である。

【改善効果】

- ・多職種連携教育の共同開発事業を行うことで、様々な教育法の開発ノウハウを蓄積し、ワークショップ、セミナー、シンポジウムを通じて普及を図ることができた。特に動画教材の作成法、地域での連携法、正規授業への導入法などの面で、情報発信し、教育法改善に役立てた。また、こうした取組を通じて、各医療専門職の教育者の交流が促進され、相互理解が深まった。
- ・医学教育セミナーとワークショップでは、上記の多職種連携教育の他に、研究法、シミュレーション教育法、グローバル・スタンダード、災害時医療に関するワークショップなどを多数開

催し、時代と社会のニーズに合う医学教育の推進について大きな普及効果があった。

【経 費】

- ・ 多職種連携教育開発事業に中心的に関わる助教を雇用し、効率的・効果的に事業を推進できた。また、教材開発費、ワークショップ開催費は、モデル教材の作成と普及に有効であった。
- ・ ワークショップ参加者のデータ管理システムを整備することで、参加者のニーズを明らかにし、より効果的・体系的なワークショップ参加を促進し、フェローシップ構築準備に繋げることができた。
- ・ 国内各地でのワークショップ開催費は主として学内経費で賄われたが、運営費交付金も有効活用した。
- ・ 客員教授招聘・雇用費用も主として学内経費で賄われたが、平成26年度の特任教授（非常勤枠）は運営費交付金で半年間雇用することができ、今期事業に対する様々なアドバイス、国際化の推進のみならず、次期事業への発展を企画する上で、極めて有効であった。

【その他】

- ・ 本事業の推進は、日本医学教育学会の取組と軌を一にするものであり、相互に協力しながら我が国の医学教育を推進することができた。
- ・ また、国際的な医学教育学会・ネットワークの中で岐阜大学における本事業の取組が認知され、我が国からの発信力向上に資することができた。

②今後の事業の展望

- ・ 多職種連携医療教育については、ひきつづき、セミナー・ワークショップで取り上げ、一層の普及を図る必要がある。ワークショップ経費については主として学内経費を充てる予定である。
- ・ 医学教育セミナーとワークショップの内容の高度化・系統化については、各ワークショップのカテゴリーを明確化し（教授法、評価、カリキュラム開発、研究・マネジメントなどに分類）、参加者がバランス良く受講できるシステムに変更しつつあり、過去5年間の受講履歴についても参加者ごとに集計できるようになり、平成27年度から開始するフェローシップ・プログラムの一環として活用する予定である。経費は主に平成27年度からの運営費交付金を充てる予定である。
- ・ 平成27年度からは、医学教育指導者の養成を目的としたフェローシップ構築を中心に据え、より幅広い受講者を対象として裾野を広げるアソシエイト制度と、一方、医学教育の専門家をめざす修士レベルの教育システムの検討を行う計画である。

特別経費 年度別事業実施経費等

【事業名：多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開】

(教育関係共同実施分)

1. 事業計画期間中における年度別事業実施経費

区 分	17' 予算	18' 予算	19' 予算	20' 予算	21' 予算	
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
事業実施経費総額	0	0	0	0	0	0
連携相手先負担額						
大学法人負担額	0	0	0	0	0	0
人 件 費	0	0	0	0	0	0
学内負担額						
運営費交付金所要額						
運 営 費	0	0	0	0	0	0
学内負担額						
運営費交付金所要額						
設 備 費	0	0	0	0	0	0
学内負担額						
運営費交付金所要額						
学内負担額計	0	0	0	0	0	0
運営費交付金所要額計	0	0	0	0	0	0
区 分	22' 予算	23' 予算	24' 予算	25' 予算	26' 予算	合計
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
事業実施経費総額	0	30,500	32,000	26,500	25,075	114,075
連携相手先負担額		0	0	0	0	0
大学法人負担額	0	30,500	32,000	26,500	25,075	114,075
人 件 費	0	14,000	13,500	12,000	9,700	49,200
学内負担額		3,000	3,000	3,000	2,500	11,500
運営費交付金所要額		11,000	10,500	9,000	7,200	37,700
運 営 費	0	16,500	15,500	14,500	15,375	61,875
学内負担額		9,000	10,500	10,500	11,000	41,000
運営費交付金所要額		7,500	5,000	4,000	4,375	20,875
設 備 費	0	0	3,000	0	0	3,000
学内負担額		0	0	0	0	0
運営費交付金所要額		0	3,000	0	0	3,000
学内負担額計	0	12,000	13,500	13,500	13,500	52,500
運営費交付金所要額計	0	18,500	18,500	13,000	11,575	61,575

2. 平成26年度執行状況調

経費区分	平成26年度			平成26年度 執行額	差引額	差引額の 主な理由
	予算額 (繰越額含む)	平成25年度 繰越額	平成26年度 学内負担額			
(人件費)	千円 9,700	千円 0	千円 2,500	千円 7,200	千円 6,856	千円 2,844
(運営費)	15,375	0	11,000	4,375	18,219	△ 2,844
(設備費)	0	0	0	0	0	0
計	25,075	0	13,500	11,575	25,075	0

専任教員が雇用が
できなかったため、非
常勤教務補佐員を採用
した。また、半年
間、非常勤外国人特
任教授を採用した。
毎年学外で2回開催
するセミナーとワー
クショップが両回と
も遠方で開催され、
また、外部機関所属
の講師人数が当初予
定より多くなり旅
費・報酬額が増大し
た。

教育関係共同利用拠点 申請書

大 学 名	国立大学法人岐阜大学			
申 請 者	学 長 名	森脇久隆		
	本部所在地	〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1番1		
拠 点 の 名 称	医学教育共同利用拠点			
申 請 施 設 の 名 称	医学教育開発研究センター			
申 請 施 設 の 種 類	1. 留学生支援施設 <input checked="" type="checkbox"/> 2. 大学の教職員の組織的な研修等の実施機関 3. 練習船 4. 演習林等 5. 農場 6. 臨海・臨湖実験所及び水産実験所に関する実習施設 7. その他 ※該当する申請に○を付けて下さい			
申 請 組 織 の 代 表 者 (申請施設の運営について権限を有する者)	フリガナ	スズキ ヤスユキ	所 属 部 署	医学教育開発研究センター
	氏 名	鈴木 康之		
	役 職 名	センター長、教授		
	所 在 地	〒501-1194 岐阜県岐阜市柳戸1番1		
	T E L	058-230-6470	F A X	058-230-6468
E - m a i l	ysuz@gifu-u.ac.jp			
1. 教育関係共同利用拠点の全体概要（告示第二条第一号及び第三条第一号関係）				
<p>(1) 共同利用拠点としての認定を受ける趣旨及び必要性</p> <p>当センターは、③専門分野（医学教育）におけるFDの取組を実施する機関である。</p> <p>● 医学教育開発研究センターの目的と役割</p> <p>当センターは「国立大学等の共同利用施設（旧国立学校設置法施行規則第20条の4の8で規定）として、医学教育に関する調査研究及び開発、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事する者の利用に供すること」を目的として、医学教育分野では初の全国共同利用施設として平成13年4月に設立された。</p> <p>当センターは“本邦における医学教育分野のナショナル・ティーチャー・トレーニングセンター”としての役割を重要な使命とし、新たな教育法の開発研究を行うとともに、全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」を年4回開催し、全国の医学部・医療系教育機関の教員、臨床指導医、模擬患者などに対して多彩な研修事業を実施し（通算52回、のべ参加者6000名以上）、受講者は全医学部・都道府県に及び、各大学・地域で指導者として活躍している。本FDの成果・教材は季刊誌「新しい医学教育の流れ」として定期刊行され、全国の医学部のみならず幅広い医療教育機関で活用されている。また、ワークショップを積極的に他大学と共催・公募することで、全国から指導人材・教育法・コンテンツの発掘に努めている。当センターはまた医学教育分野の事務系職員研修（SD）にも力を入れ、国公私立大学医学部・歯学部教務事務職員研修（通算15回、参加者650名以上）、臨床研修事務担当者に対する研修会を開催してきた。さらに平成22年に医学教育共同利</p>				

用拠点として認定され、4大学・1組織と多職種連携医療教育法の共同開発事業を行い、全国ワークショップで教育法と教材開発の成果の普及を図ってきた。

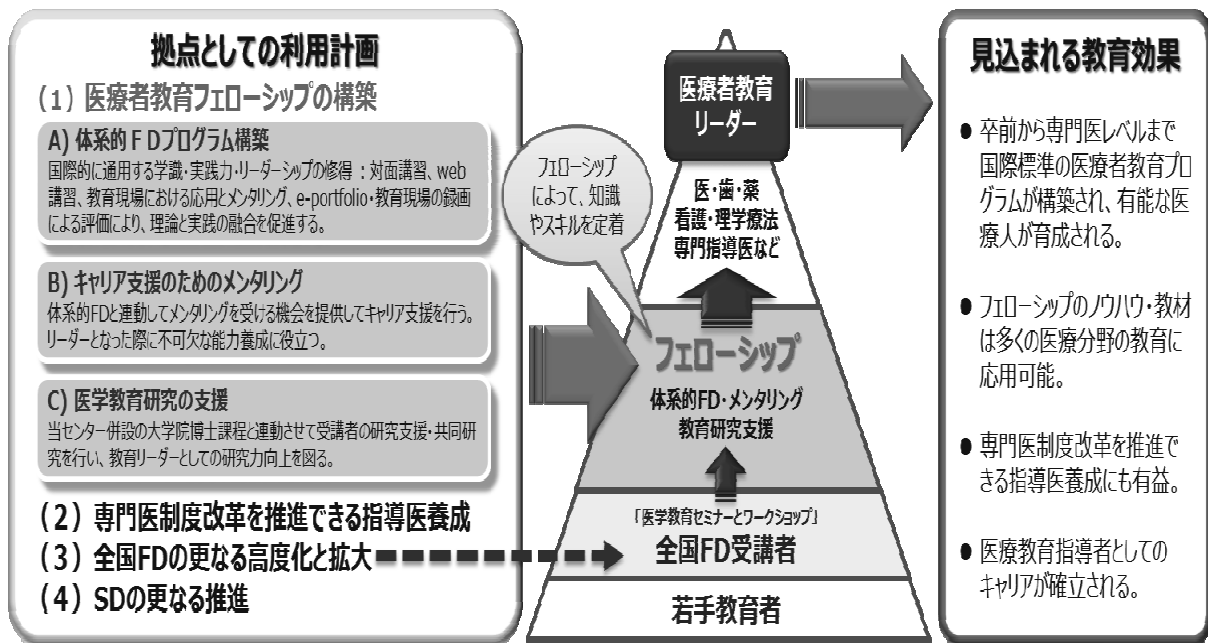
こうした取組により、教育の両輪である教員と事務職員の能力向上に貢献し、多くの受講者は教育能力を伸ばしているが、単発的な受講のみでは知識やスキルの定着度は充分とは言えないこと、医師だけでなく幅広い医療教育分野においても教育リーダーの育成が重要であることが明らかになっている。

以上のことから、教育者としての更なる資質向上とキャリア開発を促進し、これからの超高齢社会・国際化社会に対応できる医療人を育成し、真に教育を牽引できるリーダーを育成するためには、継続的に医療指導者の能力開発を支援する体系的な「医療者教育フェローシップ・プログラム」を構築し、全国と連携してリーダーを育成してゆく必要がある。海外ではリーダー育成のための医療者教育修士課程やフェローシップ・プログラムが普及しつつあるが、わが国の取組は立ち遅れている点も大きな問題である。

次期5年では、当センターの14年間の全国共同利用施設、平成22年からの共同利用拠点としての活動の成果と分析を基盤とし、全国の医療系教育機関と連携して、新たなFDの姿として「医療者教育フェローシップ・プログラム」を構築し、国際標準の学識・実践力・リーダーシップを備えた医療者教育分野のリーダーを養成する計画である。この取組により、急激な社会変化と国際化に対応できる優れた医療人を育成し、わが国の医療・福祉の向上と国際化を推進し、全国共同利用拠点としての役割を果たす。

● 継続認定後の施設の利用計画

- (1) 医療者教育フェローシップの構築：大学教員・臨床指導医・幅広い医療教育指導者を対象として、教育・研究の実践能力をさらに高め、リーダーシップ/マネジメントについても修得するコンテンツを「フェローシップ・プログラム」（下記A, B, C）として提供し、リーダー認定制度を構築する。この取り組みを通じて、医療系学生の基本的な能力や能动性に応じた、全国の大学で活用できる質の高い研修カリキュラムを提供するとともに、研修教材の開発も行う。また、数年後には幅広い医療教育者を対象とした修士課程を構築することを視野に入れている。



- A) 体系的FDプログラムの構築：体系的な10単元から構成される継続的プログラムを提供する（次表）。プログラムを提供するためのウェブサイト構築と10単元の教材開発（テキスト、ビデオ、portfolioなど）を行う。具体的には、セミナー・ワークショップ(WS)による対面講習、web講習による教育を行い、各参加者の教育現場における応用に関してメンタリングを行うことによって定着を図り、e-portfolio・教育現場の録画などで評価することにより、理論と実践の融合を促進させる。1~2年で10単元を修了させ、評価した上で共同利用拠点認定の“医療者教育リーダー”の称号を授与する。

領域	コンテンツ	講習方法			評価
		WS*	Web講習	実地研修	
教育	教育の原則	○	—	○	EP**
	効果的な教え方	—	○	○	動画記録、学習者評価、EP
	妥当な学習評価	—	○	○	EP
	カリキュラム構築	—	○	○	EP
	プログラム評価	○	—	○	EP
研究	教育研究のデザイン	○	—	○	研究計画書、EP
	エビデンスの教育への応用	—	○	○	EP
リーダーシップ マネジメント	医療・教育の質管理	—	○	○	改善計画書、EP
	人を育てるコーチング	○	—	○	動画記録、学習者評価、EP
	プログラムの適切な運営	—	○	○	360度評価

* WS: ワークショップ ** EP: e-Portfolio

【メンタリング】メンターと呼ばれる指導者が、メンティーと呼ばれる学習者と信頼関係を結び、助言や本人の気づきを促しながら、学習者の自律的な発達を促す人材育成法の1つである。

【e-portfolio】日々の学習エビデンスを蓄積し、定期的に自分の学習成果を振り返り（記録し）、メンターの助言を受け（記録し）目標達成をめざす一連の記録をポートフォリオと言い、電子化されたものをe-portfolioという。長期にわたる学習者の成長、プロフェッショナリズムなどを評価できる手法として広まっている。

【360度評価】学習者を観察できる立場にある多くの同僚から、学習者の日常業務などについて評価してもらう方法。医療現場では、指導医・同僚医師・後輩研修医・看護師・患者・事務職員などから評価される。日々の診療態度、教育姿勢など全人的な評価が可能である。

- B) **キャリア支援のためのメンタリング**：本フェローシップ参加者に対して、体系的FDと連動して、メンタリングを受ける機会を提供してキャリア支援を行う。医療教育者が教育者としてのキャリアを積むために、ベテラン指導者からのメンタリングは極めて有益であり、自らがリーダーとなった際にもメンタリング・コーチング技術が役立つ。
- C) **医学教育研究の支援**：当センターに併設された大学院博士課程（医学教育学分野）の機能と本フェローシップを連動させて共同研究を行うなど、受講者の研究を支援する。教育研究は教育者としてのキャリア支援に重要な役割を果たし、教育リーダーとしての研究力向上を図る。
- (2) **専門医制度改革を推進できる指導医の養成**：本フェローシップは専門指導医育成にも利用できるものであり、医学教育学会、小児科学会など各学会のニーズに合わせて、コンテンツを提供し、専門指導医の育成に活用する。専門医制度改革が目前に迫っているが、指導・研究・プログラム運営能力を兼ね備えた指導医の養成は立ち遅れており、本フェローシップを活用することで指導医の能力向上を図る。
- 【専門医制度改革】**従来、専門医の認定は各学会が独自の基準で行っていたが、専門医の資質向上とアカウントビリティの観点から、2017年から全国統一基準で研修指導体制を整備し、専門医を認定する計画となっている。指導医についても認定要件を定める事になっている。
- (3) **「医学教育セミナーとワークショップ」の更なる高度化と拡大**：全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」は当センターの基幹事業であり、従来から受講者のレベル・専門分野に即した内容で研修を行ってきたが、今後さらに受講者のニーズの多様化に合わせた企画として発展させる。
- ・ 医学部だけでなく医療系大学との共同開催を推進する。
 - ・ ワークショップを指導できる人材を発掘・育成するために公募を拡大する。
 - ・ 海外講師・海外参加者とともに議論できる国際ワークショップを企画し内容の高度化を図る。
 - ・ 海外臨床実習・留学など、意欲ある学生を指導、支援する方法をワークショップにて普及させる。
- (4) **事務系職員・教育補助担当者に対するSDの更なる推進**：
- ・ 医学部・歯学部教務事務職員研修の内容をアップデートし専門性を高める。
 - ・ 臨床研修事務担当者に対する研修会を定期化し、臨床研修の充実に資する。
 - ・ 学習困難学生も含めた全医療系学生に対する支援の充実に資するべく問題点を発掘し、対応を指導する。
 - ・ 模擬患者に対する研修内容を充実させ、医療者教育効果を高める。

(5) 年度別の取組計画

	医療者教育フェローシップの構築			専門医制度への展開	全国FDの高度化	SDの更なる推進
	体系的FD	メンタリング	研究支援			
27年度	ウェブサイト構築 教材開発 パイロット研修	ニーズ調査 メンタリング (トライアル)	ニーズ調査 研修支援 (トライアル)	ニーズ調査	受講者の分析 ニーズ調査 公開の拡大	教務事務職員研修 模擬患者研修 の充実・拡大
28年度	フェローシップ 本格導入	体系的FDと連動 したメンタリング	体系的FDと連動 した研究支援	パイロット研修	医療系大学との 共修・ 国際ワークショップ	臨床研修事務職員 研修の定例開催
29年度	 融合（フェローシップ・プログラム）			波及	中間評価	中間評価
30年度	改善と継続、次期取組の構想（医療者教育大学院など）			多くの学会 への展開	改善と継続	改善と継続
31年度	各事業の全国展開・全国シンポジウム プログラム評価・成果報告（論文）・次期取組の企画					

● 見込まれる教育効果

- (1) 医療者教育の改善：本フェローシップで養成する指導的人材が全国の医学部・医療系教育機関・専門研修病院などで活動することにより、卒前から卒後の専門医レベルに至るまで一貫した国際標準の医療者教育プログラムが構築され、社会変化と国際化に対応できる有能な医療人が育成され、ひいては医療の質の向上が期待される。
- (2) フェローシップの効果：国際的には医療者教育大学院やフェローシップ形式の人材育成が拡充されており、我が国でも取り組む必要がある。単発のFDでは得られた知識・スキルの定着度は低いが、継続的・体系的なフェローシップによって定着が促進され、実践と組み合わせることで応用力が得られる。
- (3) コンテンツの他分野への応用・波及：本プログラムで開発する教材や指導のノウハウは、受講者を通じて全国へ波及し、他の医療教育機関、各専門学会の指導医育成に利用することが可能となる。ポータルサイトとしてのホームページ機能を強化することにより、他分野への応用・波及が容易になる。
- (4) 医療教育指導者のキャリア確立：医療分野において、教育は臨床業務や研究に比べ優先度の低い職責と見なされがちであったが、医療教育指導者のキャリア・パスが形成されることにより、教育者としてのキャリアを選択する者が増え、教育の質の更なる向上が実現する。

具体的な成果目標と教育効果の評価方法：本プログラムの効果を評価するために、以下のような側面から多角的に評価する。

成果目標	評価方法
プログラムの充実度	受講者からのフィードバック・評価（アンケート）
受講者個人の教育能力の向上	自己評価（アンケート）、ポートフォリオ 所属機関の長・同僚・学習者の360度評価
医療者教育のリーダー（本フェローシップ修了者）が全国各地に配置される	受講者数、地域分布、所属機関におけるキャリア・役職、 専門学会等での役職
上記リーダーが若手教育者の育成に貢献する	自己評価、ポートフォリオ、360度評価 受講者の所属機関における教育業績
国際標準の教育カリキュラムが普及する	所属機関・組織のカリキュラム評価、国際認証評価
急激な社会変化と国際化に対応できる医師・医療人が育成される	卒業生・研修修了生の能力評価（自己評価、360度評価）、 医療統計、ワークフォース統計、保健統計
開発されたプログラム・教材が全国に普及する	全国における取組状況（大学、専門学会） ポータルサイト利用状況、講師派遣とFDの内容

【国際認証評価】 WHO 下部組織の世界医学教育連盟が定めた国際基準に則った医学教育を推進するために、各国は医学教育分野の認証評価制度を定める必要に迫られている。米国は2023年以降、認証を受けていない医学部卒業生を米国研修から排除することを宣言している。

● 大学間連携への貢献

- (1) 「医学教育セミナーとワークショップ」を通じた大学間連携：当センターの基幹事業である全国FD「医学教育セミナーとワークショップ」はこれまで、全医学部・全都道府県から教員・指導者が参加し、大学間の交流・連携の場として多職種連携教育など多くの共同事業が誕生してきたが、参加者数にはまだ地域差が存在する。また24大学と共同開催してきたが、未だ共催校のない地域も存在する。今後5年間で10大学以上との共催を進め、参加者数の地域格差も減少させる。共催校の特長と地域的課題を考慮して研修テーマを定め、各地域の医療者教育の改善を図る。
- (2) フェローシップ受講者の所属大学との連携：本フェローシップが導入されることにより、受講者および所属大学と当センターの連携が一層強化され、受講者を通じて全国へ新たな教育・人材育成が波及することが期待される。また医学教育の研究を推進する過程でも連携する。
- (3) 客員教授制度による大学間連携の強化：歴代客員教授（日本人客員教授8名、外国人13名）の多くと現在も連携を続けており、FDにおける指導、共同研究の推進、教員の国際交流、日本の医学教育に関する国際的な情報発信に貢献している。今後も毎年1名ずつ招聘する予定であり、フェローシップ・プログラムについて客員教授の指導助言を受けて推進する計画である。

2. 申請施設の概要（告示第二条第二号及び第三条第二号、第三号関係）

● 組織・スタッフ

センター長	鈴木康之
専任教員 (6名)	鈴木康之（教授）：カリキュラム開発、PBL、小児科学、医学教育研究、人材育成 藤崎和彦（教授）：医療コミュニケーション、プロフェッショナリズム、総合診療学 丹羽雅之（教授）：e-ラーニング、PBL、基礎医学教育、統計学、薬理学 西城卓也（准教授）：医療者教育学、総合診療学、臨床技能教育、シミュレーション 川上ちひろ（助教）：医療コミュニケーション、学習者支援、多職種連携 今福輪太郎（助教）：教育学、言語学、質的研究、国際交流
非常勤講師 (11名)	阿部恵子：プロフェッショナリズム、医療コミュニケーション、多職種連携 若林英樹：家庭医療、総合診療学、シミュレーション 加藤智美：医療コミュニケーション、小児科学 阪下和美：医療英語、国際交流、小児科学、臨床技能教育、シミュレーション 吉村 学：地域医療、総合診療学、多職種連携、生涯教育 後藤忠雄：地域医療、総合診療学 岩砂真一：産婦人科学、地域医療、医療コミュニケーション、ライフサイクル 市橋亮一：総合診療学、地域医療、在宅医療 鈴木美砂子：家族療法、臨床心理学 河野健一：治験コーディネーター、治験データ管理、医療マネジメント 中島優哉：化粧品化学、食品化学、予防医学
客員教授 (3名)	Susan Bridges（香港大学、予定）：医療者教育、質的研究 長谷川仁志（秋田大学）：アウトカム基盤型教育、臨床技能教育 Phillip Evans（特任教授）：医学教育・教育研究・大学院教育
事務系職員 (5名)	北野（係長）、藤田、安藤、古田、村岡

● 事業実績

- 教育関係共同利用拠点事業「多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開」（平成22～26年度）【別紙1】：岐阜大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学、昭和大学、地域医療振興協会が共同して多職種連携医療教育の教育法と教材開発を行っている（医療系学生への段階的多職種連携教育プログラム、地域医療現場で

学ぶ多職種連携教育プログラム、Interprofessional PBL を活用した効果的な多職種連携教育、卒前教育での多職種連携教育、医科-歯科連携口腔衛生管理のための多職種連携教育者養成プログラム、初年次多職種連携模擬カンファレンス、東海地区卒前多職種連携医療教育 in 岐阜)。この成果を各種ワークショップで全国展開し普及に努めてきた (PBL を通して学ぶ職種間連携、臨床現場で学ぶ職種間連携、専門職種連携教育、経験学習サイクルを回しながら学ぶ専門職種連携ファシリテーションスキル、多職種連携教育 (IPE) 最新の実践報告と交流、多職種連携医療教育の“一粒で二度美味しい”シナリオづくり、境界と壁を超える：職種間連携の実践と社会学的考察)。また、多職種 PBL 授業「医療と生命」を岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学と共同して実施してきた。

- **全国 FD「医学教育セミナーとワークショップ」【別紙 1】**：医学・医療系教員を対象とした当センターの中核的研修事業であり、平成 13 年度に当センターが設立されて以来、毎年 4 回開催し、現在 52 回を数えている。参加者は 6000 名を越え、医学のみならず、歯学・薬学・看護学などすべての医療専門職の教育に関わる指導者、研修医、学生、模擬患者、事務職員 (学部、臨床研修) 救急隊員など、極めて多様な背景を有している。また受講者は全医学部・全都道府県に広く分布して各地で指導者として活躍している。FD はのべ 325 回に達し、基本的な教育法、様々な医学分野の教育法、学習者・教育者の成長、教育評価、カリキュラム開発、教育研究、リーダーシップなど極めて多様な FD を実施して参加者から高い評価を得てきた。年 4 回のうち 2 回は全国の医学部と共催しており、今までに 24 大学と地域のニーズと特色を活かして共催校所在地にて開催してきた。また、医学教育学会、歯科医学教育学会、小児科学会などの活動と連携してワークショップを企画してきた。参加者からの評価・フィードバックを分析して次の企画に活かし、メーリングリストを通じて定期的な情報提供を行っている。

<共催校> 久留米大学、近畿大学、藤田保健衛生大学、東京慈恵会医科大学、金沢医科大学、岩手医科大学、筑波大学、横浜市立大学、東京大学、徳島大学、名城大学 (薬学部)、大阪医科大学、日本医科大学、慶應義塾大学、札幌医科大学、東邦大学、名古屋大学、広島大学、千葉大学、福島県立医科大学、琉球大学、京都大学、東京医科歯科大学、秋田大学。今後、九州大学、埼玉医科大学と共催予定。

- **教務事務職員研修 (国立大学医学部長会議常置委員会・全国医学部長病院長会議主催)【別紙 1】**：教育支援に不可欠な能力の高い事務職員を養成することを目的とし、平成 13 年度以降、毎年 1 回開催し、今までに全国の医学部・歯学部から約 650 名の教務事務職員が受講している。講習後もメーリングリストを通じて定期的な情報提供・情報共有・意見交換を行っている。

卒後臨床研修の必修化後は、臨床研修を支援する事務職員の研修を「医学教育セミナーとワークショップ」の企画として 5 回開催し、事務担当者のスキルアップに努めてきた。

- **他大学・他組織に対する研修事業【別紙 1】**：全国の医学部のみならず、医療系教育機関 (歯学、薬学、看護、リハビリテーション、鍼灸など)、学会 (医学教育学会、歯科医学教育学会、小児科学会など)、地域医療機関、その他の組織から依頼を受け、医学教育に関する知識や技能の提供、研修会の企画・開催などを行っている。平成 23~25 年度に、44 大学、28 組織に対して、のべ 99 回の研修指導を実施した。

- **インターネット・テュートリアル教育【別紙 1】**：大学、地域、国の枠を越え、また学部・大学院などの各レベルに応じた問題基盤型共同教育 (インターネット・テュートリアル教育) を提供している。卒前教育としては、岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学と共同して「医療と生命」をテーマに、ウェブ上の仮想クラスで議論する問題基盤型教育 (PBL) を実施している。また岐阜大学大学院工学研究科・応用生物研究科の授業として、生命や医療に関する多学部合同の PBL を展開している。

- **客員教授 (日本人、外国人) と国際交流【別紙 1】**：平成 13 年度以来、9 名の国内客員教授 (日本人 8 名、外国人 1 名)、12 名の国外客員教授を招聘し、国内外の連携を促進した。国外客員教授は米国、カナダ、英国、オランダ、オーストラリア、タイ、マレーシア、台湾から招聘しており、平成 21 年度にはグラスゴー大学医学部と交流協定を締結し、教員の相互交流・短期留学を行っている。韓国の医学教育指導者と国際認証に関する情報交換、ベトナムにおける臨床指導者の人材養成 (JICA プロジェクト) にも貢献している。平成 26 年度にはマギル大学 (カナダ) において日本人臨床指導者を対象とした現地 FD を 1 週間行う予定である。歴代客員教授とその専門領域を以下に示す。

Farhan Bhanji (カナダ McGill 大学)：医療者教育、小児科学

Keh-Min Liu (台湾 高雄医学大学)：国際認証、リーダーシップ、解剖学

Peter Barton (オーストラリア Monash 大学)：総合診療、臨床技能教育

Jennifer Cleland (英国 Aberdeen 大学) : 医療コミュニケーション、医療者教育
 Jan-Joost Rethans (オランダ Maastricht 大学) : 総合診療、臨床技能教育
 Trevor Gibbs (英国 WHO) : 総合診療、医学教育学、国際交流、リーダーシップ
 Erik Driessen (オランダ Maastricht 大学) : ポートフォリオ、学習者評価
 Phillip Evans (英国 Glasgow 大学) : 医学教育学、教育研究手法、リーダーシップ
 Ratanavadee Nanagara (タイ Khon Kaen 大学) : 臨床教育、内科学
 Jutti Ramesh (マレーシア マレーシア国際医学大学) : 臨床教育、外科学
 Gregg Colvin (米国 North Carolina 大学) : 臨床教育、総合内科学
 Chirasak Khamboonruang (タイ Chiang Mai 大学) : 感染症学
 Alan Lefor (自治医科大学) : 臨床技能教育、外科学
 長谷川仁志 (秋田大学) : 医療者教育、臨床技能教育
 錦織宏 (京都大学) : 医療者教育、医学教育研究、総合診療学
 大西弘高 (東京大学) : 医療者教育、医学教育研究、総合診療学
 寺嶋吉保 (徳島大学) : 臨床技能教育、外科学
 栗本秀彦 : 臨床教育、総合内科学
 名郷直樹 (地域医療振興協会) : 地域医療、総合診療学、EBM
 吉田一郎 (久留米大学、故人) : 医学教育、小児科学
 松尾理 (近畿大学) : 医学教育、基礎医学教育、PBL、生理学

- 大学院博士課程（医学教育学分野）の開設 : 2008 年に岐阜大学大学院医学系研究科・医療管理学講座の中に「医学教育学分野」を創設し、当センター教員が兼担して、8名の大学院生、1名の研究生を指導して多彩な研究を推進している。大学院生は全員社会人で、いずれも経験豊富な臨床指導医や医療系教育機関の教員であり、今後、医療者教育分野のリーダーとして活躍することが期待される人材である。社会人の研究指導のため、ウェブ会議システムを活用している。
- 医学生を対象とした医療英語ワークショップ : 医学教育の国際化、特に医学生の海外経験を促進する目的で、主として5年生を対象とした実践的医療英語教育ワークショップを構築し、医学生の海外臨床実習を奨励している。週末を利用した集中的トレーニング、学習を支援する教職員、資金的援助体制の構築、自主的海外実習を支援するガイドブックの作成、実践的英語運用能力を検定する実技試験 (English OSCE) を構築し、国内の医学生・教員にも情報交換して成果の普及を図っている。

● 予算

➤ 平成 23 年度～25 年度の主な予算を以下に示す

単位：円

	大学運営経費	特別経費 (運営交付金)	その他の学内予算	外部資金
23 年度	12,000,000	18,500,000	研究経費 5,107,764 学部運営費 300,000 活性化経費 500,000	文部科学省科学研究費等 8,785,000 厚生労働省科学研究費等 3,300,000 奨学寄付金 2,500,000
24 年度	12,000,000	18,500,000	研究経費 5,517,788 学部運営費 300,000 活性化経費 990,000	文部科学省科学研究費等 8,430,000 厚生労働省科学研究費等 3,100,000 奨学寄付金 2,580,000
25 年度	12,000,000	13,000,000	研究経費 5,181,002 学部運営費 300,000 活性化経費 500,000	文部科学省科学研究費等 6,450,000 厚生労働省科学研究費等 3,200,000

※ 申請施設におけるこれまでの主な利用実績【別紙 1】

※ 添付資料：岐阜大学学則 【資料 1】

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター規程 【資料 2】

岐阜大学概要（医学部、大学院医学系研究科） 【資料 3】

医学教育開発研究センターパンフレット 【資料 4】

医学教育学分野（大学院）パンフレット 【資料 5】

医学教育開発研究センターホームページ 【資料 6】

医学教育 45巻1号別刷 「医療教育者育成のいままでとこれから」 【資料7】
 報告書、2010年以降に発行した書籍表紙・目次コピー 【資料8】
 (現物を別途1セット提出済み)

新しい医学教育の流れ(平成25年分、4冊)
 Professor Gibbs' History Taking & Physical Examination(DVD book)
 Practical English Conversation In the Medical Interview(DVD book)
 医学教育の理論と実践
 日本の医学教育の挑戦

経費に関する資料(平成25年度決算関係資料) 【資料9】

人員(平成26年4月1日現在)

教授	准教授	講師	助教	助手	小計	技術職員	事務職員	合計
3	1		2		6		1	7
(1)	()	()	()	()	(1)	(1)	(3)	(5)

(注)上段には専任の教職員数を記入し、下段には兼任教職員や非常勤教職員等の人数を、()書きで外数で記入して下さい。

外国人客員教授1名、外国人特任教授1名を平成26年度内に招聘する予定である

3. 教育関係共同利用の状況

(1) 運営委員会の状況

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会

開かれた運営体制を確保し、幅広い意見を拠点の運営などに反映させるため、運営協議会を置いている。本協議会は学内委員10名および学外の学識経験者5名で構成され、センターの基本方針、研究計画、共同利用、その他センター長から諮問された事項を審議することを目的とし、原則年1回開催されている。

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会

組織、運営、教育職員の人事、センター長候補者、その他センターの管理運営に関する重要事項を審議するため本委員会を置き、必要に応じて年数回開催されている

設置規則及び委員名簿を別途添付して下さい(告示第二条第三号及び第三条第四号関係)

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会細則 【資料10】

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会細則 【資料11】

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会委員名簿 【資料12】

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会細則委員名簿 【資料13】

(2) 教育関係共同利用の公募方法(告示第二条第四号及び第三条第五号関係)

※共同利用拠点を利用する大学に関する公募・決定の方法について記載して下さい

- 医学教育セミナーとワークショップ: 共催校の選定は、地域的バランス、共催校の教育組織体制、社会的ニーズなどを基準として希望校を募り決定している。個々のワークショップの企画・指導者の選定は主に当センターと共催校で決定しているが、他に公募によるワークショップ、各種専門学会(医学教育学会、歯科医学教育学会)等のニーズ、参加者からの要望も考慮して実施している。参加者(教職員、研修医、学生、模擬患者等)はウェブサイト、文書配布、メーリングリストなどを活用して全国規模で募集しており、不利・不公平が生じないように配慮している。
- 共同開発事業(多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開): 平成23~26年度に実施している本事業は、全国公募を行って17大学・組織からの応募があり、運営協議会委員の公正な評価によって4大学1機関を選定し、現在、共同事業を推進している。
- 共同教育・共同研究: インターネット・テュートリアル教育については全国の医学・歯学系大学に参加を呼びかけ、希望する大学に参加を認めている。医療英語ワークショップは主として学内学生を対象としている

が、他大学の学生・教員にも開放している。共同研究についても、大学院を活用しながら全国の医学部・医療系教育機関・医療機関と連携して積極的に推進している。

(3) 教育関係共同利用に供する施設、設備及び資料等の状況【別紙2】

(告示第二条第五号及び第三条第六号関係)

- 医学教育開発研究センターの占有面積は【別紙2】のとおり合計421㎡で、このうち共同研究室79㎡、国際交流室75㎡、ミーティング室45㎡、客員教授室23㎡は共同利用に供することが可能である。
- スキルラボ(合計167㎡)は岐阜大学医学部の教育スペースであるが、ワークショップや教材開発のために共同利用に供することが可能である。
- その他、岐阜大学医学部の会議室、記念会館講堂、講義室、テュートリアル室、岐阜駅前の岐阜大学サテライトキャンパスをセミナー、ワークショップ、各種研修のために利用できる。

(4) 共同利用する大学や利用者に対する支援体制(告示第二条第六号及び第三条第七号関係)

- 研修コンサルタントとしての経験、専門性を備えた専任担当者【別紙1、スタッフ一覧表】
 - 別紙1に列挙したように、当センターの専任スタッフは年4回開催している医学教育セミナーとワークショップの講師を務め、また他大学等の要請に応じて各種研修会を企画・指導する力を備えている。
 - スタッフ一覧表に示すように、教員毎に多様な専門性を備えており、多様な相談に応じることが可能である。(カリキュラム開発、PBL、医療コミュニケーション、臨床スキル、シミュレーション教育、eラーニング、プロフェッショナリズム、医療者教育研究、質的研究、学習者支援など)
- 教職員研修に関する情報収集・調査研究と相談体制
 - 医学教育セミナーとワークショップでは、参加者の満足度・フィードバックなどを毎回調査して、当センターが年4回発行する“新しい医学教育の流れ”に掲載するとともに、研修事業の分析結果を日本医学教育学会機関誌に報告している。
 - 視察・相談の受入：年間約20件の視察・見学とそれに伴う相談があり、これらに対して当センタースタッフが蓄積してきた実践的ノウハウに基づいて、多様な相談に応じる事が可能である。
- 他大学からの要請に応じた講師派遣【別紙1】
 - 別紙1に挙げたように、他大学・学会・教育組織からの要請に基づいて、当センターの教員が専門性に依拠して毎年20回以上の講演やワークショップの指導を行ってきており、今後も十分支援できる体制にある。スタッフ表に示すように当センター教員は多様な専門性を有している。
- FD・SDの積極的な普及
 - 全国FD(医学教育セミナーとワークショップ)を年4回、全国SD(教務事務職員研修)を年1回定例開催し、これらを基盤としたFD・SDを他大学等の要請に基づいて積極的に実施している。
- 他大学の教育・研修組織との連携【別紙1】
 - 医学教育セミナーとワークショップでは共催校の教育・研修組織と連携して企画・運営を行ってきた(現在までに24校と共催：久留米大学、近畿大学、藤田保健衛生大学、東京慈恵会医科大学、金沢医科大学、岩手医科大学、筑波大学、横浜市立大学、東京大学、徳島大学、名城大学(薬学部)、大阪医科大学、日本医科大学、慶應義塾大学、札幌医科大学、東邦大学、名古屋大学、広島大学、千葉大学、福島県立医科大学、琉球大学、京都大学、東京医科歯科大学、秋田大学。今後、九州大学、埼玉医科大学と共催することが決定している。
 - 全国の医学部の教育・研修組織と共同して医学教育ユニットの会を組織し(72大学、147組織が参加)、定例会とメーリングリストによる情報交換を行っている。
- 教職員の組織的な研修等を支援するための教材やプログラム等を開発する体制
 - 年4回発行している「新しい医学教育の流れ」【別紙2】には、医学教育セミナーとワークショップで使用した各種資料が掲載されており、参加者自らが研修会を実施する際の支援教材となっている。
 - 2012年発行の「日本の医学教育の挑戦」(篠原出版新社)は、過去13年間に当センターが企画実施した

各種 FD の経験と国際的な動向を踏まえて医学教育の諸問題解決に関して実践的に示したテキストであり、全国の組織的研修を支援する教材である。また、問題基盤型学習、医療コミュニケーション教育、医療英語教育などを支援する教材 (DVD book) も開発した。(情報発信の項に記載)

- 当センター教員は前述のような多様な専門性を有し、他大学等の要請に応じて研修を企画することが可能である。また他大学の教員と共にプログラムを開発する体制となっている。

(5) 教育関係共同利用に関する情報提供・情報発信 (告示第二条第七号及び第三条第八号関係)

- ホームページ：ポータルサイトとしての機能強化を図り、以下のような情報提供を行っている。
 - 医学教育セミナーとワークショップ・事務研修情報：開催要項、事前登録受付サイト
 - インターネット・チュートリアル：開講科目の情報、参加登録、教材提示、グループ討議掲示板
 - 医療コミュニケーション教育：実習予定と視察受入情報
 - 客員教授：歴代客員教授情報、セミナー教材 (ダウンロード)
 - 医学教育ユニットの会：全国の医学部に設置された教育関係組織の情報、メーリングリスト
 - 医学教育用語集 (ビタミンEメール、ながら情報)：難解な医学教育用語の平易な解説集
 - スキルスラボ、シミュレーション学習教材：シミュレータのリスト、動画教材 (学内限定)
 - 教育研究 (大学院)：募集要項、研究内容、パンフレット (ダウンロード)
 - 国際交流、医療英語教育：医療英語ワークショップ情報、各種書類 (ダウンロード)
- 新しい医学教育の流れ (医学教育セミナーとワークショップの記録集)：年4回発行し、全国の医学部・歯学部、医学教育組織等に情報提供している。
- センター年報：センターの取組実績について毎年1回発行し、全国の医学部等に情報提供している。
- 出版事業：問題基盤型学習、医療コミュニケーション、医療英語などに関して教材を出版している。主な出版物は以下のとおりである。
 - 模擬診察シナリオ集第5版：病気になって初めて知ったこと。三恵社、pp 283, 2004
 - チュートリアルシステムコアタイム (DVD book)。三恵社、pp 34, 2005
 - スケルトン病院 ～患者と医師の出会いから学ぶ～ 模擬患者参加型医療面接実習の実際 (DVD book)。三恵社、pp 56, 2005
 - 医療コミュニケーションー実証研究への多面的アプローチ。篠原出版新社、pp 161, 2009
 - 英語で学ぶ医療面接の基礎 -コミュニケーションと異文化理解- (DVD book) 三恵社、pp 42, 2009
 - Gibbs 教授の英国流診察スキル -医療面接と系統的身体診察- (DVD book) 三恵社、pp 50, 2009
 - 医学教育の理論と実践。篠原出版新社、pp 498, 2010
 - 日本の医学教育の挑戦。篠原出版新社、pp 241, 2012
- 各種パンフレット：医学教育開発研究センターの概要、問題基盤型学習の解説、大学院の概要
- メーリングリスト：①医学教育セミナーとワークショップ参加者、②教務事務職員、③医学教育ユニット教員、④大学院生・研究生・指導者、⑤医療英語受講生、⑥教育分野別グループ、⑦センタースタッフを対象とした各種メーリングリストを構築し、医学教育に関する最新情報、各種研修会や共同プロジェクトに関する情報提供、参加者間の情報交換・意見交換を行っている。
- ウェブ会議システム：大学院生の研究指導、共同事業打合せ、ワークショップ共催校との打合せ、各種学会活動に関する意見交換などの用途に用いている。センターと多地点を結び、音声、画像、資料提示、録音、録画などが可能である。
- Facebook：医療英語と海外臨床実習に関する情報提供と共有を行っている。

(6) 単年度又は複数年度の教育関係共同利用への利用見込み大学、利用見込み者数等 (告示第二条第八号及び第三条第九号関係)

年間の事業見込み、参加者数見込みは以下のとおりである。(実績による)

- 教職員を対象とした研修
 - 医学教育セミナーとワークショップ：年間4回 (他大学との共催2回)、受講者総数 約600名
講師総数 約100名 (当センター教員のべ約50名、他大学講師約50名)
 - 教務事務職員研修：1回、受講者約50名、講師8名 (当センター6名、外部講師2名)

<ul style="list-style-type: none"> ➢ その他のセミナー：約 10 回、受講者総数 約 200 名、講師総数 10 名 ● 共同授業実践 <ul style="list-style-type: none"> ➢ インターネット・テュートリアル：7 コース、参加校 7 校、受講者約 500 名、チューター約 50 名 ● 共同研究・開発事業 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 共同研究：6 件、約 15 名（国内 3 件、国際 3 件） ➢ 教材開発：6 件、約 15 名（国内 3 件、国際 3 件） ● 他大学・組織に対する講師派遣：年間約 20 大学、のべ 30 回（受講者総数 約 1000 名） ● 相談、視察の受け入れ、来訪者：年間約 20 件、約 50 名 ● 客員教授の招聘：日本人 1 名、外国人 1 名（約 3 か月） ● ウェブ会議システム：年約 30 回、のべ参加者約 400 名 ● メーリングリスト：①医学教育セミナーとワークショップ参加者約 3000 名、②教務事務職員約 500 名、③医学教育ユニット教員約 300 名、④大学院生・研究生・指導者 15 名、⑤医療英語受講生約 30 名、⑥教育分野別グループ約 100 名
<p>4. その他（告示第二条第一号から第八号及び第三条第九号関係） 拠点認定の継続を希望する施設のみ記載して下さい。</p>
<p>平成 22 年の拠点施設認定時の通知に記載された「特記事項」 ○全国の中核拠点たる更なる設備・体制等の充実に努めるとともに、提供プログラムの高度化等の取り組みに努めること</p> <p>それに対する本申請時までの「取組内容」</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 当センターの占有スペース(教員研究室 120 m²、客員教授室 23 m²、事務室 79 m²、共同研究室 79 m²、合計 301 m²)の他に、学内共有スペースの中からミーティング室 45 m²、国際交流室 75 m²を新たに拡充し、多職種連携医療教育法の共同開発事業、インターネットを通じた遠隔地とのウェブ会議、大学院生の研究指導が充実した。また、学内 FD や学生教育にも活用できる体制となった。 (2) JR 岐阜駅前にある岐阜大学サテライト・キャンパス(591 m²)を活用し、受講者・講師の利便性が向上した。医学教育セミナーとワークショップ、多職種連携授業、医療英語授業などに活用している。 (3) 海外の大学にて医療者教育学修士号、教育学博士号を取得した教員各 1 名を採用し、より多角的に医学教育を捉えられるようにし、ワークショップと大学院研究指導の高度化を図った。 (4) 米国で 3 年間の臨床研修を経験し専門医の資格を取得した教員 1 名を採用し、医療英語教育・臨床技能教育・国際交流が充実した。 (5) 看護系教員を採用し、多職種連携医療教育、学習困難学生の支援などが充実した。 (6) 教員の海外短期留学・研修(マギル大学、グラスゴー大学、マーストリヒト大学、香港大学)を促進し、教員指導力の向上、FD の高度化が図られた。 (7) ウェブ会議システムを導入することで研究指導の高度化、各種共同事業の円滑化を図った。 (8) 各種メーリングリストを運営することで、全国の教職員の情報共有・意見交換が促進した。 (9) 学術資料の充実に努めた。特に「日本の医学教育の挑戦」は、各種 FD の経験と国際的な動向を踏まえて医学教育の諸問題解決に関して実践的に示したテキストであり、全国で利用されている。 (10) 多職種連携医療教育法に関しては、拠点事業費によって専任教員を雇用し、5 大学・組織と教育法の共同開発、パイロット授業の実施、ワークショップでの普及活動を推進した。

事務担当責任者	フリガナ	キタノアツコ	所属部署	医学系研究科・医学部
	氏名	北野 敦子	役職名	教育企画係長
	所在地	〒501-1194 岐阜県岐阜市柳戸 1 番 1		
	T E L	058-230-6470	F A X	058-230-6468
E - m a i l	gjme00028@jim.gifu-u.ac.jp			

申請施設におけるこれまでの主な利用実績

(平成23年度)

岐阜大学医学教育開発研究センター

①教員・指導医向け ②職員向け ③学生向け ④模擬患者向け

利用実績の概要	
<p>多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開</p> <p>教材共同開発事業（岐阜大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学、昭和大学、地域医療振興協会）</p> <p>多職種共同PBL（医療と生命）：岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学</p> <p>ワークショップ開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PBLを通して学ぶ職種間連携（第40回医学教育セミナーとワークショップ、岐阜市）①②③ ・臨床現場で学ぶ職種間連携（第40回医学教育セミナーとワークショップ、岐阜市）①③ ・専門職連携教育（第42回医学教育セミナーとワークショップ、千葉市）①③ 	5大学 1組織 参加者 計65名
<p>全国FD「第40回医学教育セミナーとワークショップ、10周年記念式典・シンポジウム」</p> <p style="text-align: right;">（平成23年5月14-15日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記念講演：Harvard Medical School・New Pathway 第1期生として（エリザベス・ミラー、カリフォルニア大学）①③④ ・記念シンポジウム：全国共同利用拠点に求められるもの ①③④ ・WS-1：PBLを通して学ぶ職種間連携 ①③④ ・WS-2：臨床現場で学ぶ職種間連携 ①③ ・WS-3：プログラム評価：PCM手法を用いて ① ・WS-4：地域で学ぶコミュニケーション ①③ 	講師17名 参加者80名 総計97名
<p>全国FD「第41回医学教育セミナーとワークショップ」（平成23年8月5-7日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：SP参加型教育：SP養成法とセッションを見る目を学ぶ欲張りWS ①③ ・WS-2：医学教育専門家養成を目指したパイロットコースワーク 第2弾：学習者の評価 Assessment ① ・WS-3：電子カルテと医学教育 第2弾：臨床実習の充実に向けて ①② ・WS-4：臨床推論を教える・学ぶ ①③ ・WS-5：シミュレーション医学教育WS：みんなで一緒にMake Simyu Simyu！ ～シミュレーション教育プログラムを作ってみよう！ ①② ・セミナー：The Four Sides of Medicine 医学の4つの側面 ～医師と患者の視点からみた日米の医学教育～ （Alan Lefor、自治医科大学教授）①③ 	講師12名 参加者104名 総計116名
<p>全国FD「第42回医学教育セミナーとワークショップ in 千葉」（共催：千葉大学）</p> <p style="text-align: right;">（平成23年11月19-20日、千葉市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：アウトカム基盤型教育プログラムの構築 ①③ ・WS-2：専門職連携教育 ①③ ・WS-3：プロフェッショナルリズム教育 ①③ ・WS-4：学生の心をつかむ準備教育・教養教育 ①② ・WS-5：SP大交流会 ①④ ・WS-6：SP大勉強会：イリノイ大学のSPトレーニングWS報告とフィードバックの実践 ①③④ ・セミナー：医学教育が求める社会学とは何か？ （勝又正直、名古屋市立大学教授）①③④ 	講師30名 参加者155名 総計185名

<p>全国FD「第43回医学教育セミナーとワークショップ」(平成24年1月28-29日、岐阜市)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1: WFMEのグローバルスタンダードを読み解く: 教育質保証を目指して (A)(B)(C) ・WS-2: 地域で社会医学を教える (A) ・WS-3: Multiple mini-interviewによる医学部入試 (A) ・WS-4: 医学教育専門家育成検討委員会: 教育ポートフォリオ評価トライアル&評価者養成 (A) ・セミナー1: Multiple mini-interviewによる医学部入試 (劉 克明、高雄医学大学教授) (A) ・セミナー2: 技術革新時代のe-learningとsimulationを成功させる工夫 (高橋優三、岐阜大学) (A) <p style="text-align: right;">講師 17名 参加者 122名 総計 139名</p>
<p>SD 第12回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成23年6月1-3日、岐阜市) (B)</p> <p>医学教育の動向、PBL/シミュレーション教育、コミュニケーション教育、地域枠学生の教育 学生のメンタルヘルス、班別討議、ロールプレイ、施設・授業見学</p> <p style="text-align: right;">講師 5名 参加者 30名 総計 35名</p>
<p>多大学連携遠隔教育: インターネット・テュートリアル (C)</p> <p>学部教育「医療と生命I」(岐阜大学全学、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学) 「医療と生命III」、「英語で学ぶ生物学」 修士課程「酸素と生命と健康」「生活習慣病」 博士課程「生体ラジカル制御学」「医用分子システム工学持論」「マシーンと人体」</p> <p style="text-align: right;">チューター19名 参加学生 284名</p>
<p>外国人研究者招聘・国際交流</p> <p>劉 克明(客員教授、高雄医学大学教授、台湾)(平成24年1月~2月) セミナー: Multiple-mini-interview (MMI), Taiwan Medical Education Accreditation System Present and future of Taiwan Medical Education (A)</p> <p>Phillip Evans, Kenneth Mullen (Glasgow大学、英国)</p> <p>海外臨床実習6名: 米国(ハーバード大学、UCLA、ハワイ大学)、オーストラリア(モナシュ大学、ニューサウスウェールズ大学)、カナダ(マギル大学)、香港大学</p> <p>海外学生受入1名: タイ(チェンマイ大学)</p>
<p>その他のセミナー・研修・教育</p> <p>初心者向けチューター研修会(岐阜大学医学部教員18名) (A)</p> <p>臨床実習FD(岐阜大学医学部教員21名) (A)</p> <p>学内教育: 医療と生命、癒しの科学論、初年次セミナー、地域体験実習、医師患者関係、選択テュートリアル 臨床実習入門、OSCE/CBT、臨床推論、医療面接実習、Advanced OSCE、小児OSCE、海外臨床実習準備教育 (C)</p>
<p>他大学・組織等からの要請に応じた講師派遣</p> <p>旭川医科大学、福島県立医科大学、東京大学、信州大学医学部、浜松医科大学、愛知医科大学、藤田保健衛生大学、滋賀医科大学、兵庫医科大学、岡山大学、徳島大学大学院、鳥取大学医学部、札幌市立大学看護学部、日本大学歯学部、愛知学院大学歯学部、愛知県立大学看護学部、愛知教育大学、関西医療大学、大阪保健医療大学、神戸学院大学薬学部、九州歯科大学、文部科学省(医学・歯学教育指導者ワークショップ)、厚生労働省(東海北陸厚生局卒後研修プログラム責任者会議)、共用試験実施機構(医科OSCE外部評価者認定講習会)、日本医学教育学会、日本歯科医学教育学会、日本小児科学会、全国歯科衛生士教育協議会、岐阜県医師育成・確保コンソーシアム、静岡県立総合病院</p> <p style="text-align: right;">21大学 9組織 のべ41回</p>

(平成 24 年度)

利用実績の概要
<p>多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開</p> <p>教材共同開発事業（岐阜大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学、昭和大学、地域医療振興協会） 多職種連携パイロット授業（平成24年8月12-13日、岐阜市、参加学生30名、教員12名） 参加校：岐阜大学、名城大学、朝日大学、平成医療短期大学</p> <p>多職種共同PBL（医療と生命）：岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学</p> <p>ワークショップ開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経験学習サイクルを回しながら学ぶ専門職連携ファシリテーションスキル ①③④ （第45回医学教育セミナーとワークショップ、岐阜市） ・多職種連携教育（IPE）－最新の実践報告と交流 ①③④ （第46回医学教育セミナーとワークショップ、岐阜市） <p style="text-align: right;">5大学 1組織 参加者 計47名</p>
<p>全国FD「第44回医学教育セミナーとワークショップ in 福島」（共催：福島県立医科大学） （平成24年5月26-27日、福島市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：災害から学ぶ実践的医療教育 ①③④⑤ ・WS-2：厳しい現実に向き合うこころのケアと医療面接 ①③④⑤ ・WS-3：地域枠入学者と地域医療教育のプランニング ①③④⑤ ・特別セミナー：震災後の社会が医療者に求めていること ①③④⑤ （赤坂憲雄、学習院大学教授・東日本大震災復興会議委員） ・見学体験セミナー：シミュレーション教育の授業活用：バーチャル医学生@福島県立医科大学スキルラボ ① <p style="text-align: right;">講師25名 参加者108名 総計133名</p>
<p>全国FD「第45回医学教育セミナーとワークショップ」（平成24年8月17-19日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：経験学習サイクルを回しながら学ぶ専門職連携ファシリテーションスキル ①③④ ・WS-2：思考の可視化（マッピング）を医学教育でどう活かす？ ①③④ ・WS-3：歯科領域における情報提供、行動変容の援助をめぐる医療コミュニケーション教育 ①③④⑤ ・WS-4：質的研究の手法を用いた医学教育研究・臨床研究 ① ・WS-5：新たに医学教育に携わることになった方のための、楽しい医学教育ベーシック ① ・WS-6：役立つ医療・医学英語を身に付けるには？ ①③④ ・WS-7：Advanced OSCE 再考 ①③④ ・セミナー1：医学教育研究・臨床研究における質的研究の概論（大谷 尚、名古屋大学教授）① ・セミナー2：「もはやヒポクラテスではいられない」時代の医師像・医療者像（尾藤誠司、東京医療センター） ①③④⑤ <p style="text-align: right;">講師28名 参加者124名 総計152名</p>
<p>全国FD「第46回医学教育セミナーとワークショップ」（平成24年10月26-28日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：多職種連携教育（IPE）－最新の実践報告と交流 ①③④ ・WS-2：インストラクショナル・システムズ・デザイン（ISD）による授業・実習改善ワークショップ ① ・WS-3：医学教育研究、はじめの一步－リサーチクエスションを立ててみよう ① ・WS-4：SP養成（初級編）－SP養成者のためのワークショップ ①③④⑤ ・セミナー：教育設計の原理－医学教育への実践的応用（鈴木克明、熊本大学教授）① <p style="text-align: right;">講師15名 参加者56名 総計71名</p>
<p>全国FD「第47回医学教育セミナーとワークショップ in 沖縄」（共催：琉球大学） （平成25年1月25-27日、那覇市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレカンファレンス：Symposium on WFME Global Standard: Perspectives from East Asian experiences – Adaptation, Reformation or Quality improvement? ①③④⑤ ・WS-1：SP大交流勉強会 ①④⑤ ・WS-2：地域医療教育プログラム開発 ①③④ ・WS-3：臨床倫理ワークショップ ①

<ul style="list-style-type: none"> ・WS-4：研修医のメンタリングとサポート (A)B ・WS-5：SPSSを用いた教育研究の統計学～中級編～ (A) ・セミナー：Understanding how we learn－Implications for Educators (Farhan Bhanji、マギル大学准教授) (A)B(C)D ・おきなわクリニカルシミュレーションセンター見学ツアー (A)B(C)D <p style="text-align: right;">講師 29 名 参加者 166 名 総計 195 名</p>
<p>S D 第13回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修 (平成24年6月6-8日、岐阜市) (B)</p> <p>医学教育の動向、カリキュラムとPBLの基本、コミュニケーション教育、地域枠学生の教育 学生のメンタルヘルス、班別討議、ロールプレイ、施設・授業見学</p> <p style="text-align: right;">講師 6 名 参加者 38 名 総計 44 名</p>
<p>多大学連携遠隔教育：インターネット・テュートリアル (C)</p> <p>学部教育「医療と生命：坂の上小学校1年2組同窓会」(岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学 新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学医療学部)</p> <p>修士課程「酸素と生命と健康」「生活習慣病」</p> <p>博士課程「生体ラジカル制御学」「医用工学概論」</p> <p style="text-align: right;">テューター20名 参加学生 189名</p>
<p>外国人研究者招聘・国際交流</p> <p>Farhan Bhanji (客員教授、マギル大学、カナダ) (平成25年1~2月)</p> <p>第47回医学教育セミナーとワークショップ、京都大学、名古屋大学、国立育成医療研究センター、 岐阜市民病院などで講演</p> <p>Ducksum Ahn (高麗大学、韓国)</p> <p>Phillip Evans (グラスゴー大学、英国)</p> <p>Mitchell Feldman (UCSF、米国)</p> <p>海外臨床実習9名：米国 (UCLA、ミシガン大学、メイヨークリニック、デューク大学、ハワイ大学)、カナダ (マギル大学、トロント大学)、オーストラリア (ニューサウスウェールズ大学)、ニュージーランド (オークランド大学)、韓国 (延生大学)</p> <p>海外学生受入2名：タイ (チェンマイ大学)</p> <p>ベトナムにおける臨床指導者養成講習会 (JICA)</p>
<p>その他のセミナー・研修・教育</p> <p>初心者向けテューター研修会 (岐阜大学医学部教員 31 名) (A)</p> <p>臨床実習FD (岐阜大学医学部教員 25 名) (A)</p> <p>Mentorship in Medicine (Mitchell Feldman) (A)C</p> <p>学内教育：医療と生命、癒やしの科学論、初年次セミナー、地域体験実習、医師患者関係、選択テュートリアル 臨床実習入門、OSCE/CBT、臨床推論、医療面接実習、Advanced OSCE、小児OSCE、海外臨床実習準備 教育 (C)</p>
<p>他大学・組織等からの要請に応じた講師派遣</p> <p>滋賀医科大学、愛知医科大学、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部、名城大学薬学部、愛知県立大学看護学部、愛知学院大学大学院歯学研究科、大阪大谷大学薬学部、神戸学院大学薬学部、関西医療大学、岡山大学歯学部、九州歯科大学、日本医学教育学会、日本歯科医学教育学会、日本小児科学会、JICA、全国歯科衛生士教育協議会、宮城県石巻市社会福祉法人石巻祥心会かもめ学園、九州地区医療コミュニケーション教育ワークショップ、岐阜県医師育成・確保コンソーシアム、東海SP勉強会・交流会、アスペルデの会東三河支部</p> <p style="text-align: right;">11 大学 10 組織 のべ 30 回</p>

(平成 25 年度)

利用実績の概要			
<p>多職種連携医療教育法の開発とFDの全国展開</p> <p>教材共同開発事業（岐阜大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学、昭和大学、地域医療振興協会） 多職種連携パイロット授業（平成 25 年 8 月 12-13 日、岐阜市、参加学生 40 名、教員 15 名） 参加校：岐阜大学、名城大学、平成医療短期大学、愛知学院大学、岐阜県立衛生専門学校、 大垣女子短期大学</p> <p>多職種共同 PBL（医療と生命）：岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学、新潟大学歯学部、東邦大学医学部、 藤田保健衛生大学</p> <p>ワークショップ・シンポジウム開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多職種連携医療教育の“一粒で二度美味しい”シナリオづくり ① （第 49 回医学教育セミナーとワークショップ、岐阜市） ・境界と壁を超える：職種間連携の実践と社会学的考察（第 50 回記念医学教育セミナーとワークショップ、 岐阜市）① 			
			5 大学 1 組織 参加者 計 90 名
<p>全国FD「第48回医学教育セミナーとワークショップ in 京都大学」（共催：京都大学） （平成 25 年 6 月 8-9 日、京都市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：質的研究の手法を用いた医学教育研究・臨床研究 ① ・WS-2：医療プロフェッショナルリズム教育：理論・原則と実践 ①③ ・WS-3：患者の語り（ナラティブ）で医学教育が変わる ①③④ ・WS-4：マイクロティーチング～教員・指導医FD及びOSTEへの活用 ①③ ・WS-5：戦略としてのSDL（自己主導型学習）-入門編 ①③ ・WS-6：アクションリサーチを計画する ①③ ・セミナー：「三項関係ナラティブ支援モデル」による医師と患者の教育（やまだようこ、立命館大学教授） ①③④ 			
			講師 28 名 参加者 140 名 総計 168 名
<p>全国FD「第49回医学教育セミナーとワークショップ」（平成 25 年 8 月 9-10 日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：医学／医療者教育をネタに研究する！-先行研究をあたって理論的枠組みを構築する ① ・WS-2：卒前の医学教育に携わる方のための、楽しい医学教育ベーシック ① ・WS-3：多職種連携医療教育の“一粒で二度美味しい”シナリオづくり ① ・セミナー：協働するナラティブ：コミュニケーションとナラティブは何か違うか？ ①④ 			
			講師 10 名 参加者 77 名 総計 87 名
<p>・第 5 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会「ヘルスコミュニケーション教育の現状と未来」 ①④</p>			
			講師 10 名 参加者 128 名 総計 138 名
<p>全国FD「第50回記念医学教育セミナーとワークショップ」（平成 25 年 11 月 1-3 日、岐阜市）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Lecture：終着駅のない旅：現場での指導者育成とコミュニティの形成 ① ・Symposium：境界と壁を超える：職種間連携の実践と社会学的考察 ① ・Round Table：発信する医療教育：部門発展、研究推進、キャリア開発 ①③④ ・WS-1：情動をはぐくむ教育：理論から教育実践とその評価まで ① ・WS-2：医療教育研究のスタートを洗練する ① ・WS-3：魅力あるワークショップの構築とその評価 ① ・WS-4：医学教育を科学する ① ・WS-5：対応が困難な学習者／個性的な学習者と共に学ぶ ①③ ・WS-6：Moodle を学ぼう ① ・WS-7：すぐに身に付くフレキシブルな指導方法をマスターしよう ① ・WS-8：会話を分析する：談話分析法 ①③④ ・WS-9：職場での研修生のケアとメンタリング ①③ ・WS-10：聴衆反応システムを用いて授業をもっと双方向性にする ① 			
			講師 44 名 参加者 105 名 総計 149 名

<p>全国FD「第51回医学教育セミナーとワークショップ in 医科歯科」 (共催：東京医科歯科大学) (平成26年1月25-26日、東京)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-1：老年医学のシミュレーション教育 ① ・WS-2：SP大交流勉強会 in 東京 ①②③④ ・WS-3：臨床実習の現場における医学生の評価を考える ① ・WS-4：歯学部：臨床実習終了時の技能・態度評価 ① ・WS-5：卒後臨床研修における事務職員の役割 ② ・WS-6：国際基準に基づく医学教育質保証 ①② ・セミナー：South Korean Experience of BME Accreditation ①② <p style="text-align: right;">講師 30名 参加者 137名 総計 167名</p>
<p>S D 第14回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修 (平成25年5月8-10日、岐阜市) ②</p> <p>医学教育の基本、カリキュラムの基本、国際認証制度と今後の課題、今どきの学生気質、学生への対応 班別討議、ロールプレイ、施設・授業見学</p> <p style="text-align: right;">講師 6名 参加者 41名 総計 47名</p>
<p>多大学連携遠隔教育：インターネット・テュートリアル ③</p> <p>学部教育「医療と生命：坂の上小学校1年2組同窓会」(岐阜大学医学部・看護学科、岐阜薬科大学 新潟大学歯学部、東邦大学医学部、藤田保健衛生大学医療学部 修士課程「酸素と生命と健康」「生活習慣病」 博士課程「生体ラジカル制御学」「医用分子システム工学持論」「マシンと人体」</p> <p style="text-align: right;">チューター20名 参加者 156名 総計 176名</p>
<p>外国人研究者招聘・国際交流</p> <p>Yvonne Steinert (マギル大学、カナダ) Susan Bridges (香港大学) Phillip Evans (グラスゴー大学、英国) Katharine Boursicot (セントジョージ大学、英国)</p> <p>海外臨床実習11名：米国 (UCLA、ピッツバーグ大学、ハワイ大学)、オーストラリア (シドニー大学、フリンダース大学、モナシュ大学)、英国 (NHS、Royal Cornwall 病院)、ニュージーランド (オークランド大学)、フランス、タイ</p> <p>海外学生受入2名：タイ (チェンマイ大学) ベトナムにおける臨床指導者養成講習会 (JICA)</p>
<p>その他のセミナー・研修・教育</p> <p>岐阜大学再生医科学研究科FD ①</p> <p>初心者向けチューター研修会 (岐阜大学医学部教員 20名) ①</p> <p>臨床実習FD (岐阜大学医学部教員 80名) ①</p> <p>臨床実習における学生評価 (Katharine Boursicot) ①</p> <p>学内教育：医療と生命、癒やしの科学論、初年次セミナー、地域体験実習、医師患者関係、選択テュートリアル 臨床実習入門、OSCE/CBT、臨床推論、医療面接実習、Advanced OSCE、小児OSCE、海外臨床実習準備教育 ③</p>
<p>他大学・組織等からの要請に応じた講師派遣</p> <p>秋田大学、愛知医科大学、滋賀医科大学、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部、九州大学、東京薬科大学薬学部、名城大学薬学部、愛知学院大学大学院歯学研究科、岐阜医療科学大学、神戸学院大学薬学部、松山大学薬学部、九州歯科大学、日本医学教育学会、日本歯科医学教育学会、日本小児科学会、全国歯科衛生士教育協議会、JICA、宮城県石巻市社会福祉法人石巻祥心会かもめ学園、岐阜県医師育成・確保コンソーシアム、東海SP勉強会・交流会、静岡県立総合病院</p> <p style="text-align: right;">12大学 9組織 のべ28回</p>

共同利用に供する施設、設備及び資料等の状況

(平成23年度～平成25年度)

岐阜大学医学教育開発研究センター

施設、設備及び資料等名	概 要
医学教育開発研究センター	事務室 79 m ² 教員研究室 120 m ² 客員教授室 23 m ² 共同研究室 79 m ² ミーティング室 45 m ² 国際交流室 75 m ² 合計 421 m ²
スキルスラボ	第1実習室 121 m ² 第2実習室 23 m ² 第3実習室 23 m ² 合計 167 m ²
医学教育開発研究センター設備	<ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページ・教育用サーバー：FD情報の提供、FD受付サイト、問題基盤型学習、シミュレーション動画、e-ラーニング、e-ポートフォリオなどに活用している。 ・ ウェブ会議システム：ウェブを介して多地点と会議・カンファレンスなどを開催できる。資料提示も可能である。遠隔地の教員に対するメンタリング等に利用可能である。 ・ スキルスラボ、医師育成推進センターに多種類のシミュレータを設置している。 ・ フォーカスグループ収録システム、ワークショップ用設備（パソコン、プロジェクター、プリンターなど多数）、授業収録システム、大型印刷機
学術資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術雑誌：Academic Medicine（全米医学教育学会機関誌）、Medical Education（英国医学教育学会機関誌）、Medical Teacher（欧州医学教育学会機関誌）、医学教育（日本医学教育学会機関誌） ・ 全国FD（医学教育セミナーとワークショップ）記録集（第1回～50回） ・ 医学教育関係書籍：医学教育の理論と実践、日本医学教育の挑戦、DVD-book（医療面接実習、PBL-テュトリアル、医療英語など）、模擬患者シナリオ集 ・ データベース：シミュレーション動画、テュトリアル教育シナリオ、医学教育用語集



26文科高第378号
平成26年7月31日

岐阜大学
学長 森脇 久隆 殿

文部科学大臣 下村 博文



教育関係共同利用拠点の認定について（通知）

学校教育法施行規則第143条の2の規定に基づき、貴学の「医学教育開発研究センター」を、下記により「教育関係共同利用拠点」に認定します。

なお、教育関係共同利用拠点審査委員会等における審査において、下記3のとおり意見がありましたので、今後の拠点活動の際に留意してください。

記

1. 教育関係共同利用拠点名

「医学教育共同利用拠点（医学教育開発研究センター）」

2. 認定の有効期間

平成27年4月1日 ～ 平成32年3月31日

3. 特記事項

医学教育におけるワークショップ等のFDの取組と、フェロースhip・プログラムによる高度なレベルのリーダー育成が期待でき、評価できる。

教育関係共同利用拠点としての活動を行うにあたっては、以下の点に留意されたい。

- (1) 医学教育支援の拠点ならではの他大学との連携や、連携先の支援をより意識した取組を展開すること。
- (2) 取組のプロセスや成果のチェック等の役割を含め、職員の育成にも努めること。
- (3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるよう努めること。

以上

【教育関係共同利用拠点 平成27年度実施状況報告書】

1. 拠点の概要

(1) 目的・概要等

大学名	岐阜大学	学長名	森脇 久隆
拠点代表者名	藤崎 和彦		
拠点の名称	医学教育共同利用拠点		
共同利用分野	医学教育		
目的・概要	<p>医学教育の新しい流れを全国で共有し、急速な進歩を遂げる日本の医療を支える医学教育システムを構築することと、個々の教員・指導医の教育スキルを高めることを主な目的としている。</p> <p>テューリアル部門とバーチャル部門があり、常勤教員7名(教授3名、准教授1名、助教3名)と事務職員、教務補佐員が一致協力して運営にあたっている。拠点予算により助教1名(任期つき)、教務補佐員1名、事務補佐員1名を採用し、フェローシップの構築に向け取り組んでいる。</p>		

(2) 当該年度における実施計画

<p>全国規模のFDの高度化を図りつつ、継続的に医療指導者の能力開発を支援する体系的な「医療者教育フェローシップ・プログラム」を構築し、全国の医学部・医療系教育機関と連携してリーダーを育成してゆけるシステムを検証し、教育の改善に資する。</p> <p>1) 医学教育セミナーとワークショップの開催(4回)</p> <p>2) 教務事務職員研修の開催</p> <p>3) 多職種連携医療教育プログラムの深化、発展、普及</p> <p>4) 医学教育専門家制度の構築</p> <p>5) 医学教育ユニットとの連携</p> <p>6) 全国の医療教育機関FDへの貢献</p> <p>7) コミュニケーション教育法の開発・普及</p> <p>8) e-ラーニング・問題基盤型教育法の開発・普及</p> <p>9) 国際交流(客員教授招聘、共同研究、国内での指導)</p> <p>10) 社会人大学院の受け入れと研究指導</p> <p>11) 医療者教育フェローシップ・プログラムの構築</p>
--

(3) 当該年度の達成状況

<p>1) 医学教育セミナーとワークショップ</p> <p>第56回～59回の医学教育セミナーとワークショップを開催した(4回の延べ参加人数481名)。講習プログラムの多様化、公募による講師陣の充実、国際化(英語によるワークショップ)を図った。医学教育セミナーとワークショップの報告書は「新しい医学教育の流れ」として参加者と全国の医学・医療教育機関に配布し、一般からも入手できるようになっている。</p> <p>2) 教務事務職員研修(国立大学医学部長会議常置委員会・一般社団法人全国医学部長病院長会議主催)</p> <p>第16回国公私立大学医学部・歯学部教務事務職員研修を開催した(受講者数50名)。教育事務職員の能力向上を目的として毎年2泊3日のプログラムで開催している。講習会後もメーリングリストによる定期的な情報提供・情報交換を行った。</p> <p>3) 多職種連携医療教育プログラムの構築</p> <p>初年次における医学・看護学生共同の模擬カンファレンス授業を本格実施し、学習成果を分析した。また地域医療・保健・介護に関わる多職種連携教育プログラムを実施し、その成果を分析した。平成医療短期大学看護学科、リハビリテーション学科(理学療法専攻、作業療法専攻、視機能療法専攻)の4学科と共同カリキュラムとして、4年次学生に対して多職種の医療系学生による合同ケースカンファレンスを実施し、それぞれの学生の学習成果、課題などを分析した。多職種連携医療教育に使用できる動画教材を作成した。また、第59回のセミナーとワークショップにおいて、多職種連携医療教育で利用できる、カリキュラムの中の効果的な映像教材の活用方法と、手軽に動画教材を作成できる方法の一例を紹介した。</p>
--

4) 医学教育専門家制度の構築

日本医学教育学会と連携して、医学教育の専門家育成に関する教育プログラム、評価プログラムの構築を行った。平成26年度から正式制度が開始され、講習コースにおける指導、ポートフォリオの評価に貢献した。

5) 医学教育ユニットとの連携

医学教育専門部局の教員間の情報・経験交流を目的とした「医学教育ユニットの会」を結成し、全国大学の医学教育センター・臨床研修センター等との連絡組織のメーリングリストを作成して、当センターが基幹校として情報共有、意見交換を行っている。27年度も特に国際認証、臨床教育、海外実習などの具体的な有益な情報が共有された。年度末の登録ユニット数は75大学159機関となっている。

6) 全国の医療教育機関FDへの貢献

全国の医学・医療系教育機関、医療系学会・研究会、地域医療組織などの求めに応じて各種研修の企画・指導を行った。

7) コミュニケーション教育法の開発・普及

全国の模擬患者団体を対象とした講習会を実施し、より適切・高度なコミュニケーション教育、学生評価、電子ポートフォリオの開発を行った。

8) e-ラーニング・問題基盤型教育法の開発・普及

問題基盤型教育の長期的な学習効果に関する検証を行い、その有用性が証明された。

9) 国際交流

ライプツィヒ大学から医学教育の専門家を客員教授として招聘し、国内の医学教育者を対象としたセミナー、ワークショップを開催し、共同研究を行った。

10) 社会人大学院の受け入れと研究指導

社会人大学院生9名、研究生1名に対して、医学教育学の教育と研究指導を行い、10月には本分野創立以来初の修了者を1名輩出した。平成28年度には2名の社会人大学院生が加わり、社会人大学生10名が在籍する予定である。

11) 医療者教育フェローシップ・プログラムの構築

体系的FDを構築するために、ウェブサイト構築と教材開発を行い、パイロット研修としてMEDCフェローシップ/モジュール1、モジュール2を開催した。モジュール1には22名、モジュール2には23名の参加者があった。医療教育者のキャリア支援のために、試験的なメンタリングを実施した。第57回、第59回のセミナーとワークショップにおいて、研究支援のトライアルワークショップを開催した。

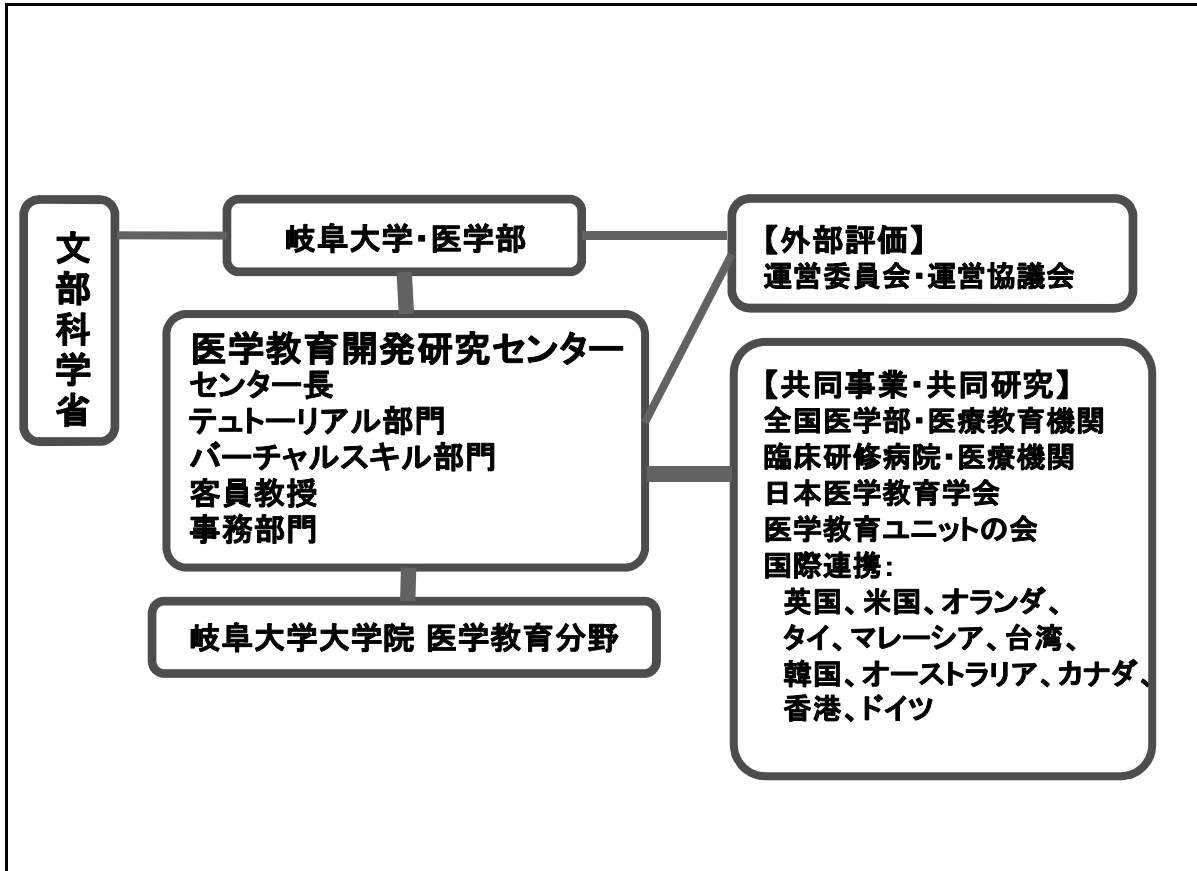
また、アソシエイト認定のため、過去のセミナーとワークショップまで遡り、単位付与するシステムを構築した。

2. 組織等

(1) 当該拠点を記載している学則等
(別紙として添付してください。)

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター規程 [別紙 1]

(2) 組織図



(3) 人員(平成28年3月31日時点)

教授	准教授	講師	助教	助手	小計	技術職員	事務職員	合計
2	1		3		6		1	7
(1)					(1)	(1)	(3)	(6)

(注) 上段には専任の教職員数を記入し、下段には兼任教員や非常勤教職員等の人数を、()書きで外数で記入してください。

(4) その他人員(平成28年3月31日時点)

日本人客員教授1名

(注) (3) 記入の職名以外の専任の教職員がいる場合には、その職名及び人数を記入してください。

3-1. 共同利用実施のための運営体制

- (1) 審議する委員会等に関する規則等
(別紙として添付してください。)

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会細則 [別紙 2]
岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会細則 [別紙 3]

- (2) 審議する委員会等の所属者名等

委員会名【医学教育開発研究センター運営協議会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
清島 満	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	病態情報解析医学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
原 明	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	腫瘍病理学
水田 啓介	岐阜大学	医師育成推進センター長	耳鼻咽喉科学
村上 啓雄	岐阜大学	地域医療医学センター専任の教授	地域医療、内科学、感染症
奈良 信雄	東京医科歯科大学特命教授 順天堂大学医学部特任教授	学外の学識経験者	医学教育
平形 道人	慶應義塾大学教授	学外の学識経験者	医学教育
小西 靖彦	京都大学教授	学外の学識経験者	医学教育
羽野 卓三	和歌山県立医科大学教授	学外の学識経験者	医学教育
大滝 純司	北海道大学教授	学外の学識経験者	医学教育
泉 美貴	東京医科大学教授	学外の学識経験者	医学教育

委員会名【医学教育開発研究センター運営委員会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
清島 満	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	病態情報解析医学
奥村 太志	岐阜大学	医学部看護学科長	看護学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
(鈴木 康之)	岐阜大学	医学教育企画評価室長	
紀ノ定 保臣	岐阜大学	医療情報部長	医療情報学
千田 隆夫	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	解剖学
塩入 俊樹	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	精神病理学
藤田 守	岐阜大学	医学系研究科・医学部事務長	

(注)教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程(平成21年8月20日文科科学省告示第155号)第2条第3項に基づく委員会は必ず記入ください。

- (3) 大学(法人)全体として共同利用を推進するための取組

共同利用専用スペース(75㎡)の提供、「医学教育セミナーとワークショップ」「教務事務職員研修」などの開催に要する会場の無償提供、学外会場・講師等の経費負担、非常勤事務職員2名の雇用、各種企画の運営に対する人員の協力、学内における政策的経費の配分

3-2. 共同利用の状況

(1) 共同利用の概要

課題名	概要
1 第56回医学教育セミナーとワークショップ in 埼玉医大 (埼玉医科大学と共催)	<ul style="list-style-type: none"> ・WS-1: 量的データを用いた医学教育研究のための統計解析(初級編) ・WS-2: デブリーフィングで振り返るシナリオベーストレーニング ・WS-3: 社会医学的視点を取り入れた地域志向型早期体験実習を企画しよう! ・WS-4: SP交流会 ・WS-5: 自分目線・相手目線・第三者目線の違いがわかるポジションチェンジ実習 ・WS-6: 1歩先をいくサマリーの書き方・教え方 ・WS-7: 現場で看護を育む -1分間指導法Get! - ・セミナー: 埼玉医科大学医学部の教員組織の改革-医局講座制・教育業績評価はいかに変わったか-
2 第16回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修	<p>(国立大学医学部長会議常置委員会・一般社団法人全国医学部長病院長会議主催)</p> <p>国公立大学医学部・歯学部の教務事務職員を対象とした医学教育の基本に関する研修</p> <p>2泊3日のプログラムで当センターが継続して企画運営している</p>
3 第57回医学教育セミナーとワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・WS-1 「アクティブラーニング:やる気・関わり・深い学び」 ・WS-2 「臨床研修事務WS」 ・WS-3 「シナリオベースで学ぶ多職種連携教育ファシリテーション」 ・WS-4 「研究手法としてのインタビューをより効果的にするために」 ・WS-5 「歯科医療面接をどのように段階的に学ぶべきか? -医療コミュニケーション、診断推論そして行動変容」 ・WS-6 「未来の医師を現在どう育てるか?変化への適応能力は万全か」 ・WS-7 「卒業時OSCE実施の実際とパフォーマンス充実のための工夫 -日本の国情に合った理想的OSCE実施のポイントと各科医学教育の質保証-」 ・WS-8 「医学部で「性的マイノリティ・LGBT」をどう教えるか」 ・WS-9 「医療におけるジェンダーとコミュニケーション」 ・セミナー 「医療コミュニケーション研究の現状」
4 第58回医学教育セミナーとワークショップ in 香川大学 (香川大学と共催)	<ul style="list-style-type: none"> ・WS-1 「心身医学教育の実践」 ・WS-2 「学生・若手医師のキャリアデザイン ~系統的キャリア形成支援」 ・WS-3 「Work-Based Assessment: 臨床実習から専攻医指導まで」 ・WS-4 「模擬患者大交流勉強会」 ・WS-5 「臨床指導者のモチベーションをどう維持するか?」 ・WS-6 「医療者教育における反転授業ことはじめ」 ・WS-7 「社会科学・行動科学のPBLチュートリアルのための臨床症例のシナリオ教材の作成」 ・セミナー 「Peer-Assisted Teaching - A tool to be considered at Japanese medical schools? -」
5 第59回医学教育セミナーとワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・WS-1 「ザ・プロフェッショナル:熟達化とその評価」 ・WS-2 「臨床コンテキストで行動科学を学習するためのPBL教材を作成する」 ・WS-3 「第11回 医学教育研究技法ワークショップ 医療者教育の研究を立案してみよう」 ・WS-4 「歯科医療面接のキャップストーン、マイルストーンを作ろう」 ・WS-5 「簡単にできちゃう! eラーニング教材」 ・WS-6 「IPE theater ~IPEの映像教材作りのステップ~」 ・セミナー 「医学教育における医療人類学-ヘルスサイエンスとしての視点と方法」

(注)「練習船」「演習林」「農場」「臨海・臨湖実験所及び水産実験所」の各拠点の場合には、当該拠点施設における実習を授業科目(一部分として実施するものを含む)として実施し単位認定を伴う授業科目には、その概要を簡明に記入するとともに教育課程上の実習利用状況(共同利用大学数・利用学生数)を記入してください。

(2) 共同利用状況

区分	平成27年度			備考
	所属機関数	利用人数	延べ人数	
学内(法人内)	11	1,671	1,671	
国立大学	49	106	140	
公立大学	21	46	60	
私立大学	74	161	148	
大学共同利用機関法人				
民間・独立行政法人等	102	496	846	
外国の研究機関	3	3	3	
(うち大学院生)	(9)	(9)	(26)	
計	260	2,483	2,868	

(注) 1. 当該年度の共同利用拠点利用者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

2. 「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

3. 「練習船」の場合には、「備考」の欄に「年間運航可能日数」「年間運航日数(実績)」「共同利用日数(実績)」を記入してください。

(3) その他、共同利用拠点として、特色ある取組等

1) 医学生の海外実習推進: 医学生の海外臨床実習を促進する目的で、当センターでは海外臨床実習準備のための課外授業・指導を推進している。平成27年度は13名の岐阜大学医学部6年生が1～2か月の海外クラークシップを経験した。また英語OSCEの分析を行った。

2) 専門医育成への貢献: 日本小児科学会と連携して、指導育成プログラムを構築し、指導医育成の研究を行った。また、実際に教員を海外の先進大学に派遣して視察・研修を行い、大きな成果を得た。

3) 医学教育専門家制度の構築: 日本医学教育学会と連携して、医学教育専門家認定制度を開始した。

4) 発達障害・コミュニケーション障害をもつ学生・医療者に関する研究: 医療人育成にとって大きな問題であり、事例調査研究と指導法に関するワークショップを行った。

3-3. 共同利用に係る支援状況

(1) 共同利用する大学への支援の状況

埼玉医科大学(第56回医学教育セミナーとワークショップ)、香川大学(第58回医学教育セミナーとワークショップ)と共催することにより、共催大学とその周辺地域の教職員研修を促進するとともに、研修のノウハウを広げ、今後各地で独自に研修が実施できるよう支援した。研修に係る費用は当センターの運営経費と文部科学省からの運営費交付金で賄った。

(2) 共同利用する大学の利便性の向上等を目的とした取組

医学教育セミナーとワークショップへの参加利便性を向上させるために、埼玉医科大学と香川大学で共同開催した。岐阜大学サテライトキャンパスを活用し、参加利便性を向上させた。当センターホームページをアップデートし、情報提供を向上させた。

(3) その他、共同利用に係る支援のための特色ある取組

コンソーシアム連携病院と共同して、海外FDをカナダMcGill大学で行った。

3-4. 情報提供・情報発信等

(1) 共同利用に関する情報(利用方法・利用状況等)の提供

時期等	概要
逐次	<p>ホームページ:医学教育セミナーとワークショップ、インターネット・テュートリアル、医療コミュニケーション教育、客員教授、医学教育ユニットの会、医学教育用語解説(ビタミンE-メール、ながら情報)、スキルスラボ、シミュレーション学習教材などの情報提供を行っている。</p> <p>メーリングリスト:医学教育セミナーとワークショップ参加者向け、教務事務職員向け、医学教育ユニット教員向けに各種メーリングリストを構築し、医学教育に関する最新情報、各種研修会や共同プロジェクトに関する情報提供、参加者間の情報交換・意見交換を行っている。</p>

(注)当該年度の当該拠点における共同利用に関する利用方法や利用状況等の情報提供の状況を簡明かつ具体的に記入してください

(2) 拠点に関する情報発信(公開講座、公開講演会等含む)

新しい医学教育の流れ(4冊)を季刊の雑誌化して刊行した
センター年報(2014)
第16回教務事務職員研修報告書
海外FD(マギル大学における臨床指導研修)報告書
海外FD(マギル大学における臨床指導研修)報告書【英語版】
ホームページの更新
メーリングリストにて各種情報提供、情報交換、意見交換

(3) 国際的な対応に向けた取組

医学教育先進国および近隣諸国から最新の医学教育を取り入れ、国際交流を図り、日本から情報発信することを目的としてドイツ・ライプツィヒ大学より外国人客員教授を招聘した。
岐阜大学、コンソーシアム関連病院から14名の教員をカナダ・マギル大学へ派遣し、実地にて指導法を視察し、講習を通じて理解とスキルの向上を図り、学生臨床実習と研修医教育の改善、国際化を図ることができた。
海外臨床実習プログラム参加希望の学生に対し、実践的な医療英語をトレーニングする参加型ワークショップを開催した。

5. 拠点認定時の特記事項への対応状況

○特記事項

- (1) 医学教育支援の拠点ならではの他大学との連携や、連携先の支援をより意識した取り組みを展開すること。
(2) 取組のプロセスや成果のチェックなどの役割を含め、職員の育成にも努めること。
(3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるように努めること。

○特記事項への対応状況

- (1) ・年4回の「医学教育セミナーとワークショップ」のうち他大学との共催を2回実施している。
・他大学等への研修指導に関する指導を本年度は述べ38回行った。
・医学教育・臨床研修専門部局の教員間の情報・経験交流を目的とした「医学教育ユニットの会」の基幹校として運営を行っている。平成27年度末現在で75大学159機関の登録がある。
・岐阜大学のみならず、本年度はコンソシアム関連病院の教員をカナダ・マギル大学へ派遣し、学生臨床実習と研修医教育の改善及び国際化を図った。
- (2) ・新人研修の要素もある「国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修」を年1回実施しており、「医学教育の基本」を毎年教授することにより事務職員の基本的知識の底上げをサポートしている。昨年度の事後アンケートの要望を考慮し、外部講師による「優れた大学職員となるために」「分野別認証トライアルを経験して」の2つの講義を開講し、本学職員にも公開した。事前課題の提出により各大学の課題を把握し、グループ別討議の題材としている。また、本年度から事前アンケートにより、研修に対する要望の把握に努めるとともに、研修参加者の目的意識を明確にし、より確実な成果が得られるよう導いた。
・「医学教育セミナーとワークショップ」では、共催校事務職員ともTV会議などを通じて事前打ち合わせをし、綿密な連携のもと、共にワークショップの運営に携わることにより事務職員のネットワークを構築するとともに、育成にも寄与している。
- (3) ・認定時、運営協議会の構成員比は自大学10名：他大学5名であったが、平成27年度より自大学9名：他大学6名（女性含む）とし、自大学以外の委員の割合を高めた。

6. その他

○当該拠点施設に係る決算関係資料【別紙4】

(27年度の施設運営に関する経費の概要が分かる資料(既存のもので可)を別紙として添付してください。なお、利用にあたって費用徴収を行った場合、利用料金がわかる資料を併せて添付してください。)

※ 事務担当者

役職名	医学系研究科・医学部 教育企画係長
氏名	北野 敦子
TEL	058-230-6470
E-mail	gjme00028@iim.gifu-u.ac.jp

【教育関係共同利用拠点 平成28年度実施状況報告書】

1. 拠点の概要

(1) 目的・概要等

大学名	岐阜大学	学長名	森脇 久隆
拠点代表者名	藤崎和彦		
拠点の名称	医学教育共同利用拠点		
共同利用分野	医学教育		
目的・概要	<p>当センターは、医学教育の新しい流れを全国で共有し、急速な進歩を遂げる日本の医療を支える医学教育システムを構築することと、個々の教員・指導医の教育スキルを高めることを主な目的としている。</p> <p>テューリアル部門とバーチャル部門があり、常勤教員7名(教授3名、准教授1名、併任講師2名、助教1名)と事務職員、教務補佐員が一致協力して運営にあたっている。拠点予算により教務補佐員1名、事務補佐員2名を採用し、フェローシップの構築に向け取り組んでいる。</p>		

(2) 当該年度における実施計画

<p>全国規模のFDの高度化を図りつつ、継続的に医療指導者の能力開発を支援する体系的な「医療者教育フェローシップ・プログラム」を構築し、全国の医学部・医療系教育機関と連携してリーダーを育成してゆけるシステムを検証し、教育の改善に資する。</p> <p>1) 医学教育セミナーとワークショップの開催(4回)</p> <p>2) 教務事務職員研修の開催</p> <p>3) 医療者教育フェローシップ・プログラムの構築</p> <p>4) 医学教育専門家制度の構築</p> <p>5) 医学教育ユニットとの連携</p> <p>6) 全国の医療教育機関FDへの貢献</p> <p>7) コミュニケーション教育法の開発・普及</p> <p>8) e-ラーニング・問題基盤型教育法の開発・普及</p> <p>9) 国際交流(客員教授招聘、共同研究、国内での指導)</p> <p>10) 社会人大学院の受け入れと研究指導</p> <p>11) 多職種連携医療教育プログラムの深化、発展、普及</p>
--

(3) 当該年度の達成状況

<p>1) 医学教育セミナーとワークショップ</p> <p>第60回～63回の医学教育セミナーとワークショップを開催した(4回の延べ参加人数747名)。講習プログラムの多様化、公募による講師陣の充実、国際化(英語によるワークショップ)を図った。医学教育セミナーとワークショップの報告書「新しい医学教育の流れ」は季刊の雑誌として発行しており、参加者と全国の医学・医療教育機関に配布し、一般からも入手できるようになっている。</p> <p>2) 教務事務職員研修(国立大学医学部長会議常置委員会・一般社団法人全国医学部長病院長会議主催)</p> <p>第17回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修を開催した(受講者数40名)。教務事務職員の能力向上を目的として毎年2泊3日のプログラムで開催している。講習会後もメーリングリストによる定期的な情報提供・情報交換を行った。</p> <p>3) 医療者教育フェローシップ・プログラムの構築</p> <p>体系的FDを構築するために、ウェブサイト構築と教材開発を行い、MEDCフェローシップ/モジュール1～3を実施した。モジュール1には15名、モジュール2には30名、モジュール3には11名の参加者があった。医療教育者のキャリア支援のために、試験的なメンタリングを実施した。</p> <p>また、医学教育セミナーとワークショップ参加者に単位を付与して「MEDCアソシエイト」認定のためのシス</p>
--

テムを構築し、今年度は25名を認定した。

4) 医学教育専門家制度の構築

日本医学教育学会と連携して、医学教育の専門家育成に関する教育プログラム、評価プログラムの構築を行った。平成26年度から正式制度が開始され、講習コースにおける指導、ポートフォリオの評価に貢献した。

5) 医学教育ユニットとの連携

医学教育専門部局の教員間の情報・経験交流を目的とした「医学教育ユニットの会」を結成し、全国大学の医学教育センター・臨床研修センター等との連絡組織のメーリングリストを作成して、当センターが基幹校として情報共有、意見交換を行っている。28年度も特に国際認証、臨床教育、海外実習などの具体的で有益な情報が共有された。年度末の登録ユニット数は81大学186機関となっている。

6) 全国の医療教育機関FDへの貢献

全国の医学・医療系教育機関、医療系学会・研究会、地域医療組織などの求めに応じて各種研修の企画・指導を行った。

7) コミュニケーション教育法の開発・普及

全国の模擬患者団体を対象とした講習会を実施し、より適切・高度なコミュニケーション教育、学生評価、電子ポートフォリオの開発を行った。

8) e-ラーニング・問題基盤型教育法の開発・普及

問題基盤型教育の長期的な学習効果に関する検証を行い、その有用性が証明された。

9) 国際交流

医療英語ワークショップを5回、英語OSCEを実施し、医学生の医療英語教育を充実させ海外臨床実習を促進した。また岐阜大学医学部・附属病院と岐阜県医師育成確保コンソーシアム関連病院にて、マギル大学教員3名による研修会を開催した。

10) 社会人大学院の受け入れと研究指導

社会人大学院生10名に対して、医学教育学の教育と研究指導を行った。平成29年度にはさらに1名の社会人大学院生が加わり、11名が在籍する予定である。

11) 多職種連携医療教育プログラムの構築

初年次における医学・看護学生共同の模擬カンファレンス授業を本格実施し、学習成果を分析した。また地域医療・保健・介護に関わる多職種連携教育プログラムを実施し、その成果を分析した。岐阜薬科大学、平成医療短期大学看護学科、リハビリテーション学科(理学療法専攻、作業療法専攻、視機能療法専攻)と共同カリキュラムとして、4年次学生に対して多職種の医療系学生による合同ケースカンファレンスを実施し、それぞれの学生の学習成果、課題などを分析した。多職種連携医療教育に使用できる動画教材を作成した。また、第62回医学教育セミナーとワークショップにおいては多職種連携教育ツールiPEDについてのセミナーを開催し、第63回では、「どうやって始める？iPE」のワークショップを開催し、多職種連携の方法について普及に努めた。

2. 組織等

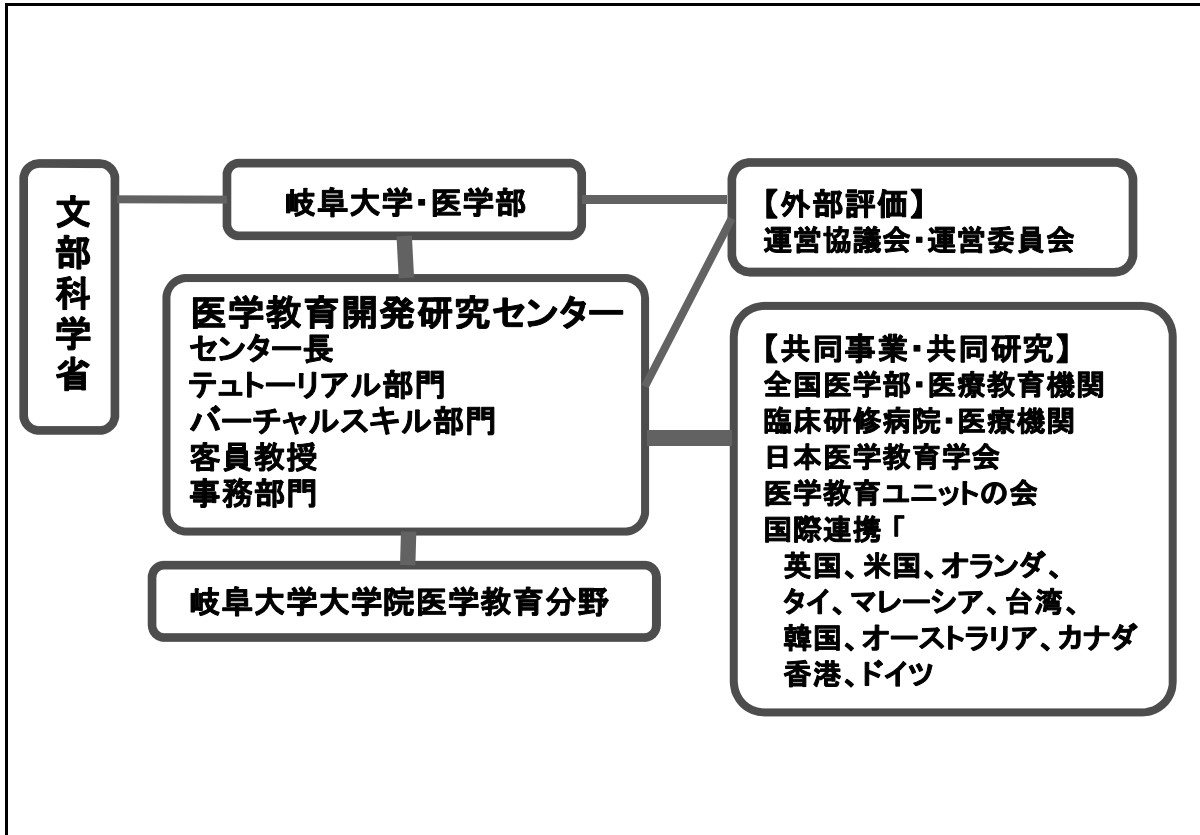
(1) 当該拠点を記載している学則等

(別紙として添付してください。)

[別紙 1] 岐阜大学学則 第1章第12条

[別紙 2] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター規程

(2) 組織図



(3) 人員(平成29年3月31日時点)

教授	准教授	講師	助教	助手	小計	技術職員	事務職員	合計
2	1		3		6		1	7
(1)					(1)	(1)	(4)	(6)

(注) 上段には専任の教職員数を記入し、下段には兼任教員や非常勤教職員等の人数を、()書きで外数で記入してください。

(4) その他人員(平成29年3月31日時点)

特別協力研究員4名

(注) (3) 記入の職名以外の専任の教職員がいる場合には、その職名及び人数を記入してください。

3-1. 共同利用実施のための運営体制

(1) 審議する委員会等に関する規則等

(別紙として添付してください。)

[別紙 3] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会細則

[別紙 4] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会細則

(2) 審議する委員会等の所属者名等

委員会名【医学教育開発研究センター運営協議会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
湊口 信也	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	循環呼吸制御学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
千田 隆夫	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	解剖学
清水 雅仁	岐阜大学	医師育成推進センター長	耳鼻咽喉科学
村上 啓雄	岐阜大学	地域医療医学センター専任の教授	地域医療、内科学、感染症
奈良 信雄	東京医科歯科大学	学外の学識経験者	医学教育
平形 道人	慶應義塾大学	学外の学識経験者	医学教育
小西 靖彦	京都大学	学外の学識経験者	医学教育
羽野 卓三	和歌山県立医科大学	学外の学識経験者	医学教育
大滝 純司	北海道大学	学外の学識経験者	医学教育
泉 美貴	東京医科大学	学外の学識経験者	医学教育

(注)教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程(平成21年8月20日文部科学省告示第155号)第2条第3項に基づく委員会は必ず記入ください。

委員会名【医学教育開発研究センター運営委員会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
湊口 信也	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	循環呼吸制御学
奥村 太志	岐阜大学	医学部看護学科長	看護学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
鈴木 康之 (再掲)	岐阜大学	医学教育企画評価室長	
紀ノ定 保臣	岐阜大学	医療情報部長	医療情報学
伊藤 八次	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	耳鼻咽喉科学
塩入 俊樹	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	精神病理学
藤田 守	岐阜大学	医学系研究科・医学部事務長	

(3) 大学(法人)全体として共同利用を推進するための取組

年4回開催される「医学教育セミナーとワークショップ」に係る費用(講師旅費・謝金、教職員旅費、会場費、備品・消耗品代等)、外国人・日本人客員教授に係る費用(給与、旅費、宿舎補助等)、教育開発・研究に係る費用は当センターに配分された岐阜大学運営経費で賄われる。セミナーとワークショップ会場として岐阜大学医学部教育・福利棟と医学部記念会館、平成24年度より開設された岐阜駅前にある岐阜大学サテライトキャンパスが無償で提供され、運営には当センタースタッフだけでなく、医学部教職員の幅広い無償協力が得られる。外国人客員教授に岐阜大学国際交流会館(ゲストハウス)が提供される。

3-2. 共同利用の状況

(1) 共同利用の概要

課題名	概要
1 第60回医学教育セミナーとワークショップ in 東京医大 (東京医科大学と共催)	<ul style="list-style-type: none"> ・WS-1「医学教育で使えるeラーニング教材を作る！共有する！活用する！」 －日本版 MedEdPORTAL の構築を目指して－ ・WS-2「学外臨床実習の充実に向けて」 ・WS-3「医学教育における教学IRの理論と実践」 ～分野別認証評価とその先を見据えて ・WS-4「文化的差異への対応」 －語学・文化人類学の観点からネイティブ英語SPを活用した実践の可能性 ・WS-5「シミュレーション Scenario(シミュレーションを導入した授業案・指導案)」 をブラッシュアップしよう！ ・WS-6「医学教育分野別認証評価における自己評価の書き方を学ぶ」 ・WS-7「性的マイノリティ患者に適切な医療を提供するために医療系学生が学ぶべきことを考える」 ・パネルディスカッション「共感する能力は教育できるか？」 ・セミナー「ICTを活用した医学教育の未来構造」-さらなる高みへ-
2 第17回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修	<p>(国立大学医学部長会議常置委員会・一般社団法人全国医学部長病院長会議主催)</p> <p>国公立大学医学部・歯学部の教務事務職員を対象とした医学教育の基本に関する研修</p> <p>2泊3日のプログラムで当センターが継続して企画運営している</p>
3 第61回医学教育セミナーとワークショップ in 岐阜	<ul style="list-style-type: none"> ・セミナー1「世界標準の臨床実習はこれだ」 ・セミナー2「卒前・卒後医学教育での選抜におけるマルチプル・ミニ面接法」 ・WS-1「新専門医制度時代の臨床研修－卒前から後期までのシームレスな教育を現場から考える」 ・WS-2「授業方略ピアレビュー大会」 ・WS-3「アウトカム基盤型カリキュラムにおける学習者評価を考える」 ・WS-4「医師のプロフェッショナルアイデンティティ形成(PIF)を考える」 ・WS-5「アクティブラーニング「やる気・関わり・深い学び」 ・WS-6「看護教育における模擬患者養成ABC」 ・WS-7「卒前から卒後に至る歯科医療面接のルーブリック評価を作ろう」
4 第62回医学教育セミナーとワークショップ in 兵庫医大(兵庫医科大学と共催)	<ul style="list-style-type: none"> ・パネルディスカッション-1「医学教育IRの挑戦～ブレイクスルーを求めて」 ・パネルディスカッション-2「医学教育分野別認証では何を評価されるのか」 ・WS-1「模擬患者大交流勉強会」 ・WS-2「海外臨床実習に向けた準備教育」 ・WS-3「CBRマトリックスで地域資源や患者生活の包括的診断をしてみよう」 ・WS-4「TBLを体験しよう」 ・WS-5「学生のリサーチマインドを涵養しよう」 ・WS-6「医療安全に配慮した多職種連携でのファンリテーター育成シナリオの作成」 ・WS-7「学部生活の振り返りによるキャリア意識醸成の新手法」 ・セミナー「多職種連携教育ツールiPEDによる学生教育と患者教育の接続－参加者インタビューの質的分析－」

5	第63回医学教育セミナーとワークショップ in岐阜	<ul style="list-style-type: none"> ・セミナー「The 地域卒学生の育て方 ～卒後のキャリア支援を見据えて～」 ・WS-1「第8回東海地区SP勉強会&交流会(拡大版)～コミュニケーション分野のOSCEでの学生のパフォーマンスを評価してみよう!～」 ・WS-2「卒後キャリア支援を見据えた地域卒学生の育て方」 ・WS-3「Road to Professional! 熟達化とその評価」 ・WS-4「新人医療者が成長するためのシームレスな支援を目指す 学校編～学生を育てる人を支えるレシピ♡～」 ・WS-5「行動変容を促す「動機づけ面接」を紐解こう」 ・WS-6「グラフィックデザインの視点からみた魅力的な掲示物の作り方」 ・WS-7「LMS(Learning Management System)で教材を作ってみよう!」 ・WS-8「第12回 医学教育研究技法ワークショップ「医療者教育の研究を立案してみよう」」 ・WS-9「新人医療者が成長するためのシームレスな支援を目指す 臨床編」 ・WS-10「どうやって始める? IPE」 ・WS-11「学生さん、医療者教育研究の世界へようこそ! -教育研究体験を通しての学びを考える-」
---	------------------------------	---

(注)「練習船」「演習林」「農場」「臨海・臨湖実験所及び水産実験所」の各拠点の場合には、当該拠点施設における実習を授業科目(一部分として実施するものを含む)として実施し単位認定を伴う授業科目には、その概要を簡明に記入するとともに教育課程上の実習利用状況(共同利用大学数・利用学生数)を記入してください。

(2) 共同利用状況

区分	平成28年度			備考
	所属機関数	利用人数	延べ人数	
学内(法人内)	8	323	1656	
国立大学	63	158	200	
公立大学	22	47	64	
私立大学	101	245	322	
大学共同利用機関法人	0	0	0	
民間・独立行政法人等	178	465	824	
外国の研究機関	3	5	5	
(うち大学院生)	(9)	(16)	(35)	
計	375	1243	3071	

(注)1. 当該年度の共同利用拠点利用者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

2. 「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

3. 「練習船」の場合には、「備考」の欄に「年間運航可能日数」「年間運航日数(実績)」「共同利用日数(実績)」を記入してください

(3) その他、共同利用拠点として、特色ある取組等

<p>1) 日本医学教育学会の専門家制度委員会活動の一環として専門家養成講習会や専門家認定ポートフォリオ評価作業に参画し、医学教育専門家認定制度の構築に貢献している。</p> <p>2) 医学教育ユニットの会: 全国の医学部・附属病院にある医学教育専任部門、卒後教育部門の連携組織「医学教育ユニットの会」の活動を支援・促進している。</p> <p>3) 各種e-ラーニング・問題基盤型学習システムの開発: ウェブ上で議論しながら自己学習を促進する「インターネット・テュートリアル」、学習を振り返り、教員からのフィードバックを受ける「e-ポートフォリオ」等を構築し、各大学の共同利用と情報提供を行っている。</p> <p>4) コミュニケーション教育の推進: 全国の模擬患者を育成し、医療コミュニケーション教育のFDを実施している。</p> <p>5) 大学院博士課程: 医学教育学博士課程に全国から社会人大学院生が入学し、大学院在籍者10名となり、医学教育研究を活性化させている。</p> <p>6) 国際交流の推進: 毎年1名の外国人客員教授を招聘し、国内各施設で医学教育指導にあたっている。</p> <p>7) 国内教育機関におけるFDの指導: 各施設・組織の求めに応じて教員を派遣し、FDを実施している。</p> <p>8) フェローシップ制度を本格導入し、3つのモジュールを実施した。</p> <p>9) MEDCアソシエイト認定制度を構築し、25名を認定した。</p>

3-3. 共同利用に係る支援状況

(1) 共同利用する大学への支援の状況

東京医科大学(第60回医学教育セミナーとワークショップ)、兵庫医科大学(第62回医学教育セミナーとワークショップ)と共催することにより、共催大学とその周辺地域の教職員研修を促進するとともに、研修のノウハウを広げ、今後各地で独自に研修が実施できるよう支援する。研修に係る費用は当センターの運営経費と文科省からの運営費交付金で賄った。

(2) 共同利用する大学の利便性の向上等を目的とした取組

医学教育セミナーとワークショップへの参加利便性を向上させるために、東京医科大学と兵庫医科大学で共同開催した。岐阜駅前近辺施設を活用し、参加利便性を向上させた。当センターホームページをアップデートし、情報提供を向上させる。

(3) その他、共同利用に係る支援のための特色ある取組

コンソーシアム連携病院と共同して海外より指導教員を招聘し、FDを行った。

3-4. 情報提供・情報発信等

(1) 共同利用に関する情報(利用方法・利用状況等)の提供

時期等	概要
逐次	<p>ホームページ: 医学教育セミナーとワークショップ、インターネット・テュートリアル、医療コミュニケーション教育、客員教授、医学教育ユニットの会、医学教育用語解説(ビタミンE-メール、ながら情報)、スキルスラボ、シミュレーション学習教材などの情報提供を行っている。</p> <p>メーリングリスト: 医学教育セミナーとワークショップ参加者向け、教務事務職員向け、医学教育ユニット教員向けに各種メーリングリストを構築し、医学教育に関する最新情報、各種研修会や共同プロジェクトに関する情報提供、参加者間の情報交換・意見交換を行っている。</p>

(注) 当該年度の当該拠点における共同利用に関する利用方法や利用状況等の情報提供の状況を簡明かつ具体的に記入してください

(2) 拠点に関する情報発信(公開講座、公開講演会等含む)

新しい医学教育の流れ(4冊)を季刊の雑誌として刊行した
センター年報(2015)
第17回教務事務職員研修報告書
ホームページの更新
メーリングリストにて各種情報提供、情報交換、意見交換

(3) 国際的な対応に向けた取組

学生に向け実践的な医療英語をトレーニングする参加型ワークショップを開催した。
また、平成28年度は臨床教員の指導力向上とカリキュラム改善のために、医学教育先進国であるカナダ・マギル大学(教育先進校)より指導教員を3名招聘し、講習会やミーティングにて実地の指導法を教授いただいた。講習を通じて理解とスキルの向上を図り、学生臨床実習と研修医教育の改善、国際化を図った。

5. 拠点認定時の特記事項への対応状況

○特記事項

- (1) 医学教育支援の拠点ならではの他大学との連携や、連携先の支援をより意識した取り組みを展開すること。
- (2) 取組のプロセスや成果のチェックなどの役割を含め、職員の育成にも努めること。
- (3) 共同利用の運営委員会について、自大学以外の委員の割合を高めるように努めること。

○特記事項への対応状況

- (1) 年4回の「医学教育セミナーとワークショップ」のうち他大学との共催を2回実施している。
- ・他大学等への研修指導に関する指導を本年度は述べ32回行った。
 - ・医学教育・臨床研修専門部局の教員間の情報・経験交流を目的とした「医学教育ユニットの会」の基幹校として運営を行っている。平成28年度末現在で81大学186機関の登録がある。
 - ・岐阜大学のみならず、コンソシアム関連病院にてカナダ・マギル大学から招聘した医学教育専門家による講習会を実施し、学生臨床実習と研修医教育の改善及び国際化を図った。
- (2) 新人研修の要素もある「国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修」を年1回実施しており、「医学教育の基本」を毎年教授することにより事務職員の基本的知識の底上げをサポートしている。前年度の事後アンケートの要望を考慮し、昨年に引き続き、外部講師による「分野別認証トライアルを経験して」の講義を開講した。また、本学教育学部教員による「見やすい資料・掲示物の作成」の講義・演習で有効な掲示物の作成方法を学ばせ、本学職員にも公開した。
- ・事前課題の提出により各大学の課題を把握し、グループ別討議の題材としている。また、事前アンケートにより、研修に対する要望の把握に努めるとともに、研修参加者の目的意識を明確にし、より確実な成果が得られるよう導いた。
 - ・「医学教育セミナーとワークショップ」では、共催校事務職員ともTV会議などを通じて事前打ち合わせをし、綿密な連携のもと、共にワークショップの運営に携わることにより事務職員のネットワークを構築するとともに、育成にも寄与している。
- (3) 認定時、運営協議会の構成員比は自大学10名：他大学5名であったが、平成27年度より自大学9名：他大学6名（女性含む）とし、自大学以外の委員の割合を高めた。平成29年度の任期満了による構成員交代により、他機関所属委員6名のうちの女性の割合を高める予定である。

6. その他

○当該拠点施設に係る決算関係資料 【別紙5】 【資料1】

(28年度の施設運営に関する経費の概要が分かる資料(既存のもので可)を別紙として添付してください。なお、利用にあたって費用徴収を行った場合、利用料金がわかる資料を併せて添付してください。)

※ 事務担当者

役職名	医学系研究科・医学部 教育企画係長
氏名	北野 敦子
TEL	058-230-6470
E-mail	gjme00028@jim.gifu-u.ac.jp

【教育関係共同利用拠点 平成29年度実施計画書】

1. 拠点の概要

(1) 目的・概要等

大学名	岐阜大学	学長名	森脇 久隆
拠点代表者名	藤崎和彦		
拠点の名称	医学教育共同利用拠点		
共同利用分野	医学教育		
目的・概要	<p>医学教育の新しい流れを全国で共有し、急速な進歩を遂げる日本の医療を支える医学教育システムを構築することと、個々の教員・指導医の教育スキルを高めることを主な目的としている。</p> <p>テューリアル部門とバーチャル部門があり、常勤教員7名(教授3名、准教授1名、助教3名)と事務職員、教務補佐員が一致協力して運営にあたっている。拠点予算により教務補佐員1名、事務補佐員2名を採用し、フェローシップの構築に向け取り組んでいる。</p>		

(2) 当該年度における実施計画(概要)

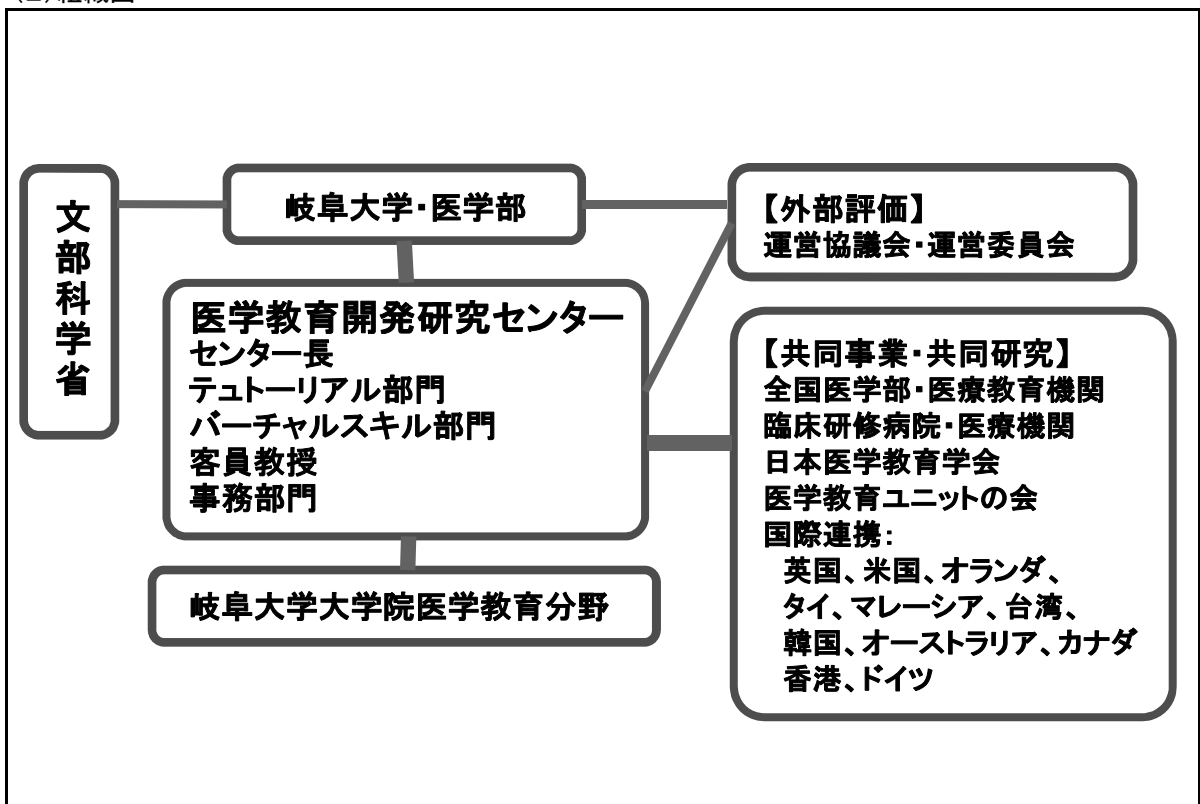
<p>全国規模のFDの高度化を図りつつ、継続的に医療指導者の能力開発を支援する体系的な「医療者教育フェローシップ・プログラム」を構築し、全国の医学部・医療系教育機関と連携してリーダーを育成してゆけるシステムを検証し、教育の改善に資する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 医学教育セミナーとワークショップの開催(4回) 2) 教務事務職員研修の開催 3) 医療者教育フェローシップ・プログラムの実施 4) 医学教育専門家制度の構築 5) 医学教育ユニットとの連携 6) 全国の医療教育機関FDへの貢献 7) コミュニケーション教育法の開発・普及 8) e-ラーニング・問題基盤型教育法の開発・普及 9) 国際交流(客員教授招聘、共同研究、国内での指導) 10) 社会人大学院の受け入れと研究指導 11) 多職種連携医療教育プログラムの深化、発展、普及 12) 医療者教育学修士課程設立準備

2. 組織等

(1) 当該拠点を記載している学則等
(別紙として添付してください。)

[別紙 1] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター規程

(2) 組織図



(3) 人員(平成29年4月1日時点)

教授	准教授	講師	併任講師	助教	小計	技術職員	事務職員	合計
2	1		2	1	6		1	7
(1)					(1)	(1)	(4)	(6)

(注) 上段には専任の教職員数を記入し、下段には兼任教員や非常勤教職員等の人数を、()書きで外数で記入してください。

(4) その他人員(平成29年4月1日時点)

--

(注) (3) 記入の職名以外の専任の教職員がいる場合には、その職名及び人数を記入してください。

3-1. 共同利用実施のための運営体制

(1) 審議する委員会等に関する規則等

(別紙として添付してください。)

[別紙 2] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営協議会細則

[別紙 3] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター運営委員会細則

(2) 審議する委員会等の所属者名等

委員会名【医学教育開発研究センター運営協議会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
湊口 信也	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	循環呼吸制御学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
千田 隆夫	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	解剖学
清水 雅仁	岐阜大学	医師育成推進センター長	耳鼻咽喉科学
村上 啓雄	岐阜大学	地域医療医学センター専任の教授	地域医療、内科学、感染症
羽野 卓三	和歌山県立医科大学	学外の学識経験者	医学教育
大滝 純司	北海道大学	学外の学識経験者	医学教育
泉 美貴	東京医科大学	学外の学識経験者	医学教育
赤池 雅史	徳島大学	学外の学識経験者	医学教育
福島 統	東京慈恵会医科大学	学外の学識経験者	医学教育
山口 育子	NPO法人ささえあい医療人権センター-COML	学外の学識経験者	医学教育

委員会名【医学教育開発研究センター運営委員会】

氏名	所属機関名	役職名	専門分野
藤崎 和彦	岐阜大学	医学教育開発研究センター長	バーチャルスキル
鈴木 康之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
丹羽 雅之	岐阜大学	医学教育開発研究センター 教授	テュートリアル
西城 卓也	岐阜大学	医学教育開発研究センター 准教授	バーチャルスキル
湊口 信也	岐阜大学	医学部長・医学系研究科長	循環呼吸制御学
奥村 太志	岐阜大学	医学部看護学科長	看護学
小倉 真治	岐阜大学	病院長	救急・災害医学
鈴木 康之 (再掲)	岐阜大学	医学教育企画評価室長	
紀ノ定 保臣	岐阜大学	医療情報部長	医療情報学
長岡 仁	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	分子病退学
伊藤 八次	岐阜大学	医学系研究科・看護学科の専任教授	耳鼻咽喉科学
藤田 守	岐阜大学	医学系研究科・医学部事務長	

(注)教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程(平成21年8月20日文科科学省告示第155号)第2条第3項に基づく委員会には必ず記入ください。

(3) 大学(法人)全体として共同利用を推進するための取組

年4回開催される「医学教育セミナーとワークショップ」に係る費用(講師旅費・謝金、教職員旅費、会場費、備品・消耗品代等)、外国人・日本人客員教授に係る費用(給与、旅費、宿舎補助等)、教育開発・研究に係る費用は当センターに配分された岐阜大学運営経費で賄われる。セミナーとワークショップ会場として岐阜大学医学部教育・福利棟と医学部記念会館、平成24年度より開設された岐阜駅前にある岐阜大学サテライトキャンパスが無償で提供され、運営には当センタースタッフだけでなく、医学部教職員の幅広い無償協力が得られる。外国人客員教授に岐阜大学国際交流会館(ゲストハウス)が提供される。

3-2. 共同利用の見込み

(1) 共同利用の概要

課題名	概要
1 第64回医学教育セミナーとワークショップ in 昭和大 (昭和大と共催)	1泊2日、品川区で開催予定 WS-1 臨床実習前IPL(多職種交流授業)を企画する WS-2 チーム医療臨床実習(病院・地域)をデザインしてみよう WS-3 医学生と研修医のためのセルフケア教育をデザインする! WS-4 分野別認証自己点検評価書の考え方・書き方 WS-5 患者をその気にさせる「動機づけ面接」って何? WS-6 プロフェッショナルリズム教育の2つの義務から方略を考えよう ～向上心的目標とアンプロフェッショナルの回避～ WS-7 明日からできる、アクティブ・ラーニング ～さまざまなアクティブ・ラーニング・モデルを共有する～ WS-8 教学IR実践ブラッシュアップ～より洗練された医学教育IRに向けて～ WS-9 研修医のキャリアプランニング～自分らしいキャリア選択を考える～ セミナー超高齢社会を見据えた未来医療予想図 ～地域包括ケアの中の多職種協働～
2 第18回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修	(国立大学医学部長会議常置委員会・一般社団法人全国医学部長病院長会議主催) 国公立大学医学部・歯学部の教務事務職員を対象とした医学教育の基本に関する研修 2泊3日のプログラムで当センターが継続して企画運営している
3 第65回医学教育セミナーとワークショップ in 岐阜	2泊3日、岐阜市で開催予定
4 第66回医学教育セミナーとワークショップ in 岡山大(岡山大学と共催)	1泊2日、岡山市で開催予定
5 第67回医学教育セミナーとワークショップ in 早稲田(早稲田大学と共催)	1泊2日、新宿区で開催予定

(2) 共同利用の見込み

利用機関	平成29年度			備考
	所属機関数	利用人数	延べ人数	
学内	8	320	1650	
他大学	180	450	580	
内数 (可能であれば記入してください。)	国立			
	公立			
	私立			
大学以外の機関	180	470	830	
内数 (可能であれば記入してください。)	大学共同利用機関法人			
	民間・独立行政法人等			
	外国の研究機関			
計	368	1240	3060	

(注)1. 当該年度の共同利用拠点参加者の所属機関数、利用人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

2. 「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

3. 「他大学」「大学以外の機関」については、内訳がわかれば、「内数」欄に記入してください。

4. 「練習船」の場合には、「備考」の欄に「年間運航可能日数」「共同利用使用可能日数」「共同利用日数」がどの程度見込まれるかを記入してください。

(3)その他、共同利用拠点として、特色ある取組等

- 1)日本医学教育学会の専門家制度委員会活動の一環として専門家養成講習会や専門家認定ポートフォリオ評価作業に参画し、医学教育専門家認定制度の構築に貢献している。
- 2)医学教育ユニットの会:全国の医学部・附属病院にある医学教育専任部門、卒後教育部門の連携組織「医学教育ユニットの会」の活動を支援・促進している。
- 3)各種eラーニング・問題基盤型学習システムの開発:ウェブ上で議論しながら自己学習を促進する「インターネット・テューリアル」、学習を振り返り、教員からのフィードバックを受ける「e-ポートフォリオ」等を構築し、各大学の共同利用と情報提供を行っている。
- 4)コミュニケーション教育の推進:全国の模擬患者を育成し、医療コミュニケーション教育のFDを実施している。
- 5)大学院博士課程:医学教育学博士課程に全国から社会人大学院生が入学し、大学院在籍者10名が医学教育研究を活性化させている。平成29年度にはさらに1名が入学予定である。
- 6)国際交流の推進:毎年1名の外国人客員教授を招聘し、国内各施設で医学教育指導にあたっている。
- 7)国内教育機関におけるFDの指導:各施設・組織の求めに応じて教員を派遣し、FDを実施している。
- 8)地域及び世界に貢献できる人材を養成するため、医療者教育フェローシップ・プログラムを構築し、MEDCフェローとMEDCアソシエイトの認定を実施している。

3-3. 共同利用に係る支援予定

(1)共同利用する大学への支援の見込み

昭和大学(第64回医学教育セミナーとワークショップ)、岡山大学(第66回医学教育セミナーとワークショップ)、早稲田大学(第67回医学教育セミナーとワークショップ)と共催することにより、共催大学とその周辺地域の教職員研修を促進するとともに、研修のノウハウを広げ、今後各地で独自に研修が実施できるよう支援する。研修に係る費用は当センターの運営経費と文科省からの運営費交付金で賄う。

(2)共同利用する大学の利便性の向上等を目的とした取組の見込み

医学教育セミナーとワークショップへの参加利便性を向上させるために、昭和大学、岡山大学と早稲田大学で共同開催する。岐阜駅前近辺施設を活用し、参加利便性を向上させる。当センターホームページをアップデートし、情報提供を向上させる。外国人客員教授に対する岐阜大学国際交流会館(ゲストハウス)の利用を継続する。

(3)その他、共同利用に係る支援のための特色ある取組の見込み

コンソーシアム連携病院と共同して、海外FDを行う。

3-4. 情報提供・情報発信等

(1)共同利用に関する情報(利用方法・利用状況等)の提供の見込み

時期等	概要
逐次	ホームページ:医学教育セミナーとワークショップ、インターネット・テューリアル、医療コミュニケーション教育、客員教授、医学教育ユニットの会、医学教育用語解説(ビタミンE-メール、ながら情報)、スキルスラボ、シミュレーション学習教材などの情報提供を行っている。 メーリングリスト:医学教育セミナーとワークショップ参加者向け、教務事務職員向け、医学教育ユニット教員向け、MEDCフェロー向けに各種メーリングリストを構築し、医学教育に関する最新情報、各種研修会や共同プロジェクトに関する情報提供、参加者間の情報交換・意見交換を行っている。

(注)当該年度の当該拠点における共同利用に関する利用方法や利用状況等の情報提供の状況を簡明かつ具体的に記入してください。

(2) 拠点に関する情報発信の予定(公開講座、公開講演会等含む)

新しい医学教育の流れ(4冊)
センター年報(2016)
第18回教務事務職員研修報告書
ホームページの更新
文教速報、文教ニュースへの投稿・掲載
メーリングリストにて各種情報提供、情報交換、意見交換

(3) 国際的な対応に向けた取組の見込み

学生に向け実践的な医療英語をトレーニングする参加型ワークショップを開催している。
医学教育先進国から最新の医学教育を取り入れ、国際交流を図り、日本から情報発信することを目的として、外国人客員教授を招聘予定である。
また、平成29年度は臨床教員の指導力向上とカリキュラム改善のために、10名の教員をカナダ・マギル大学(教育先進校)へ派遣し、実地に指導法を視察し、講習を通じて理解とスキルの向上を図り、学生臨床実習と研修医教育の改善、国際化を図ることを目指す。

4. その他

○当該拠点施設に係る予算関係資料

(29年度の施設運営に関する経費の概要が分かる資料(既存のもので可)を別紙として添付してください。
なお、利用にあたって費用徴収を行う場合、利用料金がわかる資料を併せて添付してください。)

別添のとおり

[資料 1] 岐阜大学医学部医学教育開発研究センターMEDCフェロー認定プログラム規程

※ 事務担当者

役職名	医学系研究科・医学部 教育企画係長
氏名	北野 敦子
TEL	058-230-6470
E-mail	gjme00028@jim.gifu-u.ac.jp



2018
version

医学教育共同利用拠点
岐阜大学
医学教育開発研究センター

National Collaboration Center
Gifu University
Medical Education Development Center (MEDC)

アソシエイト/フェローシップ/大学院
Associate Fellowship PhD program



MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

患者のための医療者教育

Health Professions Education For the Patients

医学教育セミナーとワークショップ

アソシエイト

フェローシップ

大学院

日本の医療水準は革新を続けトップレベルを維持しています。

その安全かつ質の高い医療の提供を持続させるため、
より優れた医療者の育成が必要です。

それに呼応するため、医療教育では、
常に新たな学習ニード・教育方法が生まれており、
現代の指導者には柔軟な教育が求められています。

さあ、患者のための医療者教育を考える終わりなき旅へ

文部科学省認定の医学教育における共同利用拠点として、
職種や役職を超えた医療者教育のコミュニティを形成します。

“医学教育セミナーとワークショップ”

～すべての医療教育者へ～



アソシエイト制度

～教育の仲間を増やしたい方へ～



フェロースhip プログラム

～ご自身の教育を改善したい方へ～



大学院医学博士課程

～医療教育を研究したい方へ～



医学教育セミナーとワークショップ *Workshop*

内容

- あらゆるレベルの医療教育関係者や、教育に携わる事務職員を対象に年4回開催しています。
- ワークショップは、教育方法・評価・カリキュラム・運営とリーダーシップ・研究の領域に分けられており様々な学びを得られます。セミナーでは様々な最新情報を聴講できます。企画の公募も行っています。
- 2018年度スケジュール
 - ① 第68回 2018/6/2-3 @岐阜大学
(第19回国公立大学医学部・歯学部事務職員研修・第6回日本シミュレーション医療教育学会 学術集会同時開催)
 - ② 第69回 2018/8/18-19 @信州大学
 - ③ 第70回 2018/11/3-4 @自治医科大学
 - ④ 第71回 2019/1/25-26 @岐阜

アソシエイト制度 *Associate*

内容

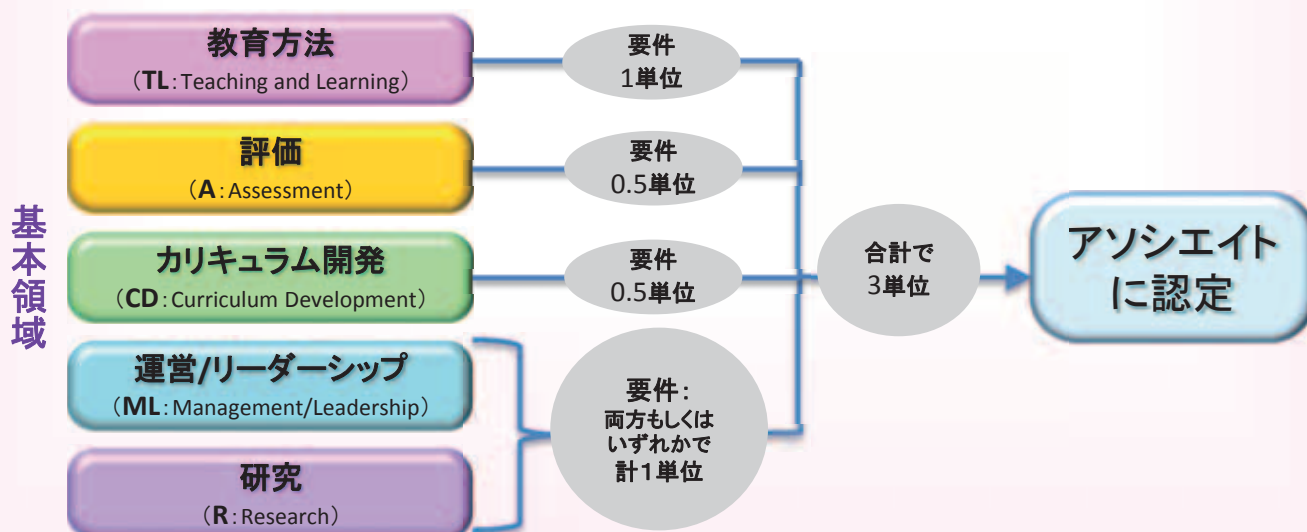
- 医学教育セミナーとワークショップの各領域の企画に、一定数参加された方をアソシエイト認定します。

要件・特典

- ワークショップやセミナーの参加、もしくは講師としての企画により各基本領域から合計3単位取得することが必要です。(半日WSは0.25単位、1日WSは0.5単位、セミナー(講演)は0.125単位)
- 医療者教育に関する様々な情報を得たり、意見交換できるメーリングリストに参加できます。

申請

- MEDCの個人ページで履修状況が確認できます。2010年の第35回以降の履修単位を換算しています。
- MEDCホームページから申請できます。



フェローシップ プログラム Fellowship

内容

- 学習方法、評価、プログラム設計、研究に関する基本を学べるコースです。各自の教育実践を題材にその改善を議論します。ご自身の教育実践やプログラムを見直し、より良くしたい方にお勧めです。
- 医療教育機関に所属する医療教育者ならどなたでも参加できます。
- 忙しい医療者が職場や自宅で学べるよう、オンラインコースやwebミーティングを導入しています。

フェローシッププログラム

MEDC医療教育トータルラーニングコース

“メドギフト”(MEDC, GIFU Total learning course)

オンラインコース	モジュール1	モジュール2	モジュール3
ワークショップ	TL 領域 0.5単位	A 領域 0.5単位	



アソシエイト認定

*モジュール1, 2に含まれるワークショップで取得する単位も含まれます。

履修方法

- 課題に沿って提出された各自の教育実践について、参加者やスタッフとオンラインで議論できます。
- 分かりやすい文献で基本を学んだり、オリジナルのビデオクリップで講義を視聴したりできます。
- モジュール1と2はオンライン学習とワークショップ、モジュール3はオンラインコのみで履修可能です。
- モジュール1と2はいずれからでも履修可能ですが、両方を修了するとモジュール3を履修できます。
- メドギフトの履修は、アソシエイトに認定される前からでも開始できます。

修了

- メドギフトの修了と、アソシエイト認定が、フェロー認定の要件です。
- 3つのモジュールは、5年以内に履修することが条件です。

お申込み・申請

- MEDCホームページから参加登録・認定申請ができます。

モジュール1 (履修期間 2018/6/11-2018/9/22)

“医療者は様々な場面で、周囲の人とどのように学ぶのか？”

(募集期間2018/3/1-31)

教育実践の中で、学習者が教育者とどんな対話を通じて学び、評価を受け、プログラムを通じて成長するのかについて学びます。正統的周辺参加論、成人学習理論、認知的徒弟制、構成主義、インストラクショナルデザインに軽く触れながら各自の教育実践のブラッシュアップを図ります。

- ① キックオフセッション: 実践の共有、教育の多様性を知ろう
- ② 課題1: 意味のある学びをもたらすには? - 動機、主体性 -
- ③ 課題2: 魅力ある評価をするには? - 学びの達成度はどのように評価できるか -
- ④ 課題3: 教育をデザインする - 魅力あるセッションの構築 -
- ⑤ WS: アクティブラーニング: やる気、関わり、深い学び (TL領域) 2018/8/18午後-19午前. 信州. 参加必須

モジュール2 (履修期間2018/11/12-2019/1/30)

“医療者は働きながらどのように専門性を高められるのか？”

(募集期間2018/8/1-31)

医療者は何を指して、どんな環境で指導を受け、学び、評価を受けながら専門性を高めていくのか、各自のキャリアを振り返りつつ議論します。“ミラーの能力のピラミッド”や“エリクソンの熟達化理論”、評価の基本として提唱する“U=RVECA”を題材に、継続的能力開発のあり方を探索します。

- ① キックオフセッション: これまでの歩み - キャリアは十人十色。だから面白い -
- ② 課題1: 専門家としての腕を磨く - エキスパートになるまでの道のり -
- ③ 課題2: 人の熟達化を支援する - より良い指導者のコツ -
- ④ 課題3: プロフェッショナルを評価する - 熟達化をどのように評価できるか? -
- ⑤ WS: ザ・プロフェッショナル - 熟達化とその評価 - (A領域) 2019/1/25午後-26午前. 岐阜. 参加必須

モジュール3 (履修期間2019/2/8-2019/3/31)

“教育効果は、どのように評価して研究につなげられるのか？”

(募集期間2018/11/1-30)

せっかくの教育実践をやりっぱなしで終わらせないため、その成果を確かめることが重要です。教育の成果を評価するさまざまな方法を理解し、“カークパトリックの4段階評価法”に基づいて考察できるようになります。また“教育”を研究として発信するプロセスのいろはも学びます。

- ① キックオフセッション: わたしの教育、効果あったんでしょうか？
- ② 課題1: 教育効果を確かめる - 評価方法のABC -
- ③ 課題2: 教育効果判定を適切に解釈する - 知識の向上から行動変容まで -
- ④ 課題3: リサーチクエスションと方法を考える - 学識ある発信のために -

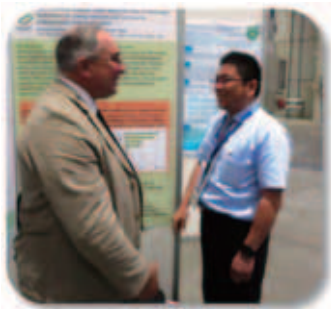
大学院博士課程 *PhD Program*

内容・履修

- 本課程では、効果的教育を探求するため、研究に必要なリサーチクエスチョンを洗練させる方法・教育研究方法・理論的考察法を学べます。そして関心あるテーマで論文を執筆できます。
- 卒前・卒後教育、質的・量的研究を問わず、幅広いテーマを柔軟に扱える指導陣を揃えています。
- 社会人大学院制度で運営されていますので、全国各地で働きながら履修できます。（長期履修制度有）
- 月1回のwebシステムを使ったりリサーチミーティングや個別ミーティングを通じて研究を推進します。

募集

- 岐阜大学医学系研究科医科学専攻(博士課程)の募集は、秋から冬にかけて3回行われます。
- 先行研究調査、学会発表や論文執筆ができる一定レベルの語学力が求められます。
- 入試の際、研究アイデアの発表をお願いしておりますので、関心のある方は、MEDCにご連絡ください。



国際学会にも参加し発表できます！



ご指導いただいている海外の客員教授とも学会で打合せできます！

社会人の視点を活かし、現場で活用できる研究が出来ました。スクーリングとしてのセミナーとワークショップも魅力的なテーマにあふれ、視野を広げてくれます。仕事と研究、どちらも頑張りたいあなたにお勧めです。

荒井和子先生（東京都豊島区池袋保健所長崎健康相談所）

Arai, K., Saiki, T., Imafuku, R., Kawakami, C., Fujisaki, K., & Suzuki, Y. (2017). What do Japanese residents learn from treating dying patients? The implications for training in end-of-life care. *BMC medical education*, 17(1), 205.



時間に追われる臨床医にも門戸を開放していただき博士号を取得できました。多職種の大学院生が会するwebリサーチミーティングを通じて楽しく学べます。社会人のための配慮が手厚くなされており、医療現場に携わりながら研究もしたい方にお勧めです！

吉村仁志先生（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）

Yoshimura, H., Kitazono, H., Fujitani, S., Machi, J., Saiki, T., Suzuki, Y., & Ponnampereuma, G. (2015). Past-behavioural versus situational questions in a postgraduate admissions multiple mini-interview: a reliability and acceptability comparison. *BMC medical education*, 15(1), 1.

アソシエイト・フェロー認定までの流れ

フェロー認定ご希望の方

参加申込(HP受付サイト)
資料代振込(¥2000)

モジュール1, 2, 3の受講
(5年以内)

モジュール修了認定

MEDCフェロー認定申請
認定料振込(¥2000)

フェロー認定証 授与

アソシエイト認定ご希望の方

参加申込(HP受付サイト)

WS参加(単位取得)

必要単位が集まったら
アソシエイト認定申請(HP)

認定料振込(¥2000)

アソシエイト認定証 授与

文部科学省 医学教育共同利用拠点 岐阜大学医学教育開発研究センター

2001年に医学教育領域の共同利用施設として発足し、新しい医学教育法の開発、医学教育に貢献できる人材育成、国内外の医学教育機関との連携・共同研究を推進してきました。問題基盤型学習(PBL)の普及・改善、模擬患者参加型のコミュニケーション教育、シミュレーション教育、eラーニング、ポートフォリオ評価、国際交流と医療英語教育などに力を入れています。毎年4回開催される医学教育セミナーとワークショップは全国規模の教員養成プログラムとして高く評価されています。2010年に全国唯一の医学教育共同利用拠点に文部科学省から認定され、2015年に再認定されました。



お気軽にご連絡・ご相談ください！

岐阜大学医学教育開発研究センター

住所: 〒501-1194 岐阜市柳戸1-1

TEL: +81 (0)58 230 6470 FAX: +81 (0)58 230 6468

Email: medc@gifu-u.ac.jp

第56回 医学教育セミナーとワークショップ in 埼玉医大

2015年 6月6日(土)正午 ~ 7日(日)午前
埼玉医科大学 (毛呂山キャンパス)

- WS-1 量的データを用いた医学教育研究のための統計解析 (初級編)**
企画：椎橋実智男 (埼玉医科大学)、大西弘高 (東京大学)、菅沼太陽 (東京女子医科大学)、丹羽雅之 (MEDC)
- WS-2 デブリーフィングで振り返るシナリオベーストレーニング**
— シナリオを作成しトレーニングを実体験する —
企画：辻 美隆・山田泰子・川村勇樹 (埼玉医科大学)、阿部幸恵 (東京医科大学)
- WS-3 社会医学的視点を取り入れた
地域志向型早期体験実習を企画しよう!**
企画：柴崎智美・高橋幸子・森 茂久 (埼玉医科大学)、新井利民 (埼玉県立大学)、細谷 治 (城西大学)、勝木祐仁 (日本工業大学)
- WS-4 SP大交流勉強会**
企画：藤崎和彦 (MEDC)、有田和恵 (埼玉医科大学)、阿部恵子 (名古屋大学)
- WS-5 自分目線・相手目線・第三者目線の違いがわかる
ポジションチェンジ実習**
企画：米岡裕美 (埼玉医科大学)、楯岡かおる (研修講師・NLPトレーナー)
- WS-6 1歩先をいくサマリーの書き方・教え方**
企画：林 幹雄・稲葉 崇 (筑波メディカルセンター病院)
- WS-7 現場で看護を育む – 1分間指導法Get! –**
企画：谷口初美 (九州大学)、任 和子・内藤知佐子・内海桃絵 (京都大学)
- セミナー 埼玉医科大学医学部の教員組織の改革**
— 医局講座制・教育業績評価はいかに変わったか —
講師：土田哲也・椎橋実智男 (埼玉医科大学)

第16回
教務事務職員研修
2015/5/13-15

第57回
岐阜
2015/8/7-9

第58回
香川
2015/10/17-18
共催：香川大

第59回
岐阜
2016/1/23-24

第60回
東京
2016/5/21-22
共催：東京医大

MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第57回

医学教育セミナーとワークショップ

2015年 8月7日(金)PM ~ 9日(日)AM
岐阜大学(医学部キャンパス)

- WS-1 アクティブラーニング：やる気・関わり・深い学び** **FELLOWSHIP**
T/L 企画：西城卓也・丹羽雅之・今福輪太郎・川上ちひろ・恒川幸司 (MEDC)、西屋克己 (香川大学)
- WS-2 臨床研修事務WS**
M/L 企画：鈴木康之・川上ちひろ (MEDC)、青野真弓 (聖路加国際大学)、尾原晴雄 (沖縄県立中部病院)、伊藤俊之 (滋賀医科大学)、渡辺文恵 (岡山大学)
- WS-3 シナリオベースで学ぶ多職種連携教育ファシリテーション**
T/L 企画：孫 大輔 (東京大学)、川村和美 (シップヘルスケアファーマシー東日本)、鈴木佳奈子 (4UrSMILE/家庭支援協会)
- WS-4 研究手法としてのインタビューをより効果的にするために**
R 企画：今福輪太郎 (MEDC)、布原佳奈 (岐阜県立看護大学)、小西恵理 (松江赤十字病院)
- WS-5 歯科医療面接をどのように段階的に学ぶべきか？**
CD - 医療コミュニケーション、診断推論そして行動変容
企画：伊藤孝訓 (日本大学松戸歯学部)、木尾哲朗 (九州歯科大学)、長谷川篤司 (昭和大学)、鈴木一吉 (愛知学院大学)、吉田登志子 (岡山大学)、藤崎和彦 (MEDC)
- WS-6 未来の医師を現在どう育てるか?変化への適応能力は万全か**
M/L 企画：高橋優三 (兵庫医科大学)、黒田知宏 (京都大学)、岡田唯男 (亀田ファミリークリニック館山)
- WS-7 卒業時OSCE実施の実際とパフォーマンス充実のための工夫**
A - 日本の国情に合った理想的OSCE実施のポイントと各科医学教育の質保証-
企画：長谷川仁志 (秋田大学)、田川まさみ (鹿児島大学)、石川和信 (福島県立医科大学)、石川鎮清 (自治医科大学)
- WS-8 医学部で「性的マイノリティ・LGBT」をどう教えるか**
T/L 企画：青木昭子 (東京医科大学)、阿部恵子・松尾かずな (名古屋大学)、星野慎二 (NPO法人SHIP代表)、宮島謙介 (しらかば診療所)
- WS-9 医療におけるジェンダーとコミュニケーション**
M/L 企画：Debra Roter (Johns Hopkins)、野呂幾久子 (東京慈恵会医科大学)、飯岡緒美 (東京大学)
- セミナー 医療コミュニケーション研究の現状 (仮題)**
R 講師：Debra Roter (Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health)

第58回

香川

2015/10/17-18
共催：香川大

第59回

岐阜

2016/1/23-24

第17回

教務事務職員研修

2016/5/11-13

第60回

東京

2016/5/21-22
共催：東京医大

第61回

岐阜

2016/8/5-7



医学教育共同利用拠点

岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468

〒501-1194 岐阜市柳戸1番1

E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第58回 医学教育セミナーとワークショップ in 香川

2015年10月17日(土)～18日(日)
サンポートホール高松

WS-1 心身医学教育の実践

CD

企画：岡田宏基（香川大学）、福永幹彦（関西医科大学）、天野雄一（東邦大学）、
網谷真理恵（鹿児島大学）、小山敦子・奥見裕邦（近畿大学）

WS-2 学生・若手医師のキャリアデザイン ～系統的キャリア形成支援

M/L

企画：賀来 敦・村田亜紀子（岡山家庭医療センター）、里見なつき（東海大学）

WS-3 Work-Based Assessment: 臨床実習から専攻医指導まで

A

企画：鈴木康之（MEDC）、西屋克己（香川大学）、高村昭輝（金沢医科大学）、
小西恵理（松江赤十字病院）

WS-4 模擬患者大交流勉強会

T/L

企画：藤崎和彦(MEDC)、余島侑子（香川大学医学部SP研究会）、長宗雅美（徳島大学）

WS-5 指導医のモチベーションをどう維持するか？

M/L

企画：江村 正・末次典恵（佐賀大学）、尾原晴雄（沖縄県立中部病院）

WS-6 医療者教育における反転授業ことはじめ

T/L

企画：西屋克己（香川大学）、鶴田 潤（東京医科歯科大学）

WS-7 社会科学・行動科学のPBLチュートリアルのための臨床症例 のシナリオ教材の作成

T/L

企画：日本医学教育学会 準備教育・行動科学教育委員会（和泉俊一郎、星野 晋、
竹腰 進、榎田美雄、道信良子、川上ちひろ、若林英樹、日高友郎、河本慶子）

セミナー Peer-Assisted Teaching - A tool to be considered at Japanese medical schools? -

T/L

講師：Daisy E Rotzoll（University of Leipzig / MEDC客員教授）



第59回
岐阜

2016/1/23-24

第17回

教務事務職員研修

2016/5/11-13

第60回
東京

2016/5/21-22
共催：東京医科大学

第61回
岐阜

2016/8/19-21

第62回
秋

2016

MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第59回

医学教育セミナーとワークショップ

2016年1月23日(土) PM ~ 24日(日) AM
じゅうろくプラザ (JR岐阜駅前)

WS-1 ザ・プロフェッショナル：熟達化とその評価

FELLOWSHIP

A

企画：西城卓也・今福輪太郎・恒川幸司 (MEDC)、尾原晴雄 (沖縄県立中部病院)

WS-2 臨床コンテキストで行動科学を学習するためのPBL教材を作成する

T/L

企画：日本医学教育学会 準備教育・行動科学教育委員会 (和泉俊一郎、星野 晋、竹腰 進、
櫻田美雄、道信良子、川上ちひろ、若林英樹、日高友郎、河本慶子、大貫優子)

WS-3 第11回 医学教育研究技法ワークショップ

R

「医療者教育の研究を立案してみよう」

企画：日本医学教育学会 教育研究開発委員会 (鈴木康之、大滝純司、尾原晴雄、伊藤俊之、
石川ひろの、錦織 宏、向原 圭、西城卓也)

WS-4 歯科医療面接のキャップストーン、マイルストーンを作ろう

CD

企画：伊藤孝訓 (日本大学松戸歯学部)、小川哲次 (広島大学)、木尾哲朗 (九州歯科大学)、
長谷川篤司 (昭和大学)、鈴木一吉 (愛知学院大学)、吉田登志子 (岡山大学)、
藤崎和彦 (MEDC)

WS-5 簡単にできちゃう！ eラーニング教材

T/L

企画：日本医学教育学会 広報・情報基盤開発委員会 (R. ブルーヘルマンズ、菅沼太陽、椎橋実智男、
丹羽雅之)

WS-6 IPE theater ～IPEの映像教材作りのステップ～

T/L

企画：川上ちひろ・今福輪太郎・恒川幸司 (MEDC)、若林英樹・近藤 諭 (三重大学)、堀 能雄 (プラド)

セミナー 医学教育における医療人類学—ヘルスサイエンスとしての視点と方法

T/L

講師：道信良子 (札幌医科大学)

第17回

教務事務職員研修

2016/5/11-13

第60回

東京

2016/5/21-22
共催：東京医大

第61回

岐阜

2016/8/19-21

第62回

兵庫

2016/10/22-23
共催：兵庫医大

第63回

岐阜

2017/1/28-29

MEDDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点

岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468

〒501-1194 岐阜市柳戸1番1

E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第60回 医学教育セミナーとワークショップ in 東京医大

2016年 5月21日 (土) 13時 ~ 22日 (日) 13時

共催：東京医科大学 (会場：東京医科大学病院 教育研究棟 (自主自学館))

WS-1：医学教育で使えるeラーニング教材を作る！共有する！

T/L 活用する！ -日本版 MedEdPORTAL の構築を目指して-
日本医学教育学会 広報・情報基盤開発委員会(椎橋実智男ほか)

WS-2：学外臨床実習の充実に向けて

CD 日本医学教育学会 卒前臨床教育委員会(赤木美智男ほか)

WS-3：医学教育における教学IRの理論と実践

R ~分野別認証評価とその先を見据えて
恒川幸司(MEDC) 荒井貞夫(東京医大) 中村真理子(東京慈恵医大) 岡田聡志(千葉大)

WS-4：文化的差異への対応

T/L -語学・文化人類学の観点からネイティブ英語SPを活用した実践の可能性
芦田ルリ(東京慈恵医大) 倉田 誠 林美穂子(東京医大) Alan Hauk(東邦大)

WS-5：シミュレーション Scenario (シミュレーションを導入した授業案・指導案) をブラッシュアップしよう！

阿部幸恵 伊藤綾子(東京医大) 万代康弘(岡山大)

WS-6：医学教育分野別認証評価における自己評価の書き方を学ぶ

M/L 泉 美貴(東京医大) 奈良信雄(順天堂大) 中村真理子(東京慈恵医大)

WS-7：性的マイノリティ患者に適切な医療を提供するために医療系学生が学ぶべきことを考える

青木昭子(東京医大) 阿部恵子 松尾かずな(名古屋大)

パネルディスカッション：共感する能力は教育できるか？

T/L 日本医学教育学会 倫理・プロフェッショナリズム委員会(尾藤誠司 宮田靖志ほか)
杉原保史(京都大) 竹林洋一(静岡大) 西垣悦代(関西医科大)

セミナー：ICTを活用した医学教育の未来構造 -さらなる高みへ-

T/L 講師：R. ブルーヘルマンズ(東京医大)

第61回
岐阜

2016/8/19-21

第62回
兵庫医大

2016/10/22-23

第63回
岐阜

2017/1/28-29

第64回
昭和大

2017/4/22-23

第18回
教務事務
職員研修

2017/5/10-12



医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第61回 医学教育セミナーとワークショップ

2016年 8月19日(金)PM ~ 21日(日)AM
岐阜大学 (医学部キャンパス)

セミナー1 世界標準の臨床実習はこれだ

ML 講師：前野哲博 (筑波大)、多田 剛 (信州大)

セミナー2 卒前・卒後医学教育での選抜におけるマルチプル・ミニ面接法

A 講師：吉村仁志 (沖縄県立南部医療センター・こども医療センター)

WS-1 新専門医制度時代の臨床研修 – 卒前から後期までのシームレスな教育を現場から考える

CD 企画：松崎淳人 (東邦大)、千田彰一 (日本専門医機構)、草場鉄周 (日本プライマリ・ケア連合学会)、前野哲博 (筑波大)、臨床研修専門官 (厚生労働省医政局医事課臨床研修推進室)、宮田靖志 (愛知医大)、小森 貢 (日本医師会)

WS-2 授業方略ピアレビュー大会

TL 企画：多田 剛・清水郁夫・森淳一郎 (信州大)、浅田義和 (自治医科大)

WS-3 アウトカム基盤型カリキュラムにおける学習者評価を考える

A 企画：伊藤彰一・山内かづ代・サルチェド ダニエル (千葉大)

WS-4 医師のプロフェッショナルアイデンティティ形成 (PIF) を考える

ML 企画：松井智子・佐藤元紀 (名古屋大)、加藤容子 (椋山女学園大)、錦織 宏 (京成大)

WS-5 アクティブラーニング：やる気・関わり・深い学び **FELLOWSHIP**

TL 企画：西城卓也・丹羽雅之・今福輪太郎・川上ちひろ・恒川幸司 (MEDC)

WS-6 看護教育における模擬患者養成ABC

ML 企画：阿部恵子・本田育美 (名古屋大)、藤崎和彦 (MEDC)、篠崎恵美子 (人間環境大)

WS-7 卒前から卒後に至る歯科医療面接のルーブリック評価を作ろう

A 企画：伊藤孝訓 (日本大松戸歯学部)、木尾哲朗 (九州歯科大)、長谷川篤司 (昭和大)、鈴木一吉 (愛知学院大)、吉田登志子 (岡山大)、藤崎和彦 (MEDC)

第62回
兵庫医大
2016/10/22-23

第63回
岐阜
2017/1/28-29

第64回
昭和大
2017/4/22-23

第18回
教務事務職員研修
2017/5/10-12

第65回
岐阜
2017/7/21-23

アソシエイト認定・フェロウシップ参加者随時募集中！



医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第62回 医学教育セミナーとワークショップ^o in 兵庫医大

2016年 10月22日(土)PM ~ 23日(日)AM
兵庫医科大学 西宮キャンパス

パネルディス
カッション-1

R

医学教育IRの挑戦～ブレイクスルーを求めて

企画：恒川幸司 (MEDC)、荒井貞夫 (東京医大)、中村真理子 (東京慈恵会医大)、岡田聡志 (千葉大)、
神山千晴 (岐阜大)

パネルディス
カッション-2

A

医学教育分野別認証では何を評価されるのか

企画：鈴木敬一郎 (兵庫医大)、福島 統 (東京慈恵会医大)、羽野卓三 (和歌山県立医大)

WS-1

模擬患者大交流勉強会

TL

企画：藤崎和彦 (MEDC)、比留間ゆき乃 (兵庫医大)、山口育子 (NPO法人ささえあい医療人権センターCOML)

WS-2

海外臨床実習に向けた準備教育

CD

企画：押味貴之 (日本大)、高橋優三 (兵庫医大)、James Thomas (慶應義塾大)

WS-3

CBRマトリックスで地域資源や患者生活の包括的診断をしてみよう

TL

企画：高橋敬子 (兵庫医大)、岩隈美穂 (京大)、尻無浜博幸 (松本大)

WS-4

TBLを体験しよう

CD

企画：成瀬 均・今西宏安・田中 進・橋本ゆかり (兵庫医大)

WS-5

学生のリサーチマインドを涵養しよう

CD

企画：鈴木敬一郎・森本 剛 (兵庫医大)、藤本眞一 (奈良県立医大)

WS-6

医療安全に配慮した多職種連携でのファシリテーター育成シナリオの作成

TL

企画：高橋敬子 (兵庫医大)、利木佐起子 (佛教大)、山口 円・平山亜矢子 (兵庫医大)

WS-7

学部生活の振り返りによるキャリア意識醸成の新手法

ML

企画：柴田綾子 (淀川キリスト教病院)、藤井達也 (山王病院)、荘子万能 (大阪医大)、照屋周造 (東大病院)

セミナ-

多職種連携教育ツールiPEDによる学生教育と患者教育の接続 —参加者インタビューの質的分析—

TL

講師：肥田 武 (名古屋大)

第63回

岐阜

2017/1/27-29

第64回

昭和大

2017/4/22-23

第18回

教務事務職員研修

2017/5/10-12

第65回

岐阜

2017/7/21-23

第66回

岡山大

2017/10/14-15

アソシエイト認定・フェロシップ参加者随時募集中!



医学教育共同利用拠点

岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468

〒501-1194 岐阜市柳戸1番1

E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第63回 医学教育セミナーとワークショップ

2017年 1月27日 (金) PM ~ 29日 (日) AM

じゅうろくプラザ/岐阜大学サテライトキャンパス (WS-1のみ)

セミナー The 地域卒学生の育て方 ~卒後のキャリア支援を見据えて~

ML

講師：村上啓雄（岐阜大学医学部附属地域医療医学センター/岐阜県医師育成・確保コンソーシアム）

WS- 1 第8回東海地区SP勉強会 & 交流会（拡大版）

A

~コミュニケーション分野のOSCEでの学生のパフォーマンスを評価してみよう！~

企画：東海地区SP養成者ネットワーク

WS- 2 卒後キャリア支援を見据えた地域卒学生の育て方

ML

企画：前田隆浩（長崎大）、長谷川仁志（秋田大）、阿波谷敏英（高知大）、片岡義裕（筑波大）、村上啓雄（岐阜大）

WS- 3 Road to Professional! 熟達化とその評価

FELLOWSHIP

A

企画：西城卓也・恒川幸司（MEDC）、園 真廉（神戸市立医療センター中央市民病院）

WS- 4 新人医療者が成長するためのシームレスな支援を目指す 学校編

CD

~学生を育てる人を支えるレシピ♡~

企画：布原佳奈（岐阜県立看護大）、三輪峰子・平岡佐織・田邊良美（岐阜大学病院）、川上ちひろ（MEDC）

WS- 5 行動変容を促す「動機づけ面接」を紐解こう

TL

企画：伊藤孝訓（日本大学松戸歯学部）、足達淑子（東京医科歯科大）、木尾哲朗（九州歯科大）、鈴木一吉（愛知学院大）、吉田登志子（岡山大）、藤崎和彦（MEDC）

WS- 6 グラフィックデザインの視点からみた魅力的な掲示物の作り方

TL

企画：山本政幸（岐阜大学教育学部美術教育）

WS- 7 LMS（Learning Management System）で教材を作ってみよう！

TL

企画：浅田義和・八木街子（自治医科大）

WS- 8 第12回 医学教育研究技法ワークショップ

R

「医療者教育の研究を立案してみよう」

企画：日本医学教育学会 教育研究委員会（大滝純司、宮田靖志、石川ひろの、伊藤俊之、大生定義、尾原晴雄、孫 大輔、武田裕子、向原 圭、森本 剛）

WS- 9 新人医療者が成長するためのシームレスな支援を目指す 臨床編

CD

企画：三輪峰子・平岡佐織・田邊良美（岐阜大学病院）、布原佳奈（岐阜県立看護大）、川上ちひろ（MEDC）

WS-10 どうやって始める？ IPE

CD

企画：田島嘉人・熊田ますみ・野原尚美・市田博子（平成医療短期大）

WS-11 学生さん、医療者教育研究の世界へようこそ！

TL

— 教育研究体験を通しての学びを考える —

企画：今福輪太郎（MEDC）、西屋克己（香川大）

第64回

昭和大

2017/4/22-23

第18回

教務事務職員研修

2017/5/10-12

第65回

岐阜

2017/7/21-23

第66回

岡山大

2017/10/14-15

第67回

早稲田大

2018/1/27-28

アソシエイト認定・フェロシップ参加者随時募集中！

MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第64回 医学教育セミナーとワークショップ in 昭和大学

2017年 4月22日(土)PM ~ 23日(日)AM
昭和大学 旗の台キャンパス

セミナー 超高齢社会を見据えた未来医療予想図

TL ~地域包括ケアの中の多職種協働~

講師：飯島勝矢（東京大高齢社会総合研究機構）

WS-1 臨床実習前IPL（多職種交流授業）を企画する

CD

企画：片岡竜太・倉田知光（昭和大）、小原真知子・鶴岡浩樹（日本社会事業大）、
松井由美子（新潟医療福祉大）、越野 寿（北海道医療大）、窪木拓男（岡山大）

WS-2 チーム医療臨床実習（病院・地域）をデザインしてみよう

CD

企画：木内祐二・倉田なおみ・田中佐知子・佐口健一・小林 文・弘中祥司・鈴木久義（昭和大）

WS-3 医学生と研修医のためのセルフケア教育をデザインする！

ML

企画：高宮有介・土屋静馬・杉原 桂（昭和大）、高屋敷明由美（筑波大）

WS-4 分野別認証 自己点検評価書の考え方・書き方

A

企画：高木 康（昭和大）、福島 統（東京慈恵会医科大）

WS-5 患者をその気にさせる「動機づけ面接」って何？

TL

企画：伊藤孝訓（日本大学松戸歯学部）、足達淑子（東京医科歯科大）、木尾哲朗（九州歯科大）、
鈴木一吉（愛知学院大）、吉田登志子（岡山大）、藤崎和彦（MEDC）

WS-6 プロフェッショナリズム教育の2つの義務から方略を考えよう

TL

~向上心的目標とアンプロフェッショナルの回避~

企画：日本医学教育学会 プロフェッショナリズム・行動科学委員会（宮田靖志、野村英樹、朝比奈真由美、
井上千鹿子）

WS-7 明日からできる、アクティブ・ラーニング

TL

~さまざまなアクティブ・ラーニング・モデルを共有する~

企画：日本医学教育学会 卒前教育委員会（泉 美貴、神代龍吉、青木昭子、阿部幸恵、伊藤俊之、小田康友、
小林直人、鯉淵典之、辻 美隆、中島 昭、中村真理子、長谷川仁志、廣井直樹、三木洋一郎）

WS-8 教学IR実践ブラッシュアップ ~より洗練された医学教育IRに向けて~

R

企画：恒川幸司（MEDC）、荒井貞夫（東京医科大）、中村真理子（東京慈恵会医科大）、
岡田聡志（千葉大）

WS-9 研修医のキャリアプランニング ~自分らしいキャリア選択を考える~

ML

企画：賀來 敦（岡山家庭医療センター）、里見なつき（東海大）、蓮沼直子（秋田大）

第18回
教務事務職員研修
2017/5/10-12

第65回
岐阜
2017/7/21-23

第66回
岡山大
2017/10/14-15

第67回
早稲田大
2018/1/27-28

第68回
岐阜
2018/6/2-3

アソシエイト認定・フェロシップ参加者随時募集中！



医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL: 058-230-6470 FAX: 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail: medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第65回 医学教育セミナーとワークショップ

2017年 7月21日(金)PM ~ 23日(日)AM
岐阜大学(医学部キャンパス)

2017
夏

- セミナー 「Community-based Medical Education : Longitudinal Integrated Clerkships」 教育資源としての地域
CD 講師：高村昭輝 (金沢医科大学)
- WS-1 魅力的なIPEを作ろう
TL : IPEを学ぶオンラインコース+ワークショップ Online Course+
 企画：川上ちひろ・今福輪太郎・恒川幸司 (MEDC)、前野貴美 (筑波大学)、鈴木一吉 (愛知学院大学)
- WS-2 卒後臨床研修事務職員の役割 : ペーパーワークを越えて
ML 企画：青野真弓 (聖路加国際大学)、浅川麻里 (堺市立総合医療センター)、尾原晴雄 (沖縄県立中部病院)、鈴木康之 (MEDC) ほか
- WS-3 臨床の場ですぐに活かせるフィードバック・スキル
TL 企画：前野哲博 (筑波大学) ほか
- WS-4 医療現場での電話相談・報告 : スタッフの「苦手意識」を克服しよう
TL 企画：小西恵理 (松江赤十字病院)、阿武茉莉 (鳥取大学)、嶋岡 鋼 (国際医療福祉大学塩谷病院)、赤嶺陽子 (長野県立病院機構)、布原佳奈 (岐阜県立看護大学)
- WS-5 “アクティブ・ティーチング”で学習者を惹きつける！ FELLOWSHIP
TL 企画：西城卓也・今福輪太郎 (MEDC)、西屋克己 (関西医科大学)
- WS-6 症例検討会による行動科学・社会科学の教育 : 医療人類学の場合
TL 企画：錦織 宏 (京都大学)、飯田淳子 (川崎医療福祉大学)、島園洋介 (大阪大学)、宮地純一郎 (浅井東診療所)
- WS-7 第13回 医学教育研究技法ワークショップ
R 「医療者教育の研究を立案してみよう」
 企画：日本医学教育学会 教育研究委員会
- WS-8 看護における模擬患者参加型教育をデザインする
ML : SPを活用したシナリオ作成からリフレクションの方法まで
 企画：阿部恵子・麦島健一・米谷祐美・本田育美・淵田英津子 (名古屋大学)
- WS-9 専門医の質ってどう測るの？ : 医療現場での評価
A 企画：日本医学教育学会 卒後・専門教育委員会

アソシエイト認定・
フェロシップ参加者
随時募集中！

		プログラム				
21日(金)	午後	WS-1~	WS-2~			
	午前	~WS-1	~WS-2	WS-3	WS-4	
22日(土)	午後	WS-5~	WS-6~	WS-7~	WS-8~	WS-9
	夕方	セミナー				
	夜	懇親会				
23日(日)	午前	~WS-5	~WS-6	~WS-7	~WS-8	

第66回
岡山大
2017/10/14-15

第67回
早稲田大
2018/1/27-28

第68回
岐阜
2018/6/2-3

第69回
信州大
2018/8/18-19



医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター
TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第66回 医学教育セミナーとワークショップ in 岡山大学

2017年10月14日(土)PM ~ 15日(日)AM
岡山大学(鹿田キャンパス)

2017
秋

セミナー 医療系学部における国際バカロレア入試と学部教育

A 講師：田原 誠・Sabina Mahmood (岡山大学)

WS-1 「人間を全人的により深く理解しようと試みる」

CD

行動科学の導入とそのアウトカム

企画：三好智子・飯田淳義・山根正修 (岡山大学)、
中村千賀子 (東京医科歯科大学/DIPEX-japan)

WS-2 多職種トレーニング (IPE) プログラムをブラッシュアップしよう

CD

企画：万代康弘・保科英子・山田隆子・名和秀起 (岡山大学)、溝尾妙子 (渡辺病院)

WS-3 医学教育の視点で職場の男女共同参画を考える

ML

企画：片岡仁美・川畑智子・勅使川原早苗・小比賀美香子 (岡山大学)

WS-4 模擬患者参加型教育におけるファシリテーションスキルを磨こう！

TL

企画：吉田登志子・猪田宏美 (岡山大学)、
前田純子・廣田順子 (NPO法人・響き合いネットワーク 岡山SP研究会)、
阿部恵子 (名古屋大学)、藤崎和彦 (MEDC)

WS-5 模擬患者大交流勉強会

TL

企画：藤崎和彦 (MEDC)、前田純子 (NPO法人・響き合いネットワーク 岡山SP研究会)

WS-6 「どのように人と現場は変わっていきけるか」医療人の態度教育を考えよう

ML

企画：山根正修・飯田淳義 (岡山大学)

WS-7 ゲームフィクションによる楽しい「ふりかえり」手法開発

TL

企画：照屋周造 (東京大学)、柴田綾子 (淀川キリスト教病院)、近藤 猛 (名古屋大学)

WS-8 医学教育における学生参与の可能性を考えよう

ML

企画：岡山大学医学部学生教員連絡会議 (学生：今村竜太・大塚勇輝、教員：三好智子)、
池尻達紀 (京都大学・学生)、立道理乃 (高知大学・学生)、鶴飼翔一 (広島大学・学生)

— opening session —

座禅で感じる、医療現場におけるマインドフルネスの重要性

企画：三好智子・伊野英男 (岡山大学)、堀口宗彦 (曹源寺副住職)

アソシエイト認定・
フェローシップ参加者
随時募集中！

		プログラム				
		opening session				
14日(土)	午後	WS-1	WS-2	WS-3	WS-4~	WS-5
	夕方	セミナー				
	夜	懇親会				
15日(日)	午前	WS-6	WS-7	WS-8	~WS-4	

託児完備
(要予約)

第67回
早稲田大
2018/1/27-28

第68回
岐阜 併催
第19回教務事務職員研修
2018/6/1-3

第69回
信州大
2018/8/18-19

第70回
自治医大
2018/11/3-4

MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

TEL : 058-230-6470 FAX : 058-230-6468
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail : medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索

第67回 医学教育セミナーとワークショップ in 早稲田大学

日程：2018年 1月27日(土)・28日(日) 会場：早稲田大学(早稲田キャンパス)

Seminar **グローバル・リーダーシップと医療**

ML



グローバルリーダーの要件

太田正孝 (早稲田大学商学学術院教授)



日本・シンガポール・中国における ヘルスケアの展開

－在宅医療、遠隔医療、ロボット－
武藤真祐 (医療法人社団鉄祐会理事長、稲門医師会)

Panel discussion 1

ML

様々な場で必要性が 高まるリーダーシップ

- ✓ 女性活躍の職場におけるマネジメント
～航空会社の事例～
- ✓ 裁判事例から見えてくる、
医療従事者に求められる資質や能力
- ✓ グローバル・リーダーシップに必要なグローバルマインド
- ✓ 医師に必要なリーダーシップとは
－地方大学の総合診療医の挑戦－
- ✓ 危機感 ～小児外科医療の質の確保と安全かつ
継続的な医療体制の構築

Panel discussion 2

ML

多様性が生む患者・ 医療者パートナーシップ ：回り道医師たちとともに考えよう

- ✓ 回り道して外科医になった経験から
- ✓ 日本IBM(株)社員から医師へ
～『回り道医師』から見た営業研修と医療者教育～
- ✓ 医療者教育に、がんサバイバーが果たせる役割とは
- ✓ 回り道、多様な経験と緩和ケア
- ✓ 医師からの『回り道弁護士』が考える
『回り道医師』の役割：相違点、共通点、方向性

Panel discussion 3

ML

グローバル化の中で 文化を越える

- ✓ 国の文化について
- ✓ Important considerations when training
Japanese healthcare professionals in
cross-cultural communication
： a personal perspective
- ✓ 組織内マネジメントにおける文化・ダイバーシティ
- ✓ 医療ツーリズム
：日本の医療機関のグローバル化における課題

Workshop 1

A

多職種連携における 職種役割と連携 パフォーマンスの評価と省察

Workshop 2

A

熟達化とその評価

FELLOWSHIP

Workshop 3

TL

自走するチームを創るチーム コーチング：個人からチームを 対象としたコーチングの時代へ

* 記号 (ML等) は、アソシエイト認定のための学習領域を表しています。詳細はホームページ「アソシエイト・フェロシップのご案内」をご覧ください。

1月27日(土)				
13:00-16:00	PD-1	PD-2	WS-1～	WS-2～
16:30-18:10	セミナー			
18:30-20:00	懇親会 レストラン「森の風」			
1月28日(日)				
9:00-12:30	PD-3	WS-3	～WS-1	～WS-2

2018/6/1-3
68th 岐阜

2018/8/18-19
69th 信州大

2018/11/3-4
70th 自治医大

2019/1/26-27
71st 岐阜

2019/5
72nd 岐阜

MEDDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY

医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター

Creation of Trends in Medical Education

TEL: 058-230-6470 FAX: 058-230-6468 〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
E-mail: medc@gifu-u.ac.jp

MEDC

検索



